
M T F 症候群（メタモルフォーゼ・シンドローム）

詩月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メタモルフォーゼ・シンドローム
MTF症候群

【Nコード】

N2938Q

【作者名】

詩月

【あらすじ】

メタモルフォーゼ・シンドローム
MTF症候群によって、男性から女性に性転換した千人目の発症例、
あずみのゆうひ はじまり
安曇野夕陽。始祖の十人と呼ばれる容姿端麗・頭脳明晰な姉たちに、
末の妹としてひたすら守護され、溺愛され、女性として成長していく物語。現在、ファンタジー成分増量中。

作者からのお願いです。執筆のモチベーション維持の為に、この作品をいいなと思ってくださった方は、各種評価及び感想等をお

寄せてください。お待ちしております。

1―1 目覚めし時（前書き）

一度は挑戦したいと思っていたTS物。

設定を思い付いたので、突発的に書いてしまいました。

需要があるようでしたら、定期的に書いていきたいと思えます。

楽しんで頂ければ幸いです。

1―1 目覚めし時

目が覚めると、光に網膜を白く灼かれた。

涙に滲んだ目をしばらく瞬かせていると、ようやく周囲の状況が把握できてくる。

視界に真っ先に入るのは天井にある照明器具。光度は低く抑えられている。

この程度の光を刺激的に感じるなんて、余程長い時間眠りに就いていたようだ。

軽く身動きすると身体中の関節が軋^{きし}んで、悲鳴を上げた。

乱れた息が落ち着くのを待って、再び瞼を上げて首をゆっくり巡らすと、口には酸素吸入器のマスクが、さらに身体中の至るところには点滴を始め、他にも数多くのチューブが取り付けられているのに気付く。

チューブの先をそれぞれ目で追うと、様々な計測器に伸びているのが見えた。

テレビドラマで見るようなモニターが、血圧や脈拍、体温等の各種データを数値化してリアルタイムに映し出し、定期的に繰り返し返されるパルス音と共に、心電図は一定のパターンで綺麗な波形を描き続けている。

『病院？ おれ、入院してる？ 何で？』

彼の思考がようやく稼働し始め、彼自身が持つ病院に関する貧弱な知識が教えるところによると、この部屋はどうやら集中治療室と

呼ばれるものらしい。

自分の容態はそんなに重体だったのかと不安になり、パニックに陥りそうになった時、視界の端でスライドドアが開くのが見えた。

パタパタと小走りに近づく足音が聞こえると、額にそつと柔らかな手のひらが置かれ、心の底からホッとしたような声がした。

「よかった、やっぱり意識が戻られたんですね。そろそろお目覚めになる頃だとは思っていたんですけど、最初はモニターを見間違えたかと思っちゃいました。心配しないでください、今院長先生を呼びますから」

何処か違和感を覚えながらも、不思議と落ち着くその言葉の響きに不安が薄れ、彼の全身から力が抜けていく。

カルテらしい書類を挟んだクリアファイルを小脇に抱え、淡いピンクのナース服に身を包んだ女性看護師は、優しい言葉を彼に投げかけながら、計測器のデータのチェックを一通り終えると、壁に設置されている電話で何処かに連絡を取り始める。

受話器を戻して数分も待たずに、スライドドアが再び開くと、白衣を身に纏ったまるで少女のようにしか見えない女医が、女性看護師ふたりを引き連れ室内に入ってきた。

「きみの主治医の芙蓉だ。気を楽にして」

ベッドサイドに立った女医は、胸ポケットからペンライトを取り出すと、彼の瞳孔の反射機能をチェックし始める。

間近で見る彼女はとにかく美しかった。

漆黒の艶やかなストレートの髪を肩に触れる辺りで綺麗に整え、毛先にはシャギーが入っている。

顔は静脈が透けて見えそうなくらいに色が白く、仄かに漂う妖艶さと清廉高潔な美貌の危ういバランスが他人の心を否応なくざわめかせ、一瞬で惹き付けてしまうような魅力があった。

例え雑踏に紛れていても、決して埋もれる事のない、凡庸さとはまるで無縁の雰囲気^{オーラ}を全身から放っている。

誰かに似ているとずっと考えていた目の前の女医が、ライバル不在の女王^{クイーン}と呼ばれるトップアイドルの“レイ”に、髪の色を除いて双子のようにそっくりな事に気付くと、彼の胸は不意に高鳴った。

心電図の波形が乱れていないか、意識してしまう程に。

あまりの恥ずかしさに、彼は何処かへ消え入りたくなってしまう。

「ちょっと！ 何であんたたちまで来るのよ。新人ひとり残してナースステーション空けるなんて、他にコールが入ったらどうすんの？」

「ひとりで判断できなかったら呼ぶように言っているから、いいじゃない。ここにいて分かってるんだし」

「そうよそうよ、ひとりで抜け駆けするなんてズルイ。十年ぶりにご光臨された“姫”がお目覚めになったのよ、しかもレアな千人目。会いたいって思うのが普通でしょ」

「しつ、仕方ないじゃない。わたしが最初に“姫”のお目覚めに気付いたんだから」

「でもホント、院長を^{せんせい}始め皆様方にそつく——」

「きみたち！」

小声で囁きあっていた看護師たちの^{こえす}囁りを、女医が遮った。声を潜めてはいても、ベッドに寝ている彼にもまる聞こえで、彼女たちの言葉に、拭いきれない激しい違和感があった。自分が何を知りたいのかもよく分からないまま、彼が口を開こうとした時に、女医の叱責が看護師たちに飛んだのだ。

「病室で私語は慎みたまえ。患者をいたずらに混乱させてどうする」

「はっ、はい！ 申し訳ありません」

三人が揃って頭を下げるのを振り向きもせず、手慣れた様子で全てのチェックを終えると、女医は最後にひとつの質問をした。

「名前は？ 自分が誰か分かっているかね」

「あ、安曇野夕陽あずみのゆうひです。高校入学したての十五才、性別は男です」

ここでも違和感。のどがカラカラに渴いているせいか、ひどく嚔れた声が出たのが彼の気に障る。

「ふむ、いい名だ。改名の必要はなさそうだな。それに聡さとい。質問の意図をちゃんと理解してくれて助かるよ。記憶の混濁は見られないようだ。合併症や感染症を怖れる時期もとうに過ぎているしな——ああ、すまん。今外してやろう」

のどに手を伸ばそうとしていた彼を制して、彼女は酸素吸入器のマスクや各種チューブを彼の身体から取り外していく。

「院長先生？ では、一般病棟へ移って頂けるよう手配いたしますか？」

「そうだな、後はきみたちに任せるか。これからいろいろ忙しくなるのでな。わたしの大切な末の妹だ。つつがなきよう、よろしく頼む」

彼が目覚めてから一番の混乱は、女性看護師の質問に答えた、女医によるこの一言によってもたらされた。

「おれが、妹!？」

思わず叫んだその声は、まだ少し掠れてはいたけれど、思春期の少女を思わせる、甘く涼やかな高音域に抜けるソプラノボイスだった。

1―2目覚めし時

とろけるような、甘く囁くシュガーボイスが耳朶をくすぐった。

「ねえ。夕陽ちゃん、うなされてるみたい」

「可哀想、よっぱどショックを受けたのね」

右の瞼に冷たさが心地よい誰かの細い指先が置かれると、そつと目尻に向けて拭われた。

左の瞼にはマシユマロみたいに柔らかな別の誰かの口唇が触れ、ちゅつと小さな音を立てる。

「あ、花織ずっるーい」

「何よー、菜摘。あんたもすればいいじゃない」

「言われなくなつて」

「ほら、涙零れちゃっよー」

再びちゅつと何かを吸う音がして、夕陽はそれが自分の涙なのだとようやく気付く。

どうやら泣きながら眠っていたようで、誰かが溢れ出る涙を口唇で吸い取ってくれたらしい。

その濡れた何処か淫靡な響きと、むせかえる程に漂う甘酸っぱい柑橘系の匂いが、夕陽の胸を妙に落ち着きなく、ざわめかせた。

さらには患衣越しに感じる、左右の二の腕を抱え込むようにして押し付けられている、柔らかなふくらみが形を変えるたびに、頬がかあつと熱くなり、呼吸が乱れ息苦しくなる。

同時に、ベッドで眠る自分の身体を挟むようにして、両脇に寄り添う人の気配に戸惑いを覚えた。

それが誰なのかを確かめようと、瞼をそつと開けて様子を伺ってみる。

「あ、夕陽ちゃん、目が覚めた？」

「葵姉ー、夕陽ちゃん気付いたから診てあげて」

天使がふたり、そこにいた。

双子よりも遥かにそっくりな、鏡像と実像の関係にも似た全く同じ二つの顔が、左右シンメトリーに上から夕陽を見下ろしていた。

地上に降りた天使を具現化したとしか思えない存在が、お互いの吐息を感じるくらいの間近で、夕陽に向かって優しく笑いかけてくれているのだ。

「レイが、ふたり……？」

彼女たちは夕陽がこれまでに見た、誰よりも可憐で美しく、そして魅力的だった。

それもそのはず、夕陽の目の前にいるのは、この数十年間トップアイドルの座を誰にも明け渡す事なく守り続けているライバル不在の女王——水無月黎^{みなづきれい}だった。

絹糸のように艶やかな髪は、蜂蜜にも似た琥珀色に染められ、豪奢に波打ちながら腰の辺りまでを覆っている。

くつきりとした二重瞼に長く震える睫毛、潤んだ瞳は灰色で、こじんまりした鼻にふつくらとした深紅の口唇。

関節の存在をまるで感じさせないしなやかで華奢な身体を、細かなレースとフリルをふんだんにあしらった白のシフォンワンピースに包む姿は、精緻なアンティークドールのようなだ。

人工的な造形美にも勝る華やかさと共に、そこはかたない色気が醸し出されている様はまさに絶妙なバランスで、夕陽の瞳を捉えて離さない。

「本物？ どっちがレイ？」

ふたりのレイは、その愛らしくつぶらにきらめく灰色の瞳を全く同じタイミングで細めると、慈愛に満ちた視線を夕陽に落とした。彼女たちは、ふふつと含み笑いを小さく洩らすと、甘いシュガー

ボイスで交互に囁く。

「どっちも本物だよー、夕陽ちゃん」

「でもね、ふたりだけでもないんだ」

その言葉の意味を推し量る間もなく、夕陽が横になっているベッドの上半身側が静かに角度を変え始めた。

夕陽から見て左側の少女が、ベッドサイドにあるコントロールパネルを操作して、ベッドのリクライニング機能を起動させたのだ。^{オン}

微かなモーターの駆動音とギアが噛み合う小さな振動が、夕陽の背中に微かに伝わってくる。

ふたりのレイはベッドの動きに合わせて、ゆっくりと身を起こしていく。

夕陽の視界が徐々に天井から移動していくと、ベッドの足許側に誰かがもうひとり佇んでいる事に気付いた。

「レイ……っ」

そこにいたのは三人目のレイだった。

「芙蓉だ、夕陽くん」

「——っ？」

「今後は、葵と呼んでくれ。気分はどうかね？ 催眠鎮静剤の効果がまだ残っているだろうから、若干だるいかもしれないがわたしが側にいる。きみは何も心配しなくていい」

夕陽は目の前の状況に思考が追い付いていかずに、様々な感情で胸がいつぱいになる。

同じ室内に揃う天使の容姿を持つ三人は、どう見てもトップアイドルの水無月黎にしか見えなかった。

夕陽の主治医を名乗る芙蓉葵だけは、瞳と髪の色など細かな差異があるが、間近に見るその姿はやはり同一人物としか思えない。

だが、夕陽が真に驚愕するのはここからだった。

芙蓉葵の言葉どおりに催眠鎮静剤の効果が残っていなければ、再びパニック状態に陥っていたに違いない。

「ふうん？ めずらしいじゃん、芙蓉。あんたが下の名前で呼ぶ事を許すなんて」

「全くだわ。朱理^{あかり}といい恵那^{えな}といい、やけにご執心ね。まあ、気持ち^{あかり}は分かるけど」

白衣のポケットに手を突っ込んだまま佇み、取り澄ました表情を崩さない芙蓉葵の背後から、くすくすと笑い声が起きた。

タイミングを同じくして、夕陽の背中に伝わっていたモーターの駆動音とギアが噛み合う振動が止んで、ベッドのリクライニング機能が停止する。

視界に入る予想外に豪華で、リゾートホテルの一室のような病室に驚く暇もなく、夕陽の思考は千々に乱れた。

芙蓉葵の背後に、さらに七人のレイがいたからだ。

彼女たちは室内の思い思いの場所に位置取り、皆がそれぞれに夕陽に向けて柔らかな視線を送っていた。

「歓迎するよ、安曇野夕陽。千人目の妹姫。わたしたちは“Project・KAGUYA”創設メンバー、始祖^{はじまり}の十人だ」

1―2目覚めし時（後書き）

お待たせしました。遅くなりましたが、第二話です。今後はなるべく十日以内に一話更新のペースで行きたいんですが、遅くなっても見捨てられないよう内容でも頑張ります。

執筆の励みになりますので、夕陽共々、作者の方も応援よろしくお願いします。

1―3 目覚めし時

処女雪を思わせる色素の抜けた白が眩しかった。

白無垢を身に纏った花嫁のように髪の色も、肌の色も睫毛の色さえも全てが白い。

身体を構成するあらゆる部分の線が細く、儚げではあるが病的な白さではない。

透明感ある肌には毛細血管が透けて見え、頬と口唇をうつすらと桜色に染めている。

その姿を見つめる双眸を彩る紅くれないだけが、唯一鮮やかな彩りで、ミステリアスな雰囲気を目許に漂わせている。

あるいは精霊が受肉すれば、このような現実離れした美しさを体現できるのかもしれない。

夕陽は鏡の中に映る、その白い少女に目を奪われたまま、視線を外す事ができなかった。

「ねえねえ夕陽ちゃん、大丈夫？」

「身体辛い？ 気分はどう？」

白い少女の両側、頬と頬をくっつけるようにして、ふたりのレイが鏡と一緒に覗き込んだ。

「今度は大丈夫です。最初から“そう”って分かってれば、ちゃんと耐えられる」

夕陽は溜息を吐きたくなる気持ちをとにかく抑えると、微かに震える手に気付かれないよう、そっと鏡をシートに伏せた。

「でもさー、どうして夕陽ちゃんだけ真つ白^{アルビノ}なんだろうね。わたしたち姉妹よりも、さらに先祖返りしてるって事？」

「それってもしかして、もうひとりのイブ（……）そのものだったりして？ わたしたちよりもずっと綺麗だから妬けるよねー」

ふたりの会話には夕陽にとって、決して聞き逃す事のできない言葉がいくつか含まれていたが、今は気持ちが現状に付いていくだけで精一杯で、いちいち問い質す気力も湧かなかった。

顔の他にも確認したい処はいろいろとあったけれど、さすがにこの場でそれをするのはためらわれる。

あきらめの感情を押し隠して、全身の彩りと、まだ男だった時のまま短い髪以外は、自分と全く同じ容姿を持つふたりの姉に向けて微笑むと、彼女たちは何故か目許を朱に染めて、お互い真反対の方向に顔を反らして俯いた。

「朱理と恵那はつまらない憶測はやめて、いい加減ベッドから降りるんだ。悪戯に混乱させてしまっただけだろう？ さあ、早く退きたまえ。夕陽くんの体温と脈を診る邪魔だ」

相変わらず彫刻のように無表情な芙蓉葵が、声音に混じる不機嫌さを隠そうともせず、ふたりのレイを夕陽の身体から引き剥がしにかかる。

「や、ちよつとー。葵姉横暴お。分かつたつて、痛あい。ベッドから降りるから、そんなに強く腕を掴んだりしないで。離してよ、もうー」

「あんたもこりないわよねー、花織。芙蓉姉の事、下の名前で呼ぶのそろそろあきらめたら？ほんとに嫌われちゃっても知らないよー？」

朱理花織と恵那菜摘は追い立てられるようにしてベッドから這い降りると、恨めしげな視線で芙蓉葵を見つめた。

夕陽から見て、左側のベッドサイドに立った朱理花織の瞳は涙で潤み、“夕陽ちゃんだけずるい”とか“葵姉の意地悪”とかぶつぶつ呟いているのを、その対面に立つ恵那菜摘が苦笑しながら眺めている。

「騒々しくして、すまないな。わたしと年はそう変わらないんだが、何時までも子供っぽくて困っているんだ」

ぎしり、と。小さな音を鳴らし、夕陽の左脇のベッドのスプリングを沈めて、芙蓉葵がシーツに皺を寄せないように気を付けながら腰を下ろした。

朱理花織と恵那菜摘の香りとは違う、ボディソープとシャンプー、そして仄かに漂うメンソールの匂いが、夕陽の鼻腔を^{くすぐ}擽る。

「手を出してくれるかい？」

「あ、はい」

芙蓉葵は何か大切なものを取り扱うかのように、差し出した夕陽の腕をそつと受け取る。

その仕草はまるで、病に倒れた深窓の姫君を見舞う王子のようだと夕陽は思った。

あるいは、それがもし騎士であるなら、きっと床に膝を付いて頭を垂れるのだろう。

以前の夕陽ならまず思い浮かべたりしないような、甘美な想像にその身を浸す。

脈拍を診る芙蓉葵の丁寧な扱いに、夕陽の心はとろとろに溶けそ

うになっっていく。

悪い気はしなかった。

もし今、腕を引かれたなら、ためらう事なく芙蓉葵の胸に飛び込んでいってしまいそうなくらいに酔っている自分に気が付いて、夕陽はふと怖さを覚える。

目の前にいる芙蓉葵は、コニセックス中性的な雰囲気をもその身に纏まとっている。夕陽は彼女に対して、男の性を意識しているのか、あるいは女の性を意識しているのか、自分で自分が分からなくなってしまう。

『ところで夕陽くん。返事はしなくていいからそのまま聞いてくれ。きみはもう、そろそろ限界なんじゃないのかい？』

『——え』

考え事に耽ふけっているうちに、いつの間にか芙蓉葵の顔がすぐ間近に迫っていて、耳許で小さく囁かれた。

思わず声を上げそうになってしまった夕陽は、必死にそれを押し留める。

『まだ感覚が鈍いかもしれないが、カテーテルを挿入してちゃんと処置がしてある。この部屋の誰にも気付かれる事は絶対はない、保証するから安心したまえ』

『——っ！』

『目が覚めてから口にしたのはアイソトニック飲料だけだったが、あれは吸収が早いからな。無理しなくていい。何、今までずっと点滴だったんだ。単なる体液の排出にしかすぎないと考えればいいんだ、恥ずかしがる事はないさ』

芙蓉葵の言葉は、夕陽の体調を的確に衝いていた。

もうかなり前から、夕陽は生理的欲求を覚えていたのだが、このうえない羞恥心さいなに苛まれて、誰にも言い出せずにずっと耐えていたのだ。

自分でもそれと気付かない内に、膝と膝を擦こすり合わせるように、もじもじとさせてしまったのかもしれない。

さすが医者だとその観察力に驚きながらも、夕陽は全身の血が逆流しそうになるくらいに取り乱していた。

室内にいる残り九人の視線を、嫌でも気にせずにはいられない。

特に、今はベッドサイドからほんの少しだけ離れて立っている、芙蓉葵を除けば最も距離の近い朱理花織と恵那菜摘には、絶対に知られたくはなかった。

夕陽は人知れず、焦りと恥ずかしさで思わず身悶えてしまいそうになる。

「ねえー、夕陽ちゃん。顔赤いよ、どうかした？」

「葵姉、夕陽ちゃんに何て言ったのー？ 何か変」

芙蓉葵は、朱理花織と恵那菜摘の言葉を彼女たちに背中を向けたまま無視をして、寒さに凍える“白兔”のように小刻みに震えている夕陽の耳許に、紅く濡れた口唇をさらに近付けていく。

『がまんは身体によくないな』

彼女はひと言そう呟くと、夕陽の耳の孔に『ふっ』と小さく吐息を吹きかけた。

「ひゃん——っ！」

不意をつかれた夕陽は思いがけないその感覚に、弾かれたように背筋を反らす。

「あっ」

同時に味わう何とも言えない解放感に、夕陽は自分でもそれと気

が付かないまま、小さな溜息を漏らしていた。

「……………芙蓉せんせえ」

「葵だ。楽になつたろう？」

はっと我に返った夕陽は目尻に涙を浮かべ、真っ赤に染まった顔で芙蓉葵を睨み付けるが、それ以上は何も言えなくなってしまう。口唇を微かに緩めただけの、芙蓉葵の“笑顔”があまりに綺麗だったからだ。

その一瞬、その瞬間だけは、夕陽は間違いなく芙蓉葵の虜ユグイになっていた。

「あー！　なあにー、夕陽ちゃん、その表情？」

「芙蓉姉、もういいでしょ？　夕陽ちゃんから離れて」

芙蓉葵は詰め寄る二人のレイを軽くなすと、メンソールの香りを残して、夕陽の許から離れていった。

1—3 目覚めし時（後書き）

お待たせしました。目覚め編は、あともうちよつとだけ続きます。
なるべく早く済ませて、本編に入りたいと思ってるんですが。

1—4 目覚めし時

男の性から女の性への遺伝子レベルでの完全なる Metamorphose を称して、正式には Male to Female 症候群と呼ばれている。

一般的にはメタモルフォーゼ症候群、あるいは単に MTF 症候群と呼ばれる場合が多い。

種の限界に迫る美貌と一段上の知性、そして不死性の獲得。発症の契機は皆様々だが、罹患者の特徴は全て一致する。

その原因については、諸説乱立して入り乱れているが、もつかりの長きに亘つていずれも推測の域を出てはいない。

症例最古の記録は、開国直後の明治時代にまで遡る。

ほぼ時を同じくして十名の人間が発症し、初のメタモルフォーゼを果たした事が確認されているのだ。

だが、この衝撃的な出来事は当時は公にされる事はなく、親族及び医療はもちろん各方面の関係者全てに箝口令が敷かれ、完全な機密事項扱いとなる。

最初に発症した十名が医療の現場で知的好奇心の探究によるモルモット扱いをされず、マスコミの商業主義による報道の自由という名の脅威に晒される事もなく、知る権利を振りかざす国民の興味本位の視線から隔離されたのは、後に続く罹患者たちにとっては非常に幸運だったと言わざるを得ない。

彼ら彼女たち最初の十名は、時の政権でさえ介入する事の許されない強力な権力の庇護の許にあつたからだ。

華族筆頭六公爵家である、朱理、亜久根、雨月、桂木、儀同、由布院。

四大財閥の名門である、一条、恵那、芙蓉、御座。

それぞれが家督あととりの立場に生まれついた彼「彼女たちは、境遇を同じくする者たちをあらゆる差別的迫害やそれに類する行為から守護すべく、自ら始祖はじまりの十人を名乗ると同時に後のProject K aguyaを起ち上げ、その恵まれた人的及び経済的ネットワークをフルに駆使して、国内の有力勢力に属するありとあらゆる機関と要人たちを次々に籠絡ろうらくしていった。

二十一世紀初頭現在。旧六華族及び旧四大財閥が中心となった、メタモルフォーゼ症候群患者に対する支援保護活動は、国内では最早大衆レベルにまで浸透し、確実に根付いている。

これは、そんな時代にメタモルフォーゼ症候群を発症し、国内千人目の“姫”となった、安曇野夕陽が紡ぐ物語――。

「鏡を見てようやく納得できたみたいだね、安曇野夕陽。あなたは間違いなく、わたしたちの妹姫になったのよ」

部屋の中央にセッティングされている、ベルギーから直輸入された重厚な応接セット。

それを構成する、オーク無垢のフレームにアイボリーの気品溢れる本革ソファから、ひとりの女性が立ち上がった。

黒のタイトなジャケットをトップに、ボトムにはやはり黒のミニ

スカートを合わせたスーツ姿。

くびれが強調された服のラインはとても見栄えがよく、腰の位置がスーパースモデル並みに高い。

黒のストッキングに包まれた脚は無駄な肉付きなどまるでなく、スラリと長くしなやかだった。

髪は顎のラインで切り揃えられた、アッシュグレーのワンレングス。

その色素の薄い毛髪は、全身を黒でまとめたコーディネートによく映えている。

瞳の色はやはり毛髪と同系色の灰色で、当然ながら彼女もまた艶めいた雰囲気を持ちハツとする程美しい。

立ち居振る舞いも含めて、クールビューティという言葉で呼ぶに相応しい存在感。

彼女は、一般に浸透している“姫”の基本的なイメージを、始祖の十人の中に於いても、最も体現しているとされる至高のひとりだった。

「……でも、いきなりすぎる。いきなり、こんなっ」

顔を歪めながら、無意識の内に喉をバリバリと掻きむしり始めた夕陽の両手を、朱理花織と恵那菜摘のふたりが慌てて掴んだ。

「ダメだよ！ 夕陽ちゃん！」

「芙蓉姉！　夕陽ちゃんが！」

ふたりの悲鳴混じりの声に、振り返った芙蓉葵が血相を変えて、再び夕陽の許に駆け寄った。

「やめたまえ！　夕陽くん！」

朱理花織と恵那菜摘の腕を振りほどこうとして暴れる夕陽の両肩を掴み、芙蓉葵は焦点の合っていない瞳を覗き込んで自分に意識を向けさせる。

「だって声が変わんだ！　腕だって、こんなに白くて細い——」

夕陽は全てを拒絶するかのようになり芙蓉葵から視線を逸らすと、嫌々とかぶりを振った。

「葵姉！　夕陽ちゃん泣いてる」

「芙蓉姉、どうしたらいいの？」

芙蓉葵は夕陽をそつと抱き締めると、しばらく夕陽が暴れるままに任す。

「大丈夫、感情が一時的にオーバーフローしただけだ。薬の効果が切れてきたせいもあるだろう。今のきみは本来のきみじゃない。自分を失ってはダメだ」

焦燥にも似た思いを誰もが胸中に抱きながら、ジリジリとした時がただ刻まれ続けていく。

やがて、抵抗が弱々しくなった頃合いを見計り、芙蓉葵が優しく諭す口調で話しかけ始めると、夕陽はようやく相手に身体を預けるようにして全身から力を抜いた。

傍らでいつの間にか待機していた女性看護師に芙蓉葵が目配せすると、彼女たちは三人がかりの見事な連携と手捌きで、夕陽の白く細い首筋に赤く浮き上がったみみず腫れを処置し始める。

“……不味い事になったな”

芙蓉葵は夕陽の頭を撫でてやりながら、胸中でひとり苦い呟きを洩らす。

初期の段階でストレスに耐えきれず自傷行為に走ると、現状を受け入れるのに時間がかかってしまう場合が多いからだ。

「いい子だ、落ち着いて。きみがきみである事に何も変わりはないだろう?」

騒ぎが落ち着くのを待つて、ソファから立ち上がったアッシュグレーの髪の女性がゆっくりとベッドに近付いて行き、夕陽の頭を撫で続ける芙蓉葵に声をかけた。

「芙蓉葵、この子はもしかして発症時の記憶を失くしているのか? メタモルフォーゼを受け入れる時間がなかったようにしか見えなけれど? 詳細を知っているのは、あなただけだったわね」

「ああ、いずれは記憶を取り戻すだろうが、今はその時期ではないという事だ。無理に思い出す必要はない。この件に関しては、刺激しないでそっとしておいてやってくれ。これ以上の薬の使用は控えたいんだ」

芙蓉葵の注意が他に逸れてしまうと、夕陽は幼子おさなみたいに、再び

ぐずつき出す。

「これじゃあ……、こんなんじゃ、何処にも行けないし、何にもできない。これから、どうしたら——」

夕陽の弱々しく儂い眩きに答えようとする芙蓉葵を遮り、アツシユグレーの髪の女性が先に口を開いた。

「心配する事はないわ。わたしたちもあなた程ではないけど、元々色素が薄いからね。それぞれが思い思いに好みの色に髪を染め、カラーコンタクトを使って瞳の色を変えているの。これは始祖の十人が一同に介する機会が多い為に、混乱を避ける意味もあるのだけど、あなたも好きにすればいい。しばらくはわたしたちと一緒にいる時間が増えるだろうしね」

「夕陽、あんまり目立ちたくない。派手なのは嫌だ」

「最初はほとんど皆がそう言うの。ゆつくりとでいい、あなたは焦らず自分の生き方を見つけていけばいいわ。その為にわたしたち、始祖の十人が全力であなたをサポートする」

治療を終えた夕陽から女性看護師が離れると、朱理花織と恵那菜

摘が遠慮がちに言葉を差し挟む。

「そーだよ、夕陽ちゃん。その為に、わたしたち始祖の十人がいるの。本当の姉だと思って甘えてちょうだい」

「ある意味、本当の姉妹以上なんだけどね。ほとんど同じ遺伝情報に書き換えられてしまっているんだからさ」

ふたりの言葉に、夕陽は不思議そうに首を傾げた。その表情からは完全に毒気が抜けている。

“ 自傷行為を繰り返されるよりは遥かにマシ……か ”

芙蓉葵は、夕陽のそれが現実から逃避する為の一時的な幼児退行である事に気付いていた。

知能はさほど後退する事もなく、精神だけが子供に還っていくのだ。

「姉妹……きょうだい夕陽が、あなたたち始祖の十人と？」

「姉妹よ。^{きょうだい}あなたと、わたしたち始祖の十人は」

子供の目線に合わせるようにして屈^{かが}んだアツシュグレーの髪的女性が、嚙んで含めるようにそう答えると、夕陽はまた弱々しく首を振る。

その口調も何処か幼く、舌足らず気味になっていた。

一人称も“おれ”から“夕陽”に変化している。

「だって夕陽は、みんなの名前も知らない。いきなりそんな、あ…
…甘えろとか言われても」

アツシュグレーの髪の女性はクールビューティの雰囲気をここで一変させ、見る者全てを魅了せずにはいられない極上の微笑みを浮かべた。

「これは失礼。成り行きとはいえ、確かに自己紹介がまだだったわね。とりあえず名前だけでも覚えてもらいましょうか」

1―4目覚めし時（後書き）

次回、始祖の十人全員の名前が明らかになります。登場済みのキ
ヤラのふりがなは、その時まで待ってください。

目覚め編終了後は、リハビリ編、学園編へと続く予定です。
サブタイトルはまだ未定。

とりあえず、評価を頂けている内はモチベーションが維持されると思うの
で、頑張つて続ける予定です。

今後も拙作をよろしく願います。

1―5目覚めし時

白い携帯端末と本草のカードホルダーに、一冊の預金通帳が差し出された。
スマートフォン

夕陽はしばらくそれらを無言で見つめ、小首を傾げながらアッシユグレーの髪的女性をつぶらな紅い瞳で見上げる。

“まるで雪兎だ――”

間近にいた誰もがそう思った。

夕陽本人は全く気付いてはいないが、その無垢で幼い仕草は殺人的に愛らしく、朱理花織と恵那菜摘のふたりを始め、看護師たちそれぞれを感情を激しく揺さぶった。

口許と鼻を両手で覆い隠して上を向いたり、朱に染まった頬に両の掌を当てて俯いてしまったり、自分で自分の両肩を抱いて身悶えたりして、あたふたと謎の動きを見せつつ、拳動不審に陥った彼女たちを尻目に、アッシユグレーの髪的女性が口を開く。

「自己紹介の前に、これを渡しておこうか。わたしたち始祖の十人の携帯のナンバーとアドレスが登録してあるわ。通帳にはカードの限度額のトータルが記載されてる。毎月ちゃんと記帳して、使用は計画的にね。もっとも、あなたが使った分は翌月にはちゃんと穴埋めしておくから、何も心配せずに好きなように使ってくれればいい

「わ」

夕陽はうながされるままに、受け取った携帯端末とカードホルダー、そして通帳を不思議そうに眺め回す。

芙蓉葵がそんな夕陽から携帯端末を取り上げると、タッチパネルを操作して始祖の十人の個人情報呼び出した。

「わたしたちは皆、旧家の出だからな。聞いただけではどんな漢字を当てるか分かりづらい名前がある。きみも、この画面を見ながらだと分かりやすい——どうした？」

「ルナックスの黒……」

夕陽がぼつりと洩らした呟きを聞いて、芙蓉葵がさらに補足する。

「ああ、それは緊急用だろう。きみが必要に迫られて、どうにもならなくなった時にはそれを使うんだ。姉上も十年ぶりの妹姫の誕生だから、今回はかなり入れ込んでいるみたいだな」

シートの上に数種類のカードをバラまいて、名刺大の黒いプラスチック製カードを両手で持って固まっていた夕陽が、慌てた様子で通帳を開き記載されている金額を確認すると、俯き加減でプルプルと小刻みに震えだす。

「夕陽くん？」

「これ——！」

勢いよく顔を上げた夕陽の双眸は大きく見開かれ、芙蓉葵の瞳を正面から捉えた。

印象的な紅い瞳には失われていた光が戻り、そのあまりに強い眼差しに芙蓉葵はくらりと軽いめまいを覚える。

「これ、何ですか？」

開いた通帳を芙蓉葵に突き出した夕陽は完全に自分を取り戻し、現実に戻って来ていた。

よほど強い衝撃を受けたらしい。

間近で待機したままだった女性看護師たちが、限度額無制限で有名な黒のカードを見て目を剥くと、好奇心全開ですかさず通帳を覗き込み、記載された預金残高の桁数を数え始めて、すぐに途中で放

棄した。

彼女たちは思わず無言で見つめ合うと、長年のつきあいが可能にした高速のアイコンタクトで、意志の疎通を図り始める。

シスコン、姉バカ、過保護——他。

様々なワードがそれぞれの胸中で交錯する中、やがて彼女たちはいずれも同じ思いを抱く。

考えるだけ不毛だと分かっていたが、院長である芙蓉葵が、今は自分たちと同じ女性である事を、三人は全力で呪わずにはいられなかった。

「あなたは一年前にご両親と車の事故で死別して、同乗していた意識不明のお姉さまをひとりで面倒みているはずだけど」

芙蓉葵の代わりに、アッシュグレーの髪の女性が再び答えると、夕陽はその言葉に過剰に反応した。

他人の視線を気にする余裕もなくうつろたえるその姿は、見る側の動揺をも思わず誘う。

「そつだ、真陽^{まひる}！ おれ、どうかしてる！ 今日の日付は！？ もう、どれくらい眠ってたんだ！？」

「きみが眠りに就いてから、今日でちょうど二週間だ。だが、心配しなくてもいい。きみの姉上なら、ウチの病院で面倒をみさせてもらえるよう、入院先の病院とは既に調整に入っている。すぐに話は

まとまるだろう。世話役にヘルパーもふたり付けてある」

芙蓉葵の抑揚を抑えた落ち着いた言葉に、夕陽はホッと胸を撫で下ろしたが、そのままきつい視線で彼女を睨む。

「……調べたんですね」

だが、この問いに答えたのはやはり、アッシュグレーの髪の女性だった。

質問に対する役割分担がはっきりとしているのが窺える。

「悪いけどいろいろとね。安曇野家の資産状況も過去から現在まで、全て把握しているわ。ただひとつ、あなたのメタモルフォーゼ発症の経緯だけは調査外。主治医である芙蓉葵にストップをかけられてしまったのは、逆らう訳にもいかないしね」

夕陽の目つきがさらに鋭くなり、頬が一気に紅潮する。

「施しですか？ そんなのいりません。両親が遺してくれた貯えと保険で、ぎりぎりだけど何とか暮らせてます」

「その貯えも何時まで続くかしら？ お姉さまの高度医療に対する費用はかなり重い負担のはずよ。あなたが今までどおりの生活を選んだ場合だけど、わたしの試算ではどんなに上手に遺産を運用しても、今のままでは高校は卒業できても大学は無理ね。いずれ行き詰まるわよ」

「でも。だからって、こんなの受け取る理由がない！」

「理由ならあるわ、あなたがわたしたち始祖の十人の妹姫だからよ」

夕陽は、自身の理解を超えたその言葉に啞然とする。

「たったそれだけで？」

「それだけで十分だわ」

アッシュグレーの髪の女性は、夕陽がなぜ怒っているのか心底分からないうたった雰囲気がありありと漂わせている。

「でも、やっぱりこれは受け取れません」

あくまで拒絶する夕陽の頑かたくな態度に、彼女は顎に右拳を当てその肘を左手で抱きかかえると、悩ましげな表情で溜息を吐く。

「金額が不服なのかしら？ それとも現金の方がいいの？ 言ってくれたらすぐにでも用意するけど。でも、今のあなたには重いわよ。それにそうね、そうなたらとても危険だわ。あなたに護衛をつけなければならぬわね。至急、優秀なSPを五、六人程セレクトさせるわ」

それを聞いた夕陽は思わず脱力してしまい、それ以上会話を続ける気力も失くして、芙蓉葵の胸にぐったりと倒れ込んで、そのまま彼女に右肩を預けてしまった。

1—5目覚めし時（後書き）

今週末から来週初めにかけて忙しいので、頑張って少し早めの更新です。

それから、今回のエピソードが予定より膨らんでしまったので、始祖の十人の自己紹介は次回に持ち越しです。

楽しみにされてた方がいたら、本当にごめんなさい。

でも、エピソードが予定より膨らんだり、キャラが勝手に動き始めるのは、作品にとってはいい傾向なので許してください。

1―6目覚めし時

「わたくし、もう待ちくたびれてしまいましたわ」

その声を聞いて、女性看護師たち三人が医療用カートを従えてベッドサイドから退くと、空いたスペースに音もなくひっそりと、しかし確かな存在感を持って、ひとりの女性が現れた。

「お姉さま方は、いい加減その辺になさいませ。普段は他人にもご自分にもとても厳しい方たちなのに、相も変わらず妹姫には甘いのですね。カードと通帳はわたくしがお預かりいたしましょう。夕陽さんが困っていらっしやいますわ、ねえ？」

いきなり同意を求められて、夕陽は何と答えればいいか分からず、戸惑いながらも曖昧に頷いてしまう。その女性は夕陽に向けて、思わず惹き込まれてしまいそうな程に人懐こく、それでいて華のある笑顔を浮かべる。

「はじめまして。わたくし、十の姫、ゆふいんかえで由布院楓と申します」

折り目正しく一礼する彼女に、夕陽も思わず背筋を伸ばしてベッドの上から礼を返す。

「あの、十の姫って？」

「十番目に化身したという程度の意味合いですの。あまり深く考えなくてもよろしいですわ」

由布院楓はおっとりした口調でそう答えると、目許を緩めて、ころころと鈴を転がすかのように笑う。

彼女を始め、始祖の十人は、皆がいずれも旧華族か旧財閥の出自を持つ。

世が世なら実際に姫と呼ばれ、大勢の人々に傳かすかれていてもおかしくはない高貴な血筋を受け継ぐ存在だった。

もつとも、現在においても彼女たちの血統の価値は不変であり、彼女たち自身の規格外とも呼ぶべき才覚によって、それぞれの一族は華族制度廃止・財閥解体以前をも超える隆盛を誇っている。

夕陽を妹姫と呼ぶのも、彼女たちにしてみれば決してひと時の戯れではなかった。

春らしく枝垂れ桜を染め抜いた、加賀友禅の明るい色調の色留袖姿はすらりと背筋が伸びて美しく、結い上げられた髪は艶やかなからすの濡れ羽色。

品のよい瑪瑙めのうのかんざしは控え目で、その存在を主張しすぎる事はない。

白くほっそりとした項は艶かしく、少女の姿でありながら、匂い立つような大人の女性の色香を放っている。

始祖の十人の中で唯一和装姿の由布院楓は、静々と夕陽に近寄ると、花でも活けるかのようなたおやかな仕草で、シーツの上に散乱しているカードと通帳を手際よく取りまとめていく。

「由布院楓、わたしと安曇野夕陽の話がまだ終わってないのだけだ
ど」

夕陽との間に割り込まれる形になった、アッシュグレーの髪的女性が何処かあきらめ顔でする抗議を、由布院楓は柳にそよぐ風のよ
うに受け流して無視をする。

「ねえ、夕陽さん。あなたが今お住まいのマンションは、賃貸契約
でいらっしやいますわよね」

「——っ」

夕陽はその言葉に思わず顔を曇らせた。
双子の姉である真陽に次いで、他人には触れられない部分だ
ったからだ。

「やはりお悩みの方ですね。月々のお家賃は結構な額の方ですけれど、もっと安上がりにするお部屋を探すおつもりは？ 今回の入院費用も含め、いろいろとご入り用でございましょう」

「待て、由布院。入院費用の心配ならなくてもいい。夕陽くんに負担をかけるつもりはない」

芙蓉葵が少し慌てたように口を差し挟む。

夕陽は自分の身体を柔らかく包むようにして抱き締めている彼女の細い腕に、わずかに力が込められるのを感じた。

思わず夕陽が身動きみじろすると、芙蓉葵はハッとした表情を浮かべて、腕の力を即座に緩める。

「芙蓉のお姉さまはそれでよろしくても、夕陽さんの気持ちはそうはいかないのでございますよ、ねえ？」

由布院楓にここでもまた同意を求められ、夕陽はほとんど反射的に頷き返す。楚々（そそ）として控えめで、押し付けがましくなく、夕陽の意志を尊重してくれる大人の女性。

夕陽は由布院楓に対してそんな風に好感を抱いたのだが、相手の手練手管に既に嵌はまってしまっている事にはまるで気付いていない。いわゆる初対面の掴みに成功した由布院楓の本領が真に発揮され

るのは、ここからだっただ。

「部屋は一年前から、もうずっと探してるんです。でも、なかなか決まらなくて」

ひと言、ひと言を噛みしめるようにして夕陽が言葉を吐き出すと、由布院楓はいちいち頷きを返しながら、夕陽が不快に感じない程度に同情を示す。

その姿はやはり、誰の目から見ても控えめで、好ましい態度だった。

「未成年の方では無理もございません、苦勞なさいましたでしょう。ですが、保証人などいなくとも即入居できるお部屋を、わたくしは夕陽さんにすぐにでも紹介して差し上げられますけど。もちろんお家賃は格安ですし、敷金と礼金も一切頂きません。ただ、湯殿と廁かわやは共同になりますが、そういうのは気になさったりしますか？」

「あ、それは全然平気です」

「それは、ようございました。ただ、契約を迷っておられる方が他にも何人かいらっやって、今は一刻を争う状況なのです。夕陽さんの返事をすぐに頂けるなら、この場から携帯で部屋を押さえる事ができますが、いかがされますか？」

「あの格安って、家賃はどれくらいなんですか？」

おずおずと夕陽がそう尋ねると、由布院楓は目を弓形に細めてさ
らりと答える。

「片手程で、いかがでございましょう」

「片手って、五万？」

「いやですわ夕陽さん、桁がひと桁ちがいます」

由布院楓は一層目を細めると、右の袖口でそつと口許を隠す。

「嘘っ、五千元！？ 何で、そんなに安いんですか？」

「築後数百年は経^たっている、広いだけ取り柄の古い邸^{やし}だからでござ
います。空き部屋が多いままですと劣化が早くなりますので、家
主にとってはどなたかに入って頂けるだけで助かるからなのですわ。
夕陽さんと同じ年頃の者も男女数名程暮らしておりますし、あなた
にとって有益な経験を得る場に、必ずやなるはずでございましょう」

夕陽の気持ちがかなり傾いて話がまとまりそうな雰囲気^{あつち}に、朱里花織と恵那菜摘のふたりが焦りも顕^{あら}わに口を差し挟む。

「ゆっ、夕陽ちゃん！ そんな急いで決めなくてもいいんじゃないかな？」

「そっ、そうだよ！ 何なら恵那とあたしのマンションに来ればいいよ！」

夕陽の足許側からベッドに両手をついて身を乗り出し、必死に言い募るふたりを横目に見ながら、由布院楓は溜息をひとつ洩らすと、ぼつりと呟く。

「こんな話をしている間にも、契約される方が現れてしまうかもしれないねえ。最後のひと部屋ですのに……」

その言葉が決め手になった。

「待つて、決めます。貸してください、その部屋！」

夕陽の言葉を聞いた由布院楓は満足気に頷くと、左手に携^{たずさ}えていた凝った意匠の刺繡^{ししゅう}が施された巾着から携帯を取り出し、慣れた手つきでダイアル操作した。

1―6目覚めし時（後書き）

今回、由布院楓ひとりしか名乗らせる事ができませんでした。ごめんなさい。

もう、次回の予告めいた事は書かないようにします。
でも、そろそろキャラが勝手に動き始めてきました。

作者も彼女たちがこれからどう動いていくか、先が楽しみです。

1―7 目覚めし時

夕陽のベッドの左側、床から天井までの一面を、スイスの有名紡績メーカーから直輸入された厚手のカーテンが覆っている。

淡いアイスカラーの中央部分、カーテンの隙間から、いつの間にか一条の光が室内に射し込んでいた。

「陽が射してきたか。もう、夜が明けるわね。残念だけれど、学園赴任組はそろそろ時間切れ。朝ミサの準備があるから、わたしたちはこれで失礼するわ」

アッシュグレーの髪的女性が髪に右手を差し入れると、ゆっくりとかきあげながら、溜息混じりに言葉を洩らす。

その声に応えるかのように、彼女の背後では高級ブランドによるオーダーメイドのスーツに身を固めた女性が五名、それぞれが腰を降ろしていた場所から立ち上がる。

彼女たちもまた容姿がただ美しいだけでなく、始祖の十人の名に相応しい気高きオーラをその身にまとっている。

余人には一生を懸けても決して到達する事のできない程の、高みのステージに立つ十人が揃う姿はやはり圧巻で、神話世界に登場する女神たちもかくやと誰もが納得せざるを得ない、図抜けた華やかさと艶やかさがあつた。

「やられたね、一姉^{いちねえ}。今回は、由布院に全部持っていかれちゃったみたい」

「あつはあ。今さら、自己紹介しても印象薄い感じ？」

「慌てる必要はないよ、夕陽とはまたすぐに会えるんだからさ」

「右に同意する。名前はその時に名乗ればいい」

「学園で待つてるわ、安曇野くん。リハビリと女性教育早く終わらせて登校しておいで」

何処^かかさばさばとした口調の彼女たちが、思い思いに零^{こぼ}す言葉の欠片^{かけら}のひとつに、夕陽は思わず反応した。

「学園？ 学園って何処の？」

「私立華月宮学園^{しりつかげつのみや}。わたしたち始祖の十人が、後に続く妹姫の為に創った学校よ」

一姉^{いちねえ}と呼ばれた、おそらくは長姉にあたるアッシュグレーの髪の女性が、夕陽の疑問に即答する。

「そんな。じゃ、今の学校は……」

「残念だけれど、メタモルフオーゼした姿で今の学校に復学するのは、あなたが想像している以上に困難な事よ。だから、これだけは絶対に譲れない。お願いだから、素直に転入なさい」

退院後に、初対面^{いち}から姫として他人に接する場合と、メタモルフオーゼ以前の環境に姫の姿で戻る場合とでは、人々の反応がまるでちがう。

前者の場合はさして問題はないのだが、後者の場合は過去にいろいとトラブルを誘発した事例が数多く残されている。

始祖の十人によるたゆまぬ尽力によって、メタモルフオーゼ症候群罹患者に対する理解は社会常識の域にまで到達しているが、やはり発症以前の容姿や人となりを多少なりとも知る者にとって、事はそう簡単に割り切れるものではない。

メタモルフオーゼ症候群罹患者の退院後、本人の希望を最優先にして以前の環境に戻された場合、元々からの距離が近ければ近い存在である程に周囲の戸惑いや混乱は深まる傾向にある。

逆にその距離が遠ければ遠い存在である程、好奇の眼差し^{まなざし}を隠そうともせずは無遠慮な態度を表す傾向にあるという事が、過去から蓄積されたデータによってはっきりと示されているのだ。

近親者はこの限りではないのがせめてもの救いだったが、そのような環境に置かれた姫は例外なくストレスによって精神を病んでしまい、再入院を余儀なくされ社会復帰が大幅に遅れてしまうのが常だった。

ましてや夕陽の心が繊細で、精神的に脆弱^{せうじやく}である事は、つい先刻皆の前で晒した醜態によって明らかになってしまっている。

メタモルフォーゼ症候群発症以前の学校に復学するという行為は、夕陽にとっては最悪の選択と言えた。

長姉による理詰めという言葉と、時折芙蓉葵が口頭で上げるデータの裏付けには確かな説得力があり、夕陽は早々に反論する言葉を失くしてしまう。

「どうやら、わかってくれたようね。そんな顔しないで、安曇野夕陽。月々の授業料は“片手程”にまけておくから、ね？」

ウィンクする長姉の意外に茶目っ気あるその態度に、夕陽の頑な^{かたく}だった心も思わず和^{やわ}らいだ。

「ふ……ふふっ」

知らぬ間に口許を緩ませて、小さな含み笑いを洩らしてしまう。甘い砂糖菓子のような表情を浮かべる夕陽の様子に、室内に張り詰めていた緊張の糸も一瞬で解きほぐれる。

「お話は終わりましたでしょうか？」

携帯をかける為に室内から席を外していた由布院楓が、いつの間にか戻ってきていた。

「ああ終わったよ、由布院楓。わたしたちはこれで失礼するが、後の事は芙蓉葵共々よろしく頼む」

「お任せください、雨月のお姉さま。さ、芙蓉のお姉さまも」

由布院楓に促される形で、芙蓉葵も長姉に答える。

「誰に言われるまでもなく、夕陽くんは責任を持って学園に送り出す。姉上たちは、ただ黙って見守ってくれば、それでいい」

「わかった。しばらくの間、安曇野夕陽に関する全てを六の姫と十の姫のふたりに一任しよう。大切にやってくれ」

長姉はその言葉を最後に残して、他の学園赴任組たちと共に、朱理花織と恵那菜摘のふたりを引き連れ、夕陽の病室を後にする。

もともと学園赴任組からは外れているふたりの姫は、もう少し夕陽と一緒にいたいと、かなり激しい抵抗を示して嫌がる素振りを見

せた為に、ほとんど拉致にも等しい扱いを受けていた。
病室のドアが静かに閉ざされると、夕陽は小さくひと息吐いて、
白く長い睫毛を震わせる。

「どうした、夕陽くん？ 疲れたかね」

「あ、いえ。大丈夫です」

物憂げに沈んだように見える夕陽の表情に、芙蓉葵が気遣わしげ
に声をかけると、夕陽はゆっくりと首を振って微笑みを返す。

そんな夕陽の様子に、芙蓉葵がほっと胸を撫で下ろしたのも束の
間、由布院楓が洩らした何処かのんびりとしたひと言が、落ち着き
かけた場の空気を一変させてしまう。

「それはようございました。では夕陽さん、完全に夜が明けきる前
に、わたくしたちもお暇いそぎいたしましょうか」

由布院楓の言葉を聞き終えるや否や、芙蓉葵はその身にまとう雰
囲気を劇的に変化させる。

夕陽と三人の女性看護師たちが、思わず息を呑む程の苛烈かれつな威圧
感。

それでも由布院楓だけは、ひとり涼しげな態度を装い、楚々とし

た^たず^ずまいを崩そつとはしなかった。

1―7目覚めし時（後書き）

ご覧頂いたとおり、学園赴任組の名前はまたの機会に。

現在までに、フルネームで表記されたキャラの名前の読み方を以下に記しておきます。

安曇野夕陽
あずみのゆうひ

芙蓉葵
ふようあおい

朱理花織
あかりかおり

恵那菜摘
えななつみ

由布院楓
ゆふいんかえで

以上です。今後も本作をよろしく願います。

2―1 白（アルビノ）

由布院楓の口調はあくまでもおっとりしていて、何の気負いやてらいもなく淡々と話を進めていく。

「芙蓉のお姉さま、ご心配には及びません。わたくし自身もメタモルフオーゼの経験者である事をお忘れでしょうか？ 夕陽さんは病人や怪我人などではないのです、女性としての心構えや立ち居振舞いを早急に身に付ける為にも、日常生活に勝るリハビリはないですわ」

由布院楓の静かな訴えに、本来反対すべき立場の三人の女性看護師たちですら、思わず頷いてしまっている姿を見て、芙蓉葵はくらりと微かな目眩^{めまい}を覚える。

長く重い沈黙の果てに、芙蓉葵は肺の中に溜め込んでいた空気を、口唇から全て吐き出した。

「負けたよ、由布院。夕陽くんの退院を認めよう。きみは一度口にした事は絶対に曲げないからな」

「おそれいます」

苦虫を噛み潰したかのような表情を浮かべた芙蓉葵に対し、相も変わらず涼しげな表情のままにいる由布院楓は、それでも殊勝しゅしょうに頭を下げる。

「ただし条件がある。最低でも週に一度は経過を確認したい」

「わかっております。ここ、華月宮大付属病院に週に一度、必ず診断の為に夕陽さんを連れてお訪ねするとお約束いたしましょう」

頭を下げたままの由布院楓を、心持ち顎を上げて見据えていた芙蓉葵は、夕陽にさらに念を押すように言う。

「夕陽くんもいいね？ 少しでもリハビリの経過が思わしくないようなら、またこの部屋に戻る事になるから、そのつもりで」

「はい。あの……ありがとうございます。お世話になりました。えっと……葵、先生」

芙蓉葵は厳しかった表情を和やわらげると、無言で夕陽の頭をひと撫でてから、名残り惜しげにその身を離す。

彼女はおもむろにベッドから立ち上がると、女性看護師たちに後

を任せ、そのまま振り向きもせずに部屋の外へと出ていく。

そんな彼女と入れ替わるかのようなタイミングで、ふたりの少女がドアから室内へと滑り込んで来た。

「お館^{やかた}さま、ただいま参りました」

「ああ、手毬^{てまり}に小毬^{こまり}。ふたりともこちらへ」

ドアを背にしておずおずと一礼するふたりを由布院楓が招き寄せると、彼女たちは背後を振り返りながらベッドサイドにまで歩いてくる。

「先程入口で、芙蓉さまにご挨拶させていただいたんですけど――
……」

「何かものすごく不機嫌そうでいらして、何かあったのでしょうか？」

毬と呼ばれた名前のとおり、ショートボブがよく似合う、小さな丸顔の愛くるしい表情の少女たちだった。

年齢はその物腰からすると十代後半に思えるが、童顔なので夕陽より年下に見えなくもない。

よく似ているので、おそらくは姉妹なのだろう。

手毬に小毬という、名前からして間違いない。

身長は由布院楓よりもやや低いが、それでも女性の平均身長は上回っている。

藍色の落ち着いたお仕着せの和服に、ふたり揃って身を包んでいる姿は、何処か日本人形にも似た雰囲気を漂わせている。

「芙蓉のお姉さまはいつものとおり、何もお変わりはありません。おまえたが気にする事ではないのです。さ、それより早く夕陽さんにご挨拶なさい」

由布院楓が促すと、ふたりは揃って前に進み出た。

「あらあら」

「まあまあ」

ふたりは夕陽の視線を捉えると、いきなりその表情を輝かせた。全く同じタイミング、全く同じリアクションで、胸の辺りで両掌を合わせ、きゃあと小さな嬌声を上げる。

「何てお可愛らしいんでしょう。さすがは、お館さまがお気に召した妹君だけの事がありますわ」

「本当に、何てお美しい。あなたさまのようなお方のお側仕えになれるなんて、夢のようですう」

夕陽はふたりの言葉が自分の容姿を指しての事とはまだまだ実感できずにいたので、何と言って返事をすればいいか、この場に適当な言葉を咄嗟^{とっさ}に見つける事ができなかった。

「はじめてお目にかかります、手毬と申します。これから夕陽さまのお側にお仕えさせていただきますので、何なりとご用命くださいませ」

「はじめまして、夕陽さま。小毬と申しますう。誠心誠意あなたさまにお仕えいたしますので、今後ともどうかよろしくお願いいたしますね」

滑舌のはっきりしているのが手毬で、時折語尾が舌足らずになるのが小毬、黙っていればよく似たふたりだが、いったん口を開くとその印象は大きく異なった。

「えっと、彼女たちは？　これから何を？」

どう反応すればいいか思いあぐねた夕陽は、^{すが}縋るような視線を由布院楓に向ける。

「もちろん退院の手続きですわ。手続きを終えたら、すぐに由布院の邸^{やしき}に向かいます。ですから、ふたりは夕陽さんの介添えとして必要なんですの。何せ、メタモルフォーゼされてただでさえ体力が落ちている処へ、二週間ぶりに床^{とこ}を離れる事になるのですから」

「かつ、介添えなんていらないです。それに退院できるなら、おれは真陽に会いに行きたい」

「真陽さんの事なら心配いりません。雨月のお姉さまがおっしゃっていたとおり、ヘルパーをふたり付けてありますし、何より元から完全看護の態勢だと伺っておりますが」

「二週間も会ってないんです、この目で顔を見ないと安心できない」

「今のあなたの姿だと、行く先々でいたずらに騒ぎを引き起こしかねませんよ。芙蓉のお姉さまが真陽さんの引き継ぎをなさるまで、待った方が賢明でしょう」

平行線を辿るふたりの会話を見かねた三人の女性看護師たちが、由布院楓の背後から、それぞれ遠慮がちに口を開いた。

「由布院の奥様のおっしゃるとおりです、夕陽さま」

「ウチの院長先生を信じて、全てをお任せください」

「交渉は詰めに入っているそうですから、あともうしばらくの辛抱です」

彼女たちによる矢継ぎ早の説得に、夕陽はそれ以上抵抗する事をあきらめ、次なる案で何とか妥協点を見いだそうとする。

「だったら家に帰らせてください。家賃や公共料金が未納になっているはずだから」

「困りましたねえ。口約束とはいえ、あなたは先程わたくしと部屋の賃貸契約を結んだはず。由布院の邸でお預りするからには、当主であるわたくしの意向に従ってもらわねばなりません。それに夕陽さんのご自宅は現在、わたくしたち始祖の十人が管理をしていますので、慌てる必要など何もないのでございますよ」

由布院楓が右手指先を頬に軽く当てながら小首を傾げ、さほど困った様子も見せずにそう言つと、夕陽が怪訝けげんそうに眉をひそめた。

「やっぱり、おれが借りた部屋つて……」

「ええ。わたくし、由布院の邸やしきです」

「……………っ」

思わず息を呑んだ夕陽に対して、由布院楓は再び右の袖口で口許を隠すと、瞳を弓形に細める。

「ふふっ。今さら悩んでおいですか？ わたくしが提示した条件でまだご不満のようでしたら、いっそ無償でお貸ししてもよろしいのですけれど」

さんざん逡巡をくりかえした挙げ句、夕陽はやがてがつくりと華奢になった両肩を落として、力なく呟いた。

「いえ……月、五千元で貸してください。でも、介添えはいりませ

ん。ていのいいメイドじゃないですか」

「なりません。必要だから、あなたに付けるのです。この子たちがお気に召さないのであれば、他の者を付けましょう。何なら、夕陽さんに選んでいただいてもかまいません」

「そんなの関係ない。自分の事は自分でできるって言ってるんです。メイドなんかいらない」

それを聞いた由布院楓は顎を心持ち上げると、瞳を一本の線で描いたように、すう——と細める。

「どうしても、聞き入れてはいただけませんか？」

「何を言われても、嫌なものは嫌なんです」

「仕方ありませんねえ。聞く耳を持つてもらえない方には、身を以て知っていただくしかありませんわね。アルビノの特性を早めに理解するのも、今後を思えばそう悪い事ではないでしょう」

「アルビノの特性？」

首を捻^{ひね}る夕陽には取り合わず、由布院楓はその冷やかな表情には似つかわしくない、何処までもおっとりとしたままの口調で、脇

に控えるふたりの少女の名を呼んだ。

「手毬、小毬」

「はい、お館^{やかた}さま」

「少し室内に陽の光を入れましょうか」

「かしこまりました」

ふたりは一礼を残して窓際に歩み寄ると、左右シンメトリーに向かい合う姿勢を取って、中央にあるカーテンの隙間に揃って手をかける。

「お、奥様？ 何を？」

由布院楓の意図に気付いた女性看護師たちが、急にうるたえ出すのを尻目に、手毬と小毬のふたりはカーテンを勢いよく開け放つ。

「——！？」

陽の光が室内に満ちたその瞬間、夕陽は網膜が焼け付くような痛みを覚える。

それと同時に視界が白一色に染まると、夕陽の“紅い瞳”にはもう何も映らなくなった。

2―2白（アルビノ）

陽の光に視界を奪われた夕陽は、反射的に顔を伏せて両掌で眼を庇う。

窓辺から少しでも遠く離れようと身体を腰から捻^{ねじ}って反転させるが、ベッドの縁に着いた細く華奢になった右手は思いの外かよわく軽くなったはずの夕陽の体重ですら支える事ができずに、肘からがくりと折れてバランスを崩す。

「――！！」

全身が栗^{あわだ}立ち、ベッドから転落する事を夕陽が覚悟したその瞬間、ふうわりと誰かに柔らかく抱き止められた。

「ごらんなさい、わたくしの言ったとおりでしょう。まだろくに、自分の身体も使えないではありませんか。この分では車椅子に頼らなければ、ベッドから離れる事すら叶いませんよ」

由布院楓のおっとりとした声はそれまでと全く変わりなく、何処までも落ち着き払っている。

彼女が前もって警告していたとおり、これでは夕陽ひとりで退院

して元の日常生活へ戻る事など、とうてい無理な話だった。

メタモルフォーゼによる女性化と二週間にも及ぶ病床生活がもたらした体力の低下は、夕陽の想像を遥かに超えている。

だが、問題は体力的な側面ばかりではない。

真に厄介なのは、メタモルフォーゼによる女性化の結果、以前と比べて変化したものとそのまま変化していないものを、夕陽自身が正確に把握していない点にある。

男女の性差をなるべく早い段階で受け入れ、それによって生じる意識のズレを優先して埋めていかなければ、MTF化したFTMという通常ではありえない矛盾を抱えた存在になり、後天的な性同一性障害とも言うべき問題に後々苦しむ事になってしまう。

始祖の十人の中には、望まずしてこのパドックスに陥ってしまった者もいる為に、メタモルフォーゼした直後の妹姫に対する精神的ケアには十人皆が特に心を砕く。

だが、今の状態の夕陽にはそんな由布院楓の穏やかなる声も、心の内なる思惑もどちらも届きはしなかった。

「目がつ？ 何も見えない!？」

白い闇がもたらした恐怖に、夕陽は軽いパニック状態に陥り、恥も外聞もなく由布院楓の身体にしがみつく。

彼女はそれを優しく受け止めて、夕陽の背中をしっかりと叩いて小さな子供のようにあやす。

「ふふつ。芙蓉のお姉さまに対してもそうでしたが、言葉のわりに意外と甘えん坊さんですねえ。でも、心配はいりません。すぐに見えるようになりますよ。わたくしも夕陽さん程ではないですけど、最初は苦勞いたしました。時が経てば慣れますし、今はいいカラーコンタクトもありますから」

アルビノとはせんてんせいはいくひしやう先天性白皮症と呼ばれる、遺伝子疾患である。

姫の場合、夕陽程ではないが、メタモルフォーゼによる女性化の際に例外なくアルビノになる。

メラニンの生成に係わる遺伝子情報の欠損により白化するのだ。夕陽の場合、その症状が姫の中では最も顕著な例で、毛髪や体毛そして素肌が完全にメラニン色素を失い、抜けるような白に変化している。

それでいて、瞳だけが兎のように紅いのは、虹彩に集中している毛細血管が浮かび上がって見える為だ。

メラニン色素を持たないアルビノは太陽光による紫外線に弱く、白い肌はすぐに日に焼けて赤く爛れ、ただ紅い瞳は網膜が焼かれ一時的とはいえしばらくの間視力を失ってしまう。

「紫外線（UV）対策がいか^{ケア}に姫にとって大切か、分かっていただけでしたか？ 生まれついで^たの女性に比べて、よほど注意が必要になるのでございますよ」

由布院楓のものとも、夕陽自身のものともつかぬ心臓の鼓動に合

わせ、背中をとんと叩かれるに任せていた夕陽は、それでもようやく落ち着きを取り戻そうとしていた。

由布院楓の胸に抱かれながら、凪いだ水面みなものように気持ち静まってくると、今度は急に恥ずかしさが募ってくる。

今さらながらに、彼女の腕の中で幼児のように相手の身体にしがみついている自分に気付くと、両頬と耳の後ろ辺りが熱くなり、どうしようもなくいたたまれない思いになる。

「……………あ」

あわてて離れようとした夕陽は、その時不意に懐かしい匂いを嗅いだ。

夕陽の双子の姉、真陽が好んで使っていた香水フレグランスと同じ、フローラルな椿カメリアの香り。

由布院楓から仄ほのかに漂うそれは、彼女が髪を結い上げる際に使う椿油の芳香なのだが、夕陽がそれを知るのはもう少し後の事になる。胸いっぱいにその香りを吸い込むと、家族全員が揃っていて幸せだった頃の記憶が一度に甦ってくる。

夕陽はそのあまりにせつなく、たまらなく愛しい過去の映像ビジョンの奔流に呑み込まれてしまい、思わず涙を流した。

自分ではどうする事もできない程の圧倒的な寂寥感せきりょうかんに打ちひしがれ、全身が崩れ落ちそうになる。

「どうかされましたか？」

由布院楓の穏やかな声が、夕陽を現実に取り戻す。

感情の波に溺れてしまいそうになっていた夕陽は、その時不意に理解した。

救いの手は最初から、目の前にずっと差しのべられていたのだと――。

「……何でもないです」

「そうですか」

華奢な両肩を震わせ、嗚咽混じりに返事をする夕陽を、由布院楓はそれ以上は特に何も追求する事なく受け止めた。

「ただ、もう少し」

「はい」

「もう少し、このままでいてもいいですか？」

「はい」

二度目の“はい”に含まれた肯定の響きに、万感の思いが込み上げ、夕陽の胸が熱くなる。

涙はもはや止めどなく溢れ続け、枯れる気配がない。

「あと、もうひとつ」

「何でしょう?」

「今だけ……姉さんって、呼んでもいいですか?」

「もちろんでございますよ。今だけと言わず、これからはずっとそう呼んでくださってかまいません。最初から言っているではありませんか、あなたはわたくしたちの妹姫なんです。どれだけ甘えてくださってもよろしいですよ」

妹姫と呼ばれる言葉の響きが、何故か胸にすんなりと落ちる。

夕陽の心の内にあった、つまらないわだかまりが消えた瞬間だった。

「おれ、行きます。由布院の邸^{やしろ}へ。いえ、連れて行ってください。おれも“一緒”に」

「これからは由布院があなたの家なんですよ。もうずっと“一緒”ですから」

「姉さん……の、言う事聞いて、早く元気になる!」

「はい。素直な方は好きです、わたくし」

この後、夕陽の気持ちが充分に落ち着いた事を確かめた由布院楓は、手毬と小毬のふたりにこの新たな妹姫の身の回りの世話を任せ、三人の女性看護師たちには折りたたみ式車椅子と松葉杖の手配を依頼した。

その間、自らは夕陽の退院に関する手続きの全てを、外来が訪れ始める時間までに手際よく終わらせる。

そうして夕陽は、病院関係者以外の誰の目にも一切触れる事なく、由布院家所有の高級リムジン車中の人となった。

3―1 由布院の邸へ

由布院家所有リムジン車中の内装は、夕陽の想像を超えた豪華さだった。

全長八メートルを優に超す車内は走行中とは思えない程にとてもしずかで、微かに流れているクラシック音楽以外、エンジン音はもちろん、あらゆるノイズから遮断されている。

電動式パーティションにより、客室のプライベート空間は完全に保たれ、運転手や外部からの視線に晒される事は一切ない。

間接照明に照らし出されるインテリアは、白を基調にメイプルウッドをあしらい、瀟洒で上品な、落着いた雰囲気^{かも}を醸し出す。

進行方向に対して車体の右側面にはカウンターが設置され、白の本革シートが運転席真後ろの位置と、車体左側面から最後尾にかけてL字型に配置されている。

由布院楓は最後尾のシートの真ん中にひとり、帯の形が崩れないよう背筋を綺麗に伸ばした姿勢で浅く腰掛け、夕陽は左側面のシートで、手毬と小毬のふたりに両側を挟まれて座っていた。

夕陽の着衣は退院時にふたりの少女^{メイド}によって、病室のクローゼットに収納されていたアウターに着替えさせられている。

オフホワイトの生地小さな花柄が全体に散らされた、フリフリプリントワンピース。

朱理と恵那のふたりが夕陽の退院に備えて、自分たちの趣味全開で、インナーも含めて事前に用意していたものだ。

「さあ、夕陽さま。ベルギー王室御用達ガレーのチョコレートはいかがですか？」

「こちらのお、デンマーク王室御用達ロイヤルダンスクのバタークッキーもどうぞ」

右に手毬、左に小毬。

彼女たちはそれぞれ菓子の詰められたケースのふたを開けて、満面の笑みで夕陽に勧めてくる。

「さあさあ、ご遠慮なさらず。とても美味しいんですよ」

「あーんです、夕陽さまあ。あーん。あーんしてください」

ケースを膝の上に置いた小毬が、ビスケットをひとつ右手指先で摘み上げ、左手を添えながら夕陽の口許にそつと差し出す姿に、手毬の顔色がさつと変わる。

「やるわね、小毬。さあ、夕陽さま。わたしのもあーんしてください」

「やだ、手毬ちゃん。割り込まないでよあ。夕陽さま、先にこちらを」

「「はい、あーん」」

「……………」

「「あーん……………」」

「……………」

「「……………」」

手毬と小毬はふと視線を合わせると、しばらく無言で見つめ合う。

「お館さまあ、夕陽さまが冷たいんですう」

「さつきから、何も喋ってくださらずに」

沈黙を保つ夕陽に耐えきれなくなったふたりは、由布院楓に泣きついた。

「そんな事より、手毬。夕陽さんには当分、チョコレートのような刺激物や、胃に負担のかかるものはだめですからね。それくらいのが利かなくてどうするのです。おまえたちを信頼して夕陽さんの側仕えに選んだ、四季しきの顔に泥を塗るつもりですか？」

「もつ、申し訳ございません。以後気を付けますので、女中頭にはどうかご内密にしてくださいませ」

微笑ましげに夕陽たちの様子を見守っていた由布院楓が、手毬に對してやんわりと注意を与えると、彼女はしゅんとしよげ返る。

小毬はそんな手毬の様子に、自分が叱られたかのようにうなだれてしまう。

「仕方ないですねえ、ふたり共。それでどうなの？ わたくしが目を離している隙に、夕陽さんを怒らせるような事を何かしたのかしら？」

「い、いいえ、お館さま。そんな事は決して。ねえ、小毬」

「は、はいですう。着替えの時にちょっと遊んだくらいで」

由布院楓からの問いが思いがけなかったのか、弾かれたように反応した手毬に続いて、小毬もコクコクと小さく首を縦に振って同調する。

「バ、バカ、小毬。あんた、自分で何言ってるか分かってんの？」

「ああ、ごめん、手毬ちゃん。お館さまには内緒だったんだよね」

「小毬のバカ、お黙り！」

「え？ え？ 何でえ？」

自分の失言に気付いていない小毬は、不思議そうに小首を傾げている。

それを見た手毬は不意の頭痛に襲われ、こめかみを指先で押さえながら、小さく呻いた。

「どうなの？ 夕陽さん。黙ってらしたら、わたくしには何も分かりませんわ。さ、遠慮なさらず、言いたい事がありましたらおっしゃってください」

由布院楓に促される形で、夕陽はようやくぽつりと言葉をこぼす。

「……姉さん」

「はい」

「このふたり……日、日焼け止めを、日焼け止めを塗るのに……っ」

じわりと、目尻に涙を浮かべた夕陽を見て、手毬の焦りはピークに達した。

「ゆっ、夕陽さま？ 誤解なさないでください。ねえ、小毬」

「はいですう。全身隈なく塗るようにとお、お館さまから厳命を頂きましたので」

しどろもどろになる手毬に対し、小毬は何処までもものんびりとしていてマイペースだった。

「だからって、あんな場所にまで。お、おれ、今の身体、自分でもまだ見た事なかったのに」

くすんと鼻をすすり始める夕陽に、場の空気を読めない小毬がこの後かけたひと言に、手毬は思わず頭を抱える事になる。

今この瞬間にも、由布院楓からの視線を痛い程に感じているのだ。それでも手毬は気付かないふりをして、必死に意識を逸らし続け

る。

「誇りにこそすれど、何を嘆く事がございました、夕陽さま。たいへん綺麗なお身体で、小毬はいたく感激いたしましたあ」

「小毬はもう、お黙り！ あんたが口を開くと話がややこしくなる。それは確かに、今まで見た事ないくらいに綺麗だったけどさ」

手毬はもはや自爆している事にさえ気付かない程に混乱している。夕陽はそんなふたりを余所よそに、ひとり鬱々とした気分のままでいた。

女性化した自分の身体を初めて目の当たりにしたショックと、それを初対面の人間にいいように弄もてあそばれてしまった羞はじらいから、未だに立ち直れずにいるのだ。

姉である姫たちのメリハリの効いた身体と違い、メタモルフォーゼ直後の特徴である、第二次性徴前の少女のように華奢で肉付きの薄い身体。

日焼け止めを全身に塗り込めるふたりの少女メイドの繊細な手つきや、ほんのわずかな衣擦きぬずれの感覚にさえ、自分の意思を離れてことごとく身体が反応してしまった感覚が、今でも鮮明に夕陽の内に残なかっている。

刺激が加えられる度、喉がのけ反り、背中ゆみなりは弓形になり、口唇からは甘く小さな悲鳴が洩れ、それぞれに何とか抑え込もうとしてもまるで思い通りにならず、全くの徒労に終わってしまった。

夕陽はそんな自分の新しい身体に、今はただ戸惑うばかりだ。全身の神経が皮膚のすぐ真下を通っているかのように敏感な肌。

髪は艶やかさを増し、細くさらさらになり、枝毛など傷んだ箇所は全く見当たらず、毛先にまで神経が行き届いているかのような感覚がある。

それらはいずれも、ほんのちよつと前まで普通の少年だった夕陽には全く未知の感覚で、慣れるまでにはかなりの時間がかかりそうだと、あきらめ半分で覚悟した。

何より、爪先から頭の先までがあまりに敏感にすぎるのだ。

誇張でも何でもなく、肌に合わない衣服をただ身に付けているだけで、不快な感覚に悩まされるであろう事は想像するに難くない。^{かた}

例えば、夕陽が入院中に着ていた患衣がそうだった。

裏地にある縫い代による折りでさえ、少しでも処理が甘い部分があれば、素肌をちくちくと刺すような刺激があった。

だからあえて、ふたりの少女に感謝する部分を探すなら、それは彼女たちに無理矢理身に着けさせられた、シルク製キャミソールのなめらかな肌触りにある。

その着心地は想像以上に気持ちよくて、素肌への不快な刺激を全て絶ててくれるのだ。

夕陽はこれ以降、洋服以上に下着に凝るようになるのだが、これはそのきっかけとなる出来事だった。

こうして、あらためて自分の身に起きた劇的な変化に意識を向けると、由布院楓によって一度は落ち着きかけた感情の波が、ほんのわずかだが再びざわめき揺れる。

それがまた、夕陽の心に若干ではあるが、暗い影を落とす。

人前で涙を見せた覚えがほとんどなかった以前の自分に比べて、何故これ程までに情緒不安定になってしまったのか全く理解不能で思い通りにならない自身の感情がもどかしく、ただひたすらに持て余すばかりでいた。

それら全ての変化はメタモルフォーゼにより、体内のホルモンバランスが崩れてしまった結果に因るものなのだが、この時点での夕

陽の知識では、そこまで窺^{うかが}い知るのとはとうてい無理な話だった。

そんな夕陽がつつむき加減でいた顔を思わず上げたのは、由布院楓の次に続く言葉があまりに意外だったからだ。

「なるほど、そういう事でしたか。ですが夕陽さん、それは慣れていただくしかないですね。そのふたりはあなた付きの側仕えなんですから、ご自分でよい関係を築いてください。もちろん主従の枠を超えて、行き過ぎた面があるようでしたら、わたくしからきちんと注意するようにいたしますから」

「なっ、慣れって……このふたり、カツ……カテーターだって、無理矢理……ちゃんと、看護師さんたちがいたのに……！」

「カテーター？」

「……………」

夕陽の淡い桜色の頬が、散り際の紅葉のように一気に紅く染まった。

由布院楓は、夕陽の身に何が起きたかおおよその事情を察してはいたが、それでも穏やかな態度をあくまで崩す事なく、おっとりした口調のままに言葉を続ける。

「なるほど、困りましたねえ。ただ、結局はそちらの件もあなたに

慣れていたくしかないんですが。今は理不尽だと思われるかもしれませんが、そういくらも待たずに理由がわかる時が来ます。その時には必ずこのふたりに対して、感謝の気持ちを持つ事になるでしょう」

由布院楓は右手指先を頬に軽く当てながら小首を傾^{かし}げ、さほど困った様子も見せずにそう言う。

夕陽は本当に納得でき得る理由があるのかと疑念を抱きつつも、既に一度姉と思い定めた由布院楓にそこまで強く言い切られると、それ以上反論すべき言葉を持ちはしなかった。

3―1 由布院の邸へ（後書き）

区切りの十話です。

毎回読んでくださっている方、お気に入り登録してくださった方、評価ポイント入れてくださった方、感想をくださった方。

全ての方々に作者より多大なる感謝を、今後もMTFをよろしく願います。

3―2 由布院の邸へ

リムジン客室キャビンの設計思想は、何よりもまず快適な空間造りが至上の命題とされ、徹底的に追求されている。

外部の日常的空間から完全に切り離され、ほんのわずかなノイズや振動さえも一切車内に拾う事がなく、走る応接室さながらの内装に仕立て上げられているのだ。

空調によって車内は適温に維持され、本革シートのクッションに程よく沈み込んだ夕陽の身体は、柔らかに包まれるようにして受け止められている。

そんな状態では、誰しも睡魔いびきの誘いから逃れるのは難しく、特に体力の落ちている夕陽は何時しかうたた寝を始めてしまう。

夕陽にとって、ボリユームの絞られたシヨパンの調べは、まるで子守唄のような心地よさだった。

『——お館さま、よろしいですか？』

「何か？ 久沓くくつ」

華月宮大学付属病院を離れ約一時間が過ぎた頃、シヨパンを奏でるピアノの音色が不意に途切れ、16・1chのサラウンドシステムドライバーを構成するスピーカーから、運転手であろう若い男の声バリトンが流れた。それに対して由布院楓の、つまり客室側キャビンの音声は高感度マイクで集音されていて、彼女はまるで目の前にいる相手に答えるかのような、静かで気負いのない返事をする。

その時まで浅い微睡みまてふの中にいた夕陽は、ふたりのやりとりに過剰に反応した。

ぱっちりと目を見開くと車内のあちこちらを見渡し、状況を把握すると桜色の頬をほんのりと朱に染め、そわそわと落ち着きのない様子を見せ始める。

手毬と小毬のふたりはそんな夕陽に気付くと、それぞれに目許を緩め、由布院楓たちの会話の邪魔にならないよう、左右から身を寄せそつと囁いた。

「ご心配いりません、夕陽さま。音楽が流れている間は、あらゆる回線はオフになっています」

「そうです、夕陽さま。先程までの会話の内容の一切はあ、運転席側には漏れていませんから」

「あつ……そ、そうなんだ？ だったら、いいんだけど」

心の内を見透かされた夕陽は、両肩を小さくすくめると、綺麗に揃えた膝の上で両の拳をぎゅっと握り締め、今度は紅葉色に紅くなつた顔を隠すようにうつむかせる。

この時、夕陽は気付いていなかったが、客室内キャビンの赤裸々な会話を聞かれたかもしれないと早合点して、それまで感じた事のない程の強烈な羞はじらいを覚えた対象が、まだ姿も見ぬ“男性”だった事實は、以前までの夕陽自身のメンタリテイからすれば考えられない事だった。

少年だった頃の夕陽なら周りを女性に囲まれた中で、自らの恥部

をさらけ出してしまったさっきまでの状態こそが、耐え難き辱^{はずか}しめだったはずなのだが、今感じているあまりのいたたまれなさは、それとは比べるべくもない。

肉体的に女性化した結果、異性と同性に対する精神的な認識と距離感が、メタモルフォーゼ以前とは男女反転してしまっているのだ。

夕陽はまだ自身の緩やかでありながらも、着実に進行している変化に対して、はつきりとした自覚は持っていなかったが、それに気付くであろう時はそう遠くない未来に確実に訪れるはずだった。

夕陽が意識を客室^{キャビン}に戻すと、スピーカー越しに聴こえる若い男の^{バリトン}声が、由布院楓に伺いを立てている。

『入門のご許可をお願いたいのですが』

「あら、もうそんな“頃合い”でしたか」

『ただ、少々懸念が。どうやら途中から尾行されているようです』

「そう？ 車種は？」

由布院楓は顎を心持ち上げると、瞳を一本の線で描いたかのように細める。

『赤のシボレーです』

「ああ……あの、あちこち^{いじ}弄くり回してある趣味の悪いオモチャですか。かまいません、このまま奥の院に回線を繋ぎなさい。朱理と恵那のお姉さま方のお遊びに付き合う必要はありません、どうせこれ以上は何も出来やしないのですから」

『御意』

一拍の間を置いて、由布院楓は何事もなかったかのように、おっとりした口調のまま誰か別の人間に呼びかける。

「^{おみなえし}女郎花、聞こえて？」

『——』

聴こえて来るのは微かなノイズと、衣擦れの音。

「^{おみなえし}女郎花？」

『——…うるさいぞ、楓。名は一度呼べばよいと何時も言っているである』

うつそりと不機嫌そくに響く、幼女とも老女とも判断のつかぬ、一種異様で不可思議な“声”。

夕陽は自分の両側に座る手毬と小毬のふたりが、息を詰め、緊張に身を固くする気配を感じた。

「申し訳ございません、お姉さま。入門のご許可を頂きたいのですが」

『まあ、待て。一応確認の為に訊く、夕陽は？ 首尾よくやったか』

「全て、お姉さまのおっしゃるとおりでした」

『そうか、あの面子を相手に、よくやった。この日を一日千秋の想いで待ちかねたぞ』

「お姉さまの“夢見”に、万が一などあり得るはずもございませんでしょうに」

『世辞はよい。あらゆる意味で宝玉にも等しい希有なる存在の妹姫じゃ、決して粗相のなきように注意せよ。久沓ともうひとり、四季には特によく言って聞かせておかねばならぬ。そうは思わぬか、のう？ 手毬に、小毬よ』

名を呼ばれたふたりの少女は音を立てて息を呑み、身をひとしきり震わせると、もんどり打つかのようにシートから飛び降りてフロアに跪き、勢いもそのままに叩頭する。

そんな彼女たちの頭上に、さらなる“声”が容赦なく降り注ぐ。

『夕陽が落とした涙の価値は重いぞ。分をわきまえよ、ふたり共。童子相手の戯れに、己れの身がただ朽ち果てていくだけの日々に戻りたいか？』

「「ひつ、ひらにご容赦をつ。どうかお赦してください、奥の院さま！」「」

声を揃えて必死に赦しを乞う尋常ではないふたりの様子に、夕陽はどう反応すべきか分からずに、ただ啞然としてうるたえる事しかない。

「おみなえし
女郎花」

『何じゃ、楓。後には出来ぬのか、わらわの用はまだ済んではおらぬ』

溜息まじりに由布院楓が呼びかけると、女郎花という名で呼ばれ

た“声”の主は、さも煩わしげに唸り声を上げる。

「このふたりは、かねてからの望みのとおりに夕陽さん付きになれましたゆえ、今回は少々はしゃいで羽目を外してしまいましたけれど、四季の見立てにこれまで狂いがあつた事は一度たりともございません。もうしばらくは、猶予を与えるのがよろしいかと」

『ならぬ！ それでは後々（のちのち）そやつらの為にならぬぞ』

叩頭し続けているふたりの少女の両肩がびくりと跳ね、怯えを感じているせいからか身体の慄えがさらに酷くなる。

夕陽にもそんなふたりの感情が伝染ったのか、あるいは“声”の威厳を伴う迫力に気を吞まれたのか、顔から血の気が見る間に失せていく。

「あまりにお小言が過ぎますと、まだ会いもしないうちから夕陽さんに怖がられてしまう事になりますよ」

『むう……っ』

少々呆れ気味に、由布院楓が言葉を重ねると、回線の向こう側で相手が絶句する気配が伝わってきた。

「邸^{やしき}に着きましたらすぐにでも、夕陽さんを連れて参りますから、機嫌を直して頂きたいのですが」

『いや、もうよい……それには及ばぬ。事がここに至ればもはや慌てる必要など何もない。夕陽がわらわの前に姿を見せる“時”は既に決められておるからの、その時が来るまでゆるりと待つとしよう』

「では、入門のご許可を」

『もう、とうの昔に許可済みじゃ。窓の外を見てみよ、既に由布院の敷地内のはず。朱理と恵那の車も振り切れたである？ 早く戻つて、夕陽を邸^{やしき}で休ませてやれ』

「ありがとうございます」

『聞こえるか、夕陽。次に月の齡^{よわい}が満ちる夜、開かずの間にて逢おう。月の光の導きがそなたを招くである』

由布院楓^{おみなえし}が女郎花と呼んだ相手の、厳しかった“声”のトーンは若干以上に緩められている。

夕陽はそこに、自身に向けられた親愛の情の深さを感じ取り、張り詰めていた緊張の糸を解いて、ほっとひと息吐く。

“声”は夕陽の返事を待つ事もなく、盗聴防止に軍事目的から転用されている衛星電話の回線を切った。

同時に、長い長い溜息を吐いた手毬と小毬のふたりは、フロアの

上でそれまでじっと固くしていた姿勢を膝から崩す。

「久沓^{くくつ}、パーティションを開けなさい」

「御意」

由布院楓の指示に、夕陽が不安に揺れる眼差しを向けると、彼女は慈愛を込めた微笑を浮かべ、何時ものようにおっとりした口調で答える。

「心配は無用です、夕陽さん。窓は全てUVカットガラスですから、安心なさってください」

その言葉に胸を撫で下ろした夕陽は、いざるようにしてシートから降りると、まだその場から動けないでいる、手毬と小毬のふたりの許へ這い寄っていく。

「いけません、夕陽さま。せつかくのお召し物が汚れてしまいます」
「もったいのうございます、夕陽さま。さあ、立ってくださいまし」

ふたりの少女は目尻にうつすらと光る涙を指で拭くと、慌てて居住まいを正して、バランスの危うい夕陽の身体を両側から抱き支える。

夕陽はまだ多少は顔を蒼褪めあおぞめさせていながらも、ふたりに向けてにっこりと実に屈託のない笑顔を見せた。

「泣かないで、大丈夫。おれは奥の院さまがどんな人かまだ知らないけど、今度逢える時が来たら、ふたりの事はちゃんと話しておくからさ」

それが、彼女たちふたりの限界だった。

「「ゆっ……ゆっ……ひさまっ！」」

手毬と小毬の涙腺が一気に決壊し、大粒の涙が止めどなく瞳からあふれ出す。

ふたりは夕陽の身体に左右からすが縋り付くと、誰にはばか憚る事もなく、まるで子供のようにしゃくり上げ、その身を震わせ泣き崩れてしま

由布院楓はしばらく沈黙を保ったまま、出逢ったばかりでまだ
こちない関係にいる主従が作りだしたその光景を、ただ微笑を浮か
べて見守るばかりでいた。

幕間1 朱理と恵那

華月宮大学付属病院から約一時間の距離の都市部郊外に、由布院家所有の広大な森林公園がある。

国から特別保護区域に指定されているその一帯は、緑豊かで湖を水源とする清流を懷に抱く都会のオアシスとして、地域住民から愛されているのはもとより遠方からも訪れる者も数多い。

車道は公園の中央部にある湖に向けて、川沿いを並走して行つて帰るだけのルートがあるのみで、湖を起点とする遊歩道が公園内を縦横に走り、格好のハイキングコースとなっている。早朝と呼ぶにはもう遅い時間、地平線から完全に姿を現した陽の光が木漏れ日となつてちらちらときらめく様を横目に眺めながら、一台の赤いスポーツクーペが湖に向けてアスファルトの上を疾駆^{はし}っていた。

コルベツト Z R 1 L H D 6速MT。

米国ゼネラルモーターズ社、シボレーブランドの旗艦モデル。

市販車最速の名を欲しいままにする、ハイエンドスペック・グレードである。

全長4455mm、全幅1860mm、空力性能はCD^{0.286}。

6.2リッターV型8気筒OHVエンジンはスーパーチャージャーによつて過給され、ノーマルでも最大476kw(647ps)/819N・m(835kg・m)のパワー&トルクを叩き出し、日本仕様の電子制御式サスペンションがその強大な動力性能を支える。

国際A級ライセンスを有する朱理花織はこのモデルを一旦、レーシング仕様にモデファイ。

そこからさらに公道でも走らせる事ができるよう、道交法に抵触しないスペックにまでデチューン、つまり一度上げた性能をわざと

落として、その獴猛な牙を隠し持つ。

有事の際には、基板上のロムの設定を換える事により、何時でも公道最強のモンスターマシンの姿を取り戻せるようになっている。

愛車のシボレー・コルベツト、そのドライバーズシートに身を深く沈めて、気だるげにステアリングを握っていた朱理花織が、ふと何かを思い出したかのように口を開いた。

「ねえ、菜摘ー」

「なあに、花織」

ナビシートに座る恵那菜摘が、カーオーディオのポリウムを絞りながら答える。

「うちらさー、何でこんな朝っぱらからこんな森人中、ふたりでドライブしてんだろーねえ」

「それはだって、ふたりのオフがめずらしく重なったからじゃない」

「あ、そっかー。よく取れたよねー、おんなじ日にさあ。レイの交代要員、誰か妹姫を確保したんだっけ？」

「何、言ってるの？ わざわざ同じ日に合わせたんじゃない。だか

「レイは今、新曲の録音が難航していて、スタジオとホテルを往復する毎日よ」

「オッケー、オッケー、それが公式の理由だったよね。思い出した！。それだと妹たちにも迷惑かけないし、新曲はもう録音終わってるし、余裕、余裕」

「うんうんと自らを納得させるよう、微苦笑混じりに何度も頷く朱理花織に向けて、恵那菜摘が淡々と言葉を紡ぐ。

「何、寝惚けてんの？ 花織が考えた理由じゃん。でもね、パパラツチにスタジオかホテル張られたら終わりよ？ あたしたちの内、どっちかは常にレイでいないといけないのに、もっとマシな理由考えなよ。勝手にプレスに情報流しちゃって」

「そうだったあ？ でもさー、何でだっけ、何かあった？」

「あきれた、久しぶりに十人が揃うからでしょう」

心底不思議そうな朱理花織に、恵那菜摘は軽く眉をひそめて溜息を吐いた。

それでも朱理花織は悪びれた様子を一切見せずに無邪気に笑う。

「ああ、そーそー。夕陽ちゃんが葵姉あおいねえのところに搬送されて、そろそろ二週間めだったよねー」

「そうだよ、だからいつ召集かかってもいいように、今週一週間は無理矢理オフにしたんでしょ」

「スケジュール調整、たいへんだったよねー」

「その苦労も、今朝で報われたけどね」

「何でだっけー？」

「何でって、夕陽ちゃんに……会えた……から？」

朱理花織がかけていたサングラスを、カチューシャのように額に跳ね上げた。恵那菜摘もやはりサングラスを外すと、つるの部分を口唇にくわえて歯で噛みしめる。

何かが腑に落ちない事に気付いたふたりは、しばし沈黙の淵に沈んだ。

「……………」

「……………」

可憐なミニのワンピース姿でミスマッチにも程があるが、朱理花織は実に手慣れた仕草で、ミュールの先でブレーキペダルを軽くキックすると、車体の荷重をフロントに逃がす。

華奢な左腕でステアリングを右に半分程まで切り込み、横Gが発生した瞬間にクラッチを切って、右コンソールにあるサイドブレーキのレバーを目一杯引く。

ロックした後輪タイヤがたまらず悲鳴を上げると、コルベットの車体は綺麗に一八度スピンターンして急停車した。

ほっそりとした首で強烈なGに耐えたふたりは、遠心力の呪縛から解放された後、思わず見つめ合い、ほとんど同時にひとつの答えに到達する。

「「リムジン！ 由布院のリムジンは！？」」

シンガーらしく綺麗にユニゾンさせた後、ふたりはそれぞれに思考を走らせる。

「ま
撒かれた？」

「コルベットがリムジンに？ まさか！」

愛車のスペックと自身のドライビングテクニックに、微塵の疑いも持たない朱理花織が、恵那菜摘の言葉を強く否定する。

「だったら、何時の間にか追い抜いた？」

「ナビ見なよ、一本道だよ、これ。しかも片側一車線。そんなのありえない」

ボリウムを絞ったはずのカーオーディオの音が、やけに車内に響く。

アイドリング中のエンジンの振動が、車体を通して微かに伝わってくる。

そうして同じ時を共有するふたりは、やがて同じ答えに到達する。

「^{ゼロ}女郎花ね」

「^{ゼロ}女郎花よ」

「あの、ちびっこめ」

「花織より、年上よ」

忌々しげに口唇を噛んで美しい顔を歪めた朱理花織は、恵那菜摘が発した「皺になるわよ」のひと言で、慌て表情を戻す。

「で、でも油断したわねー。まさか、うちらが踊らされるなんて思いもなかった。前より能力上がってるんじゃない？」

「夕陽ちゃんに何か関係があるのかもね。楓が妹姫に執着するなんて、おかしいと思った」

「それを言ったら葵姉も何時もと違ってた」

「やっぱり、あの子って何か持ってるのかもね」

「どうする菜摘？ 夕陽ちゃんが復学したら、うちらが一番会うの難しくなっちゃうよ。夕陽ちゃん、取られちゃう」

「夕陽ちゃんの復学までにはまだ時間があるわ。考えるのよ、花織。
雨月姉うつきねえが何時も言ってるでしょう、めんどくさがらずに頭使えって
フィーリングのままに動いてばかりはいられないのよ」

額に上げていたサングラスを戻して、朱理花織がサイドブレーキを解除すると、恵那菜摘も口唇で弄んでいたサングラスのつるを再び耳にかける。

「どのみちこのままじゃさー、退^ひけないよね」

「退^ひけるわけないじゃん。この借りは、きっちり返すわよ」

クラッチペダルを踏んで、ストロークの短いシフトレバーを小気味よくローギアに叩き込む。

朱理花織は、これ以上ないタイミングでクラッチミートすると共にアクセルオン。

派手なスキール音を撒き散らしながら、コルベットを急発進させる。

地上に舞い降りた天使の容姿を持つ少女は、獰猛な牙を隠し持つマツチヨ&グラマラスボディのフルサイズ・アメリカンスポーツを、完全に自分の手足のごとく飼い慣らしていた。

「ちびつこに、お仕置きしてやる。きつついの！」

「楓にも、どっちが姉か教えてやらないとね！」

シフトアップと共に、回転数が上昇していくエンジンの咆哮に、負けじと声を張り上げる。

カーボンファイバーによる軽量ボディと、ノーマルでも2・36 / psという驚異的なパワーウエイトレシオが生み出す、背中がシートに貼り付く程の強烈な加速Gに酔いしれるかのように、朱理花織と恵那菜摘の声は弾み、楽しげに笑い合う。

テンションが最高潮にまで上がり、限界を突き抜けてハイになったふたりに、怖いものなど何もなかった。

幕間1 朱理と恵那（後書き）

ここまで読んで頂き、ありがとうございます。

えっと、作中のルビに関する表記について、少し補足させていただきます。

前話初登場の、「女^{おみなえし}郎花」という名のキャラと、今話の朱理と恵那の会話に出てくる「女^{せろ}郎花」は、同一キャラです。

今までも、これに類するルビの使い方を何度かしていると思いますが、これは作者が意識的にしている表記です。

分かり易いよう、とある作品の超有名キャラを例にさせてもらいます。

「^{レールガン}御坂美琴」

「^{ヒリビリ}御坂美琴」

上記のように同一キャラでありながら、呼び方は各キャラによって違う場合があります。

例えば、あるキャラが彼女を呼ぶ場合は「^{レールガン}御坂美琴」となり、また別のキャラが彼女を呼ぶ場合には「^{ヒリビリ}御坂美琴」という表記に、この作品内ではなる訳です。

このような当て字によるルビ表記は、この作品にしばしば使われていますので、これまで読まれてきて混乱してしまった方がいたら申し訳ありませんでした。これは最初にお断りしておくべきだったかもしれません。

同一の単語でも、時と場合、または会話か地の文かでルビ表記が変わる事は今後もかなりの頻度であると思いますが、その場合は作者の何らかの意思が込められていると、何卒ご理解の上、ご了承くださいませ。

4―1 刻まれし時

リムジンの電動式パーティションが、微かなモーター音を立てながら開いていくと、車体は竹林の中の石畳が綺麗に敷かれた一本道を走っていた。

左右の窓外を、密集した青竹の一群が後方へと飛ぶように流れていく。

夕陽がフロントガラスに視線を移すと、竹林の終わりはすぐ間近に迫っていた。

路面はやや下り勾配の緩やかなスロープになっていて、俯瞰気味の視点から前方に広がる景色を見渡す事ができる。

視界の開けたその先には、澄んだ碧に水面がきらめく湖が見える。その湖のほとりに建てられている和風建築の荘厳さに、夕陽の視線は思わず奪われた。

水際に展開する趣ある光景は、世界遺産で知られる広島県宮島の厳島神社に似ているが、朱塗りを多用した華やかさ、絢爛さはなく、どちらかといえば京都・奈良等で多く見られる神社仏閣に通じる落ち着いた雰囲気があった。

見る者が見れば、平安時代の建築様式である高床式寝殿造りが後世の建築技術で再現され、建具や水回りなどは現代人が住居として住むに相応しい造りになっている事に気付くまで、そういくらかも時間がかからないはずだ。

屋根の上一面には、ソーラーパネルさえ乗っているが、それが建物も含め、周囲の景観を損ねるような事には一切なっていない。

「スゴ……イ。あれが、由布院のお邸？」

「今日からあなたの家ですよ、夕陽さん」

夕陽は自分の身体に縋るようにして泣いているふたりの背中を撫でてやりながら、リアシートに座っている由布院楓に視線を戻したが、その瞳は戸惑いに揺れていた。

「いいんですか、本当に？ あんな立派なお邸の一室が、月五千元なんて。あれじゃ、例え物置部屋でも文句言えない気が……」

「ご冗談を。ただ自宅に帰宅をするだけの相手に、誰が家賃など求めましょうか」

加賀友禅の袖口で口許を隠し、由布院楓は弓形に両目を細める。

「え……だつて」

「わたくしに、大切な妹姫から家賃を取れとおっしゃるのですか？ それとも、わたくしを姉と呼んでくださった気持ちには嘘偽りだったとでも？」

「そんな……っ、嘘なんかじゃ」

「それでは、一時の気の迷いだっただでもおっしゃるのでしょうか？」

「ちっ、違います。本当に姉さんだと思って」

「でしたら、この話はこれでもう終わりです。よろしいですね」

「あ……で、でも——」

夕陽の言葉は最後まで続く事なく、不意に途切れてしまった。

リムジンのブレーキ・ディスクが、フルブレーキングによる負荷に耐えきれずに上げた、断末魔にも似た金属音によって掻き消されてしまったのだ。

急制動が掛けられた車体は荷重が進行方向に移動し、夕陽の身体もまた前方につんのめるようにしてバランスが崩れ、運転席側に向かって、フロアの上を何の抵抗もできず滑るようにして吹っ飛んでいく。

慣性の法則に為す術もなく弄もてめばれるままの夕陽は、運転席背面にあるシートに激突する事を覚悟した。

「——！？」

相応の衝撃を覚悟して思わず目を閉じた夕陽だったが、その瞬間はいくら待ってもやって来なかった。

何らかの干渉が働いて、ほとんど全ての衝撃が吸収緩和された夕陽の身体は、今度はゆっくりとその場に崩れ落ちそうになるが、誰かがそれを抱き止めてくれている事に気付く。

「何事ですか、久沓？」

「申し訳ありません、お館さま。子供が急に飛び出して来たので、少々乱暴な運転になってしまいました」

「子供が？ この由布院の敷地に？ これはめずらしい。それで、まさか轢いてしまったのではないでしょうね」

「それは大丈夫ですが、念の為に様子確かめて参ります」

エンジンはアイドリングのまま、重厚なドアの開閉音がして、久沓という名の黒ずくめのスーツに身を固めた長身の男が、車体の後方へと向かう。

夕陽は自分を抱き締めている女性の腕の中で、その様子をぼんやりと目で追っている。

「大丈夫ですか、夕陽さん。そんな身体でシートから立ち上がるのは危ないと、あれ程申しましたのに」

普段通りの落ち着きある“声”が、すぐ耳許でした。
どうやら“声”の持ち主である由布院楓が、身を挺して夕陽を抱き止めてくれたらしい。

だが、夕陽はその事実にも、何故だか言葉にできない程の、そこはかない違和感を抱いた。

「ご、ごめんつ。姉さん（・・・）の方こそ大丈夫？ 何処もケガしてない？」

由布院楓の膝の上で抱きつく形になっている事によやく気付き、夕陽は慌てて彼女から身体を引き離す。

そんな夕陽の様子に自然と目許を緩ませた由布院楓は、首を縦にゆつくりと頷いて見せる。

夕陽はほつと安堵の溜息を吐きながらも、理由もなくふと思い付いたままの言葉を、気付けば口にしていた。

「んっ？ えーと、でも、あれ？ 姉さん……は、後ろのシートに座ってたんじゃないかった？」

喋りながら夕陽は、自分が酷く馬鹿げた事を口走っていると思いに苛まれ、語尾が消え入りそうに小さくなっていく。

「まあ、夕陽さん。朝早くからお目覚めでしたから、少々寝惚けてらっしゃるようですね。わたくしは最初から、ここに座っておりますが」

「そう……だったよね。姉さんは最初から（……）前に座ってた。俺が横のシートから姉さんの隣に移ろうとした時に、車が急に停まって——」

その時、シートの上から、藍色の刺繡ししゅうも色鮮やかな大小ふたつの毬たまが、夕陽の足許に転がり落ちた。

フロアの上をころころと転がっていく様子を見ながら、夕陽は何故だか胸の鼓動ゆめつどうが早くなっていくのを感じた。

まるで夢現ゆめつどうの出来事のように、何かが酷くもどかしい。

「手毬と小毬のふたり……は？」

由布院楓のしなやかな手が、夕陽の細い手首をやんわりと掴む。夕陽自身気付かぬうちに、また喉許を掻きむしろうとしていたのを止めたのだ。

「さつきからそればかりですね。そんなにご自分に付く、側仕えが気になりますか？ 心配なさらないでください、女中頭の四季しきは信頼できる人間です。彼女が選んだふたりなら、きっと夕陽さんとよい関係になれますよ。分をわきまえてさえいれば、主従の形にこれといった正解はありません。いかようにも思つとおりになさいませ」

「ふたりは邸やしやで、待つてくれているんだよね」

縋すがるような、哀願するような表情を夕陽は浮かべている。

まるで自分が望んだ答え以外の言葉を、由布院楓が話したのを怖れるかのようにだ。

「ええ、そうです。きっとふたり共、夕陽さんの到着を心待ちにしているでしょうね」

「おれも早く会いたいです。ふたりとは絶対に仲良くなれる、そんな気がしてるんだ」

そんな夕陽の言葉にまるで返事でもするかのようなタイミングで、フロアの上で止まりかけていた大小ふたつの毬が、ころんと最後のひと転がりをした。

「お館さま、失礼致します」

運転席を離れていた久沓が、客室キャビンのスライドドアを開いて顔を覗かせた。

その腕の中には、ぼろぼろになったかすり絣模様の着物に身を包んだ小さな少女が、ぐったりとして意識を失っていた。

4―2刻まれし時

リムジン運転席の背中合わせに設置されているシートに、夕陽は車体後方に向かって由布院楓の左隣に座っていた。

スライドドアは、夕陽から見て由布院楓の身体を間に挟んだ反対側、つまり進行方向に対しては、車体左側に位置する。

「お館さま、失礼致します」

スライドドアを開けた久沓^{くくつ}に相対する為、由布院楓はシート上に腰を降ろしたまま半身をひねり、夕陽に背中を見せた。夕陽は咄^と嗟^{つさ}に目をつむり、帯の形を崩さぬよう、彼女の背中に自身の身体をそつと預けて、左肩甲骨のあたりに顔を埋める。

「夕陽さん。まだ竹林を抜ける前ですから、そんなに神経質にならなくても大丈夫ですよ」

由布院楓はそんな夕陽に、肩越しにくすりと含み笑いを溢^{こぼ}す。確かに直射日光は遮^{さへぎ}られ、辺り一帯はやや薄暗さを残していた。

「あつ、は、はい」

夕陽は頬を紅葉色に染め、由布院楓の背中影から、そつとドアの外を窺う。^{うかが}

運転手の久沓は年の頃は二十代前半、長身瘦躯の引き締まった身体の青年で、男性にしては肌の色は白く口唇は紅く濡れ、無表情ではあるが、まだ恋愛の対象が女性であるはずの夕陽ですら、つい見惚れてしまう程の美しい容姿をしている。

そんな彼の腕の中、横抱きにされているまだ思春期前の少女は、顔色はやや蒼白く血の気を失い、頬が瘦けてやつれている。

「く……っ」

少女はわずかに呻くと、閉じられていた薄い瞼をゆっくりと開き、彷徨うように辺りを見渡していた瞳で由布院楓を捉え、次いで夕陽に視線が移ると、ぴたりとそれを止めた。

「……なんて綺麗な稀人。^{まれびと}ここはやはり現世ではなく、常世なのか？」

「当たらずとも遠からずですね。それ以上はお答えしかねますが」

熱にでも浮かされているかのように、何処か朦朧もつろうとした口調の少女に、由布院楓が答えを返す。

喉を苦しげにぜえぜえと鳴らし、囁くような少女の喋り方はとても聞き取りにくく、由布院楓もまた少女に合わせて声の調子を落としていたので、夕陽はこれ以降もふたりの会話の内容のほとんど全てを把握する事ができずに終わってしまう。

「では彼岸か？ それとも琉球の民が言う、ニライカナイなのか？」

「身形みなりのわりに学があるようですねえ。それに年齢とは不釣り合いな大人びたその物言い。名のある家柄の方とお見受けしますが、心配なさらずとも、あなた方は死人しふじんではなく、ただの迷い人です。傷の手当てをした上で、きちんとあるべき場所に、送り帰して差し上げましょう」

「それは困ったな」

「何がでしょう？」

苦しげに眉をひそめる少女の言葉に、由布院楓は小首を傾げる。

「ただ送り帰すだけでは困る。稀人に逢える僥倖じやうじやうは今後もう二度とないだろうからな。できれば手を貸してもらいたい。我らの藩は長年の内乱続きで、土地も民も疲弊みちしるへしていてな。統一に向けての道標みちしるへをつける為、主君に加担し、神にも通じるといふ力を是が非でも見せてもらいたい」

「何処でそのような知識を得られたかは存じませんが、それは買ひ被りです。わたくし共には、そんな大それた力などありませんが」

「こんな大きな鉄の駕籠かこを馬も使わずに動かしておいて、よく言う。では、力づくにでも見せてもらおうか。大切に守っているものを傷付けられては、さすがに黙ってはいられまい——暁あかつき！」

それまでの口調をがらりと変え、凜とした響きで少女が誰かの名を呼ぶと、一拍の間も置かずに応える声があった。

「待つてたぜ、臍おぼろ！」

声変わり前の少年の少し高めの声が響くと、久沓の胸の中央部付近から水平になった薄い刃の切っ先が突き出た。

少女の姿はその時既に久沓の腕の中から消え失せ、由布院楓に向かつて懷に忍ばせていた小太刀を逆手に持って振りかざし、斬り掛かっている処だった。

久沓が反応を見せる機先を制して、これも臍と同様に、ぼろぼろ

の旅装束姿の暁が背後から威嚇する。

「おっと、動くなよ。内臓と骨は避けてある。余計な真似をしなければ傷はすぐにふさがる。何、ちよつとの間だ、おとなしくしてやがれ。今のうちだぜ、臃。後は女しかない」

由布院楓は背中に夕陽を庇いながら、顔色ひとつ変える事なく、臃が繰り出す刃を素手で捌き続けている。

リムジンの車内がいくら広いといっても、当然ながら戦闘に向いた空間ではない。

真っ直ぐに立つ事も儘ならず、由布院楓は中腰で、加賀友禅の裾が乱れるのも構わず、身長面で圧倒的な有利に立つ臃をあしらっている。

基本は上半身での体捌きで、避けきれない攻撃は刀身を横から掌で払う。

臃は繰り出す小太刀のスピードをさらに上げるが、由布院楓はそれでも余裕を失う事はなかった。

「見事です。ですが、そろそろ終わりにしましょうか」

息を全く乱す事なく、由布院楓は言うが早いか両の掌で小太刀を白刃取りに捉える。

刀身を擦（な）るようにして小太刀を奪うと、柄の部分から小さな火花が散り、次の瞬間にはまばゆいばかりの閃光を放った。

「かかった！ どけえっ！」

隴は掌に仕込んでおいた薄く加工された火打石を投げ捨て、一瞬の間視界を奪われた由布院楓の脇をすり抜け、それまで何も出来ずにただ言葉を失い、立っているだけでも必死な状態の夕陽に迫る。

夕陽は自らに迫り来る脅威に対して全くの無力で、自分の意思のまま自由にならない身体を車体に手を付きながら、足を引きずるようにして車内後部へと逃れる事しかできない。

「傀儡（くぐつ）、夕陽さんを頼みます！！」

「御意」

久沓（くくつ）が静かに返事をする、両手の指が奇妙に蠢き、目に見えない弦（いと）が振るえ、大気を鳴らしているかのような音が辺りに響く。

“ キュイイイイ——ッ ”

夕陽の背後を捉えた朧は、もうひと振り隠し持っていた小太刀の刃を、無防備に晒されている、白くて細い項うなじに向けて一閃する。

「奪とった!!」

絶対に逃れ得ないタイミングに、確信を持って容赦なく振り抜いた朧の斬撃だったが、手応えなく空を切る。

間一髪、糸の切れたマリオネットの如く、夕陽の身体が一瞬のうちにフロアに崩れ落ちたのだ。

“ キュインッ ”

それも一瞬。再び見えない弦いとが鳴くと、夕陽が反撃の動作に転じ、信じられない事にここから朧は防戦一方になってしまう。

まるで蜘蛛を連想させるその姿は異様で、地に這いつくばった不自由な体勢からは想像もつかない程の、人に在らざる体捌たいさばきを見せる。

夕陽はフロアに着いた手首を支点に、浮かせた身体を遠心力に因よって回転させ、途切れる事なく連続的に足技を繰り出していく。

何かに例えるなら、ブレイクダンスのトーマスフレアに動きが最も近い。

身体がよほど柔らかいのか、関節の可動範囲が常人のそれを遥かに凌駕している為、動きに一層の切れを呼んでいる。

予測不能であらゆる角度から繰り出される夕陽の足技は、ほんの僅か掠っただけでも、鎌鼬にやられた時のように、皮膚がぱっくりと裂け、容赦なく臍の体力を削り取っていく。

相手との身長差による優位性を失うどころか、臍は自分が一気に劣勢に陥ってしまった事実気付く。

これには、さしもの臍も後退せざるを得なかった。

「て、てめえつ。動くなと言っただろ、そんなに死にたいなら、望みどおりにしてやる。くたばれ！」

臍がいきなり守勢に回った事に焦った暁は、裂帛の気合いを込め、薄刃の刀を風ぎ払おうとしたが、その表情を驚愕に歪ませた。

目の前に立つ男の背中に突き刺した刀の柄が、押そうが引こうが微動だにしなかったからだ。

久沓の引き締まった肉体を縋り上げている、幾条もの束となった鋼の筋肉が、暁の刀をがんじがらめに絡め取っていたのだ。

暁が久沓の身体を刺し貫いた最初の一瞬で、このふたりの形勢は既に明暗分かれていた。

「くそつ、まだ終わりじゃねえ！」

「いいえ、これで終わりです。あなたの脇差し、お借りしますね」

暁が腰に差しした脇差しを抜こうとするより速く、耳許でおっとりとした女の声が淡々と響き、喉許には冷たい刃が当てられていた。

「いかがですか？ ご自分の得物で、敵と定めた相手に命を握られるご気分は」

「おまえ……何時の間におれの背中を奪^とった？ ついさっきまで、駕籠^{かこ}の中にいたじゃねえか」

まるで悪夢だと、肩を落とした暁の力ない言葉に、由布院楓は楽しげに含み笑いを洩らすばかりだった。

“ ギュンッ！ キュイツ！ キュリイイン！”

一方、見えない弦の響きはますます冴え渡り、今や大気を切り裂かんばかりに勢いを増していた。

久沓の両手指先の動きも、さらに複雑さと緻密さを極めていく。

朧は車内の一角に追いやられ、絶体絶命の窮地を迎えていた。

左右の退路を絶たれた彼女は、苦し紛れに天井面ぎりぎりに低空ジャンプを試みる。

夕陽の体勢が上からの攻撃に弱いと見て、最後の賭けに出たのだ。だがその瞬間、夕陽は回転の勢いもそのままに、両肩と後頭部をフロアに着け、次のフォームに移行する。

ワンピースの裾が風に舞うのも構わず、天井面に向かって開脚回旋する、ブレイクダンスのウィンドミルと呼ばれるフォームだ。

お互いが向き合う体勢になった夕陽と朧は、同時にそれぞれの攻撃を繰り出すが、遠心力を伴う夕陽の足技の方がスピードで勝っている。

夕陽のミュールの爪先が朧の鳩尾みぞおちを貫き、リムジンの天井面に彼女の身体を縫い付けると、朧はようやく意識を手放して、戦闘不能の状態に陥った――。

それが、初陣を勝利で飾ったにも関わらず、夕陽の記憶には一切残る事がなかった戦いの詳細だった。

夕陽は戦闘の最中に意識を失ったままできて、何ひとつ覚えてはいなかったのだ。

「それにしても、夕陽さんがこれ程までに“音叉”の才能に恵まれた器だったとは。今日の久沓は見違えるばかりでした」

「おそれいります、全ては夕陽さまのお力です」

「女おみなえし郎花の言葉の通り、まさに由布院の宝。困りましたねえ、本当にひとり占めしたくなってしまいました。どうしたら、わたくしだけの妹になって頂けるでしょうか。ああでも、真陽さんがいらっし

やるんでしたね。それに、学校に通うのを反対する訳にもいきませんし。悩ましいですねえ」

ふたりの少女の戦いの結末を見届けた、由布院楓と久沓によるこの会話もまた、夕陽がいずれ選択すべき未来を示唆する、重要な内容をいくつか孕んでいたのだった。

5―1 始まりし時

目を覚ますと薄暗い闇の底に、夕陽は横たわっていた。

「何処、ここ？ 由布院のお邸やしき？ おれ、いつの間にか眠っちゃったんだ……」

夕陽は自らが置かれた状況を今ひとつ把握できずに、檜ひのきの無垢材で構成された竿淵天井をぼんやりと眺めながら、目が冴えるのをしばらく待つ。

やがて、周囲の状況を把握しようと頭を巡らすと、どうやらここが床の間と呼ばれる十畳間程の和室であるらしい事に気付く。

床柱と床框とこかまちによる飾り座敷が設けられている方を枕側にして、夕陽は畳に敷かれた布団に寝かされていた。

敷布団は夕陽がそれまでに経験したどんな寝具よりもふかふかで心地よく、掛け布団は羽根のように軽い。

少しでも気を緩めてしまうと、すぐにでも眠りに引き込まれてしまいそうな程の快適さだ。

夕陽はそうしてしまいたくなる誘惑に逆らって、自らの好奇心を満たすべく、身体を起こそうと身動きをすると、左側の障子の外から中を伺う声がした。

それまで人の気配がまるでしなかったので、夕陽は思わず両肩をびくりと震わせる。

「お目覚めですか、夕陽さま」

それは夕陽が初めて聴く知らない女性の声で、酒で喉を潰したかのような掠れた低めのハスキーボイスだった。

中性的なその響きはかえって魅力的で、何処か芙蓉葵にも似ている為、夕陽はまだ姿も知らぬその声の持ち主に、無意識レベルで早くも親近感を抱く。

「……夕陽さま？」

「あ、はい。ごめんなさい、今起きました」

「では、失礼してもよろしいですか」

「ど、どうぞ」

心持ち緊張を覚えながら、夕陽がぎこちなく返事をする、左側足許の障子が音もなく敷居を滑り、室内に月明かりが射し込んだ。

現れたのは色鮮やかな、緋色の女だった。

短めの髪を後ろに流して、後れ毛を油で撫で付けるでもなく、自然のままに任せている。

着付けもやはり同様の印象で、やや崩し気味ながらも、明るい朱色の着物を決して下品になる事なく婀娜あだに着こなし、色気のなかに

も知性を感じさせる容姿と、前裾を片手で捌いて叩首する折り目のついたその所作は、例えば悪いが遊廓の遣り手の女主人や、鉄火場で親分衆を向こうに回して場を仕切る女博徒を連想させる風格がある。

さすがに寝たままでは失礼だと考えた夕陽は、慌て半身を起こそうとするが、身体はやはりまだ重く感じられ、のろのろと自由の効かない自身の身体が酷くもどかしい。

「はじめまして、夕陽さま。わちきは由布院の女房方まとめ役、女中頭の四季と申します。この度は、久しく開かずの間のひとつとなっておりました、西の対に、新たな主さまをお迎えする事ができました、たいへん嬉しゅうございます。これで奥の院に籠もってしまわれたきりの女郎花さまも、東の対に戻られるやもしれぬと、お館さまも期待されておられるご様子で、まさに――」

女中頭を名乗った四季は礼を終えて顔を上げると、男好きがするであろう肉厚のぼってりした口唇を開いて、立て板に水の如く喋り始めた。

メタモルフォーゼ以後、低血圧にでもなってしまったのか、どうやら寝起きに弱くなってしまうらしい夕陽には、四季の口調は少し早口であり日常的ではない内容である事も相まって、いくつかの単語を断片的にしか拾う事ができない。

それでも殊勝な態度を崩す事なく、おとなしく話を聞いていた夕陽だったが、四季の話の腰を思わぬ形で折ってしまう事になる。

“くう……”

夕陽の腹の虫が可愛らしく鳴くと、ふたりは思わず見つめ合う。
真っ赤な紅葉色に頬を染め、目尻に涙を光らせ、羞恥に震える夕陽は、羽根をもぎ取られた天使さながらの儚さで、四季は視線を奪われ目を離せなくなってしまう。

「……………」

「……………」

「ごめんなさい」

「いつ、いえ！」

右手人差し指の背で涙を拭って、はにかみながらぽつりと洩らした夕陽の謝罪の言葉に、四季はらしくもなくうつろたえてしまう。

「何なの、何て事なのかしら、この可愛らしさは。あの娘たちが、羽目を外した気持ちが今なら分かる。この百戦錬磨、常勝無敗の四季姉さんを一瞬で墜とそうとするなんざ、相当手練れの誑^{たら}しだわ。」

最強だわ。無敵だわ。やつぱり天然が一番怖いわね、危険すぎる。思わず式の術を使つて、攫つてしまいたくなつたじゃないのさ」

四季は脳の仮想領域内で呪によるコードを展開し、特定の人間にしか聞きとる事のできない、高速化言語のスキルを無闇やたらに無駄遣いしまくりながら、溢れ出る想いの丈を洗いざらいにぶちまけ続ける。

その間も四季のリソースが言語領域優先になっているせいか、彼女は襟元や髪へとしきりに手をやり、意味もなく整えたり、崩したりする仕草を繰り返す。

目の前の新しく迎える主の、そのとてつもなく愛くるしい様子に、異性のみならず同性への性愛趣味をも併せ持つ両刀遣いの四季は、理性の箍が弾け飛んでしまいそうになる限界にまで、既に追いやられている。

それでも四季は、女中頭の矜持を必死にかき集められるだけかき集めると、夕陽への想いを込めて和かに微笑んだ。

努めて平静を装い、落ち着いた大人の女の魅力を演出するよう細心の注意を払ったのは、誰にも知られたくない四季だけの秘密となつた。

「ちょうどようございました。正殿大広間にて、由布院の一族への夕陽さまの御披露目の宴が、今宵この後しばらくして執り行われる予定にございます。それでは、お召し物の着替えをいたしましょうか」

夕陽はその言葉に、自分が朝病院を出た時のままの服装でいる事に気付く。

四季が両掌を軽く二度打ち鳴らすと、彼女の左斜め後ろに、それぞれが衣装盆を持った三つの影が現れた。

「本日はただ今より、夕陽さま付きでお世話をさせて頂く側仕えにございます。さ、粗相そそうのないようしっかりとご挨拶するんだよ」

廂ひさしと呼ばれる板張りの廊下に衣装盆を降ろし、跪いて叩首しようとした三人の少女たちに、夕陽の弾んだ声かけられる。

「姉さんから聞いてる！ 姉妹の方が、手毬さんに、小毬さんだよ。これからよろしくっ」

「まあ、夕陽さま」

「感激しましたあ」

藍色に染められた揃いのお仕着せに身を包んだよく似た外見の姉妹が、蕩とろけるような笑顔を見せる。

夕陽も何故か訳もなくテンションが上がり、思わず布団から身を

乗り出そうとした時にそれは起こった。

急なバランスの変化に身体が付いていく事ができずに、夕陽は畳に向かって顔から崩れ落ちそうになる。

その場にいる誰もが息を呑み、声にならない悲鳴をあげた。

夕陽に救いの手を伸ばそうと皆が腰を浮かせたが、ひとりだけ落ち着きを失う事のない者がいた。

「え……？」

夕陽の鼻先が畳の表面に触れようとした寸前、まるで糸の絡まった操り人形の如く、不自然な姿勢のままに急制動がかかり、床に顔面が激突する直前にぴたりと止まる。

自分の意思とは一切関係なく、時が逆流するかのように重力に逆らいつつ、夕陽の身体は元の半身を起こした姿勢にゆっくりと戻っていく。

「よくやったよ、操^{みさお}。さすが久沓^{くくつ}の一族で、兄と並び立つ傀儡操者^{くわいせつしや}だけの事はある」

「久沓？」

小首を傾げながらも、既に落ち着きを取り戻しかけている夕陽が

四季の言葉に反応すると、自己紹介をまだ終えていなかった、藍色のお仕着せに身を包んだ最後のひとりが姿勢を正す。

彼女は改めて廊下に三つ指を付くと、叩首して挨拶を始める。

「申し遅れました、わたしの名は久沓操^{くくつみさお}。本日運転手を務めさせて頂きました久沓操^{くくつみさお}人の妹です。夕陽さまのりハビリのお力添えになりますよう、この度夕陽さま付きのお側仕えにお願いいたしました」

面^{おもて}を上げた白晢^{はくせき}の少女の口唇はやはり紅く濡れ、無表情ではあるが、兄と同じく際立った美貌の持ち主だった。

5―2 始まりし時

煌々（こうこう）とした蒼白い月明かりが夕陽のいる部屋に射し込み、辺りを明るく照らしている。

夕陽の位置からは逆光になるが、それでも皆の表情はよく見えた。

「リハビリ？ それどんな風にするのかな、さっきのと関係ある？ あれは一体何が起きたの？」

夕陽が不安な気持ちを態度に滲^{にじ}ませ、小首を傾げる。それは彼女にしてみれば当然の疑問で、簡単に看過できる問題ではない。

「はい。その点につきましては、由布院の成り立ちと併せ、お館さまが直接夕陽さまにお話されるそうですので、ただ今よりご案内致します。お館さまは湯殿にて既にお待ちになっていらっしゃいます」

「姉さんが“ゆどの”で？ うん、分かった」

迷子のような表情を浮かべていた夕陽だったが、操^{みさお}の言葉を聞くとその曇った表情が一気に晴れる。

そんな夕陽の様子を目の当たりにして、四季と操のふたりが戸惑

いの声をあげた。

「夕陽さま、その呼び方はお館さまからお許しを頂いていらっしゃるのですか？」

「え？ そう……だけど、何か？」

操が切り出した思いがけない問いかけに、夕陽は瞳を揺らしながら答える。

「失礼ですが、わちきにはとても信じられませんねえ」

「な、何が？」

四季が軽く首を横に振りながら溜息まじりにそう洩らすと、夕陽の不安の色がさらに濃くなる。

「お館さまは、始祖の十人以外のお方たちの他には姉妹の情を交わした事はほとんどないのです、お館さまのご寵愛ごちゆうあいを得ようとなさる方は数多あまたいらっしゃいますが、思いを遂げた方はわちきの知る限り、

おひと方もいらっしやいませんねえ。常に他人とは距離を置かれる
お方で、馴れ馴れしい態度を非常に嫌われるのです」

「そんなあ、姉さんは最初から優しかったよ。確かに厳しいところ
もあつたけど」

何処か遠くを眺めながら言葉を紡ぐ四季に、消え入りそうな声に
なりながら必死に反論する夕陽に、それまで黙ってなりゆきを見て
いた手毬と小毬のふたりが思わず助け船を出す。

彼女たちふたりは操と並んで廊下に正座し、床の間下座側から入
つてすぐの畳に正座する四季の背後に位置している。

「夕陽さまのおっしやるとおりです、頭。^{かしら} お館さまは、それはもう
大層夕陽さまをお可愛がりになられていらっしやるんです」

「そうです、そうです。たいへんに微笑ましいご様子で、とても
仲睦まじいご姉妹でいらっしやる——」

四季がふたりの言葉を遮るように咳き込むと、手毬と小毬のふた
りは一瞬はっとした表情を浮かべて慌てて口を噤^くんで、四季の背中
越しに様子を窺う。

「ふうん、そうかい。お前たちが言うなら、まあそうなんだろうさ。お館さまもよほど夕陽さまの事お気に召したんですね。さしでがましいかもしれませんが、それはかなり幸運な事であるとのこと自覚だけは失くさないようにしてくださいまし」

四季はさほど気にした様子もなく軽く場を流すと、夕陽の気持ちをはかるような言葉をやんわりとだが口にする。

「あ、うん。それはもちろん。姉さんはおれの扱いがすごく上手いんだ。一緒にいるとすごく気持ちが素直になれて落ち着くし、安心するんだ」

だが、夕陽のこの答えに対して即座に反応したのは操の方だった。

「これは申し訳ありません、夕陽さま。初めての場所でお目覚めになられたばかりで、不安なお心持ちでいらっしゃるのはあたりまえ。早速、お館さまの処へご案内いたします」

「では夕陽さま、お手を」

再び夕陽に向かつて三つ指をついた操の言葉尻に乗って、四季が腰を浮かそうとするが、間髪いれずに操がそれを制す。

「その必要はございません、頭。この久沓操くくつみさおが夕陽さまのお側に控えている限り、要らぬ気遣いは必要ないのです」

「え——？ おれ、何時の間に」

見れば、夕陽が四季の手を借りるまでもなく、背筋のすんなりと伸びた綺麗な姿勢で立ち上がっている。

夕陽にすればいろいろ尋ねてみたい状況ではあったが、姉である由布院楓が疑問点を説明してくれるのであればと、この場では自重する。

何より、少しでも早く姉の顔を見たかったのだ。

離れてみると、何もかも見透しているかのような彼女が醸かもし出す独特の雰囲気と、全てを委ねてしまいたくなるような包容力がもたらす安心感は、他では得難いものである事がよく分かる。

操の指摘は的を射ていて、由布院楓から離れている今の状況は、夕陽を何処か不安で、落ち着きの悪い心持ちにさせていた。

「さ、夕陽さま、こちらに」

「うん。でも、四季さんは……」

操は退室を促されながらも、若干のためらいを見せる夕陽に、
「え、冴えとした曇りのない瞳を向ける。」

「どうか、お心遣いなく。頭はただ今、夕陽さまのお部屋を整える
仕度の途中で抜けて来ているだけなので」

「おれの部屋？　じゃあ、ここは違うんだ」

「はい。夕陽さまのお部屋は正殿の西側となります、西の対にご用
意させて頂いています。ここは本来客室として使われている部屋な
のです」

「そうなの？　四季さん」

「さようでございます、わちきには他にまだ残した仕事があります
ので、お気になさらず」

四季は柔らかなその微笑みで、夕陽の背中を後押しする。
それでようやく納得したのか、夕陽は衣装盆を手にした操たちの
後を追うようにして部屋を出ていく。

「では夕陽さま、また後ほど」

夕陽の華奢な背中を芯の通った正座姿で肩越しに見送る四季と、
主を^{あるじ}氣遣い振り向いた操の視線が、ほんの一瞬ではあるが意味あり
げに絡み合ったのを夕陽は知らない。

障子が閉められると、四季はほっと小さな吐息を洩らす。
そんな呼吸による胸の上下でさえ、彼女が僅かにでも身動^{みじろ}ぎする
と、ぎしぎしと微かに何かが軋んだ音がする。

「全く、顔の割りに容赦のない子だねえ、可愛げがない。首を動か
すのがやつとじゃないか。それでもまあ、今日の処は褒めといてや
らないとねえ」

そう言い終えるや否や、四季の身体が虚空にかき消えて、五芒星
の描かれた小さな正方形の和紙札が一枚、ひらりと宙に舞う。

その和紙札が畳に落ちる前に、五芒星の中心に向かって幾重にも
折り込まれていくと、白い蝶へと擬態する。

白い蝶はひらひらと不規則な軌道を描くと、障子をすり抜け、蒼
白い月明かりに溶け込むようにして、霞^{かすみ}の如くその姿を消した。

「いかがでございますか、操は。夕陽さまの護衛として、お眼鏡に叶いましたでしょうか？ 式神相手とはいえ、わちきの化身から一本取れる者などそうはいません」

「ふむ……隙があればいつでも霊系を使ってもよいと、あらかじめ申し渡してあった訳か。一本取れたら夕陽付きの望みを叶えてやる条件で」

闇に閉ざされた矩形くけいの函はこの中、一条の光も射し込む事のない暗闇の閉鎖空間に、ふたつの声が交差する。

窓も扉も一切の開口部がなく、部屋の様子は疎か、互いの姿さえ見えない完全な密室。

声の主たちはそんな状況に置かれているにも関わらず、日頃とさして変わらぬ声音で会話を重ねていく。

「夕陽さまのお身体を支えた霊系を囿に、さらに極細を究めた霊系でわちきの身体を絡め取ったようでございますなあ。もっとも相手が式神である事までは分かりはしなかったでしょうが」

「なかなか機転が利くようではあるの。何よりしたたかなのが気に入った。リハビリの事を考えても悪くない人選じゃ。兄の方が夕陽とは相性がよさそうではあるが、異性では付いては入れぬ場所も多いからな、操の方が夕陽もいろいろ気易かろう。楓が連れてきたふたりも使い物になりそうではあるし、まあ、よいである。しかしな四季、ひとつ聞かせてくれぬか」

「はあ。改まって、いったい何でございましょうか」

「何ゆえ、お前の式神はあも性格に何処か難があるのじゃ。まさか本当に夕陽に懸想けそうしたのではあるまいな。目が血走っていたではないか」

「あまりに完璧な式は、その完璧さゆえ、時に魔性に魅入られ、時に魔性に宿られてしまうからです。魔性とは、美しいもの、完璧なものに引き寄せられるのです」

「画竜点睛を地で行く訳か」

幼女とも老女ともつかぬ一種独特の不思議な声が、得心とくしんがいったのか僅かに唸る。

「はい、わちきの流派独特の考え方ですが。魔性に対抗するには、術式の何処かにほんの僅かな瑕疵かしの部分を残して置くのが最良であると。もちろん、それで魔性の者に遅れを取る事など万が一にもありえませんが」

「そのような式神相手に出し抜いた操を褒めるべきと言う事じゃない？」

「ちよつに「はい」です」

「だが、あの式神のふたりが余計な口を差し挟んできた時にはやはり苛ついたぞ。楓の、せつかくの夕陽への配慮をだいなしにしようになりおって」

「正確に言えばあのふたりは九十九神の眷属つくもがみなのですが。まあ、見逃してやってくださいまし。帰りの車の中では人化の術が解けるのも厭わず、身を挺して夕陽さまをお守りしたのですから。それに、“現代っ子”の夕陽さまのお側仕えにはあれくらい明るい子たちがちょうどいいですよ。夕陽さまがこの一年間置かれていたお辛い境遇を省みればなおさら。それに、女郎花さまのお灸がかなり利いたみたいですから、二度と羽目を外し過ぎる事もないでしょう」

「楓もそう言っていたな。そんなものか」

「このような場所にこもりきりでいらつしやるから、新しい価値観や人の機微に疎くなってしまうのでございましょうなあ」

飄々（ひょうひょう）とした四季の言葉に、闇がざわりと蠢いた。

「――口がすぎるぞ、四季。わらわには、わらわの考えがある」

「申し訳ございません。ですが、わちきはお待ちしております。女郎花さまが東の対に戻られるのを。お館さまのように、夕陽さまの事をより深くご理解なさりたければ、奥の院を早々にお捨てになつた方がよろしいでしょう」

「もうよい、これ以上話す事はない。下がるがよい」

有無をも言わせぬ、冷たい響きの言葉で会話が打ち切られると、闇が一瞬にして霧散する。むさん

気付けば四季は草履も履かずに足袋のまま、蒼白い月明かりの下、由布院の敷地内にある和風庭園にひとり佇んでいた。

そんな彼女の周りをまわりつくようにして、白い蝶がひらひらと舞っている。

「少々、口が過ぎちまったかい。でもまあ、それに対する仕打ちがこの程度とは、あのお方もまるくなつたもんだ。これも夕陽さまのおかげかねえ。なるほど、確かに“音叉”おんさの姫君だ。たがいを響き、響かせる共鳴螺旋シンクロスパイラルという訳かい。本人さえ知らぬ間に周囲に影響を与え、いい方向に導いちゃうなんて、これから先が楽しみじゃないか」

四季が頭上を見上げると、そこには満月を数日後に控えた、半分程欠けた月が夜空に浮かんでいた。

5―2 始まりし時（後書き）

まだ未定なんですが、もしかしたら来週は一週お休みさせて頂く
かもしれません。

その際はどうかご容赦くださいませ。

6―1月下の姉妹

板張りの回廊を進む夕陽の歩みが止まった事を、最初に気付いたのは操だった。

操の霊力を用いて縊^よられている霊系は、夕陽の身体に関する、ほとんど全ての情報を余す事なく、傀儡操者^{くくつそうしや}である彼女に逐一伝えてくるのだ。

この霊系たちを念を込めてさらに縊りあげたものが、“弦”と久沓の一族で呼ばれる霊系の上位素材となる。

それは戦闘のいかなる場面にも耐えうる強靱さを有し、傀儡操者の技量次第ではあるが、霊系を媒介とする宿主を肉体的に強化すると共に、その潜在能力を極限まで引き出す事が可能だった。

現在の夕陽と操、ふたりの神経組織は常に霊系によって霊的に連接されているにも等しく、その情報の内容は肉体的、生理的、感情的にと多岐に渡り、夕陽の体調面と心理面のほぼ全ての領域をカバーしていると言ってもいい。

おたがいの相性、つまりシンクロ率が高ければ、傀儡操者は宿主の思考さえも読む事が可能で、仮に夕陽の護衛役に操の兄である操人が選ばれていたなら、相手が今では異性という事もあり、夕陽にとってはかなりの気まずさを覚える人選だったに違いない。

それが夕陽の側に仕える事を切望していた操にとって、有利に作用した。

操にとって夕陽と性を同じくする事は、兄に対する唯一のアドバンテージだったからである。

兄の操人は、病院帰りの夕陽と実戦を経験しているだけに、その差を覆すのは難しいと操は冷静に分析していたが、この突然訪れた僥倖^{じやうひん}に、言い知れぬ昂揚^{きやうよう}を覚えその身を震わせた。

手毬、小毬、そして操。今回、夕陽の側仕えを任じられた者は、

現時点でその三名だったが、水面下ではさらなる追加人事を巡って、熾烈な駆け引きと争いがあった。

その背景には、由布院楓が東の対に並ぶ西の対の新たな主に夕陽を選び、それについて今は奥の院に引きこもっている女郎花おみなえしが特に何ら拒絶する意思を示す事もなく、静観の構えを貫いた経緯がある。

何故ならそれは、由布院の表と裏を束ねる楓と女郎花のふたりが、夕陽を自らと同等の存在、或いはそこまではいかなくとも、いずれは由布院の後継者に足る存在であると、言外に認めたに等しいからだ。

永きに渡って主が不在だった西の対を与えられるという事は、この由布院正殿、つまり由布院一族の本家にとって、それだけの重い意味があった。

女中頭の四季を間に挟む事で、特定の側仕えを持つとしなかった従来の主たちと違って、次世代の由布院の一角を間違いなく占めるであろう夕陽ただひとりを主と定め、その側に常に仕えていられる使用人は数少ない。

由布院の邸の大部分の使用人たちにとって、操たちは今や憧れの存在となっている。

「夕陽さま？」

操の動きに合わせ、手毬と小毬のふたりも一拍遅れながら、背後へと振り向く。

そして三人の少女たちは、そこに白い妖精が顕現している姿を見た。

回廊の縁にすらり背筋の伸びた綺麗な姿勢で佇んで、蒼く白い月明かりを頭から浴びるその姿は、全身を月の雫で濡らしているかのように仄かに白く光り輝かせている。

それは、とても儚^{はかな}げで、とても刹那的^{はな}で。

手を伸ばして触れてしまえば、ただそれだけで消え入りそう。
例え瞬きひとつの間でさえも、その姿から目を放してしまえば、月の光に一瞬で溶けてしまいそう。

夢が現^{うつ}が見る者を惑わせる、一枚の絵画のように完成された光景がそこにあった。

「夕陽さま、どうされました……？」

えも言われぬ緊迫感が辺りに満ち、からからに渴^{かわ}いてしまった喉からようやく搾^{しぼ}りだされた操の声は、夕陽に届いているのか、いないのかさえ分からない。

だがそれでも夕陽が次に起こした仕草に、次に洩^はらした言葉に、操たちは思わず息を呑んで、それ以上続けるべき言葉を失ってしまった。

「……月が」

夕陽は夢見るように、そうひとり呟いて、つい——と、白魚のよ

うなその指先で月をおもむろに指し示す。

「夜にしては明るいと思ったら、月が……何て、大きい」

顔を顔おとがいにさせながら、夜空を仰ぎ見ているその姿は、この世のものとは思えぬ程に幻想的で。

「こんな……抱えきれない程、大きいなんて」

夕陽は天上から今にも墜ちてきそうな、小さなクレーターの数々に至るまでもはつきりと視認できる程に近い月に向かって、両腕を拡げて、謳うたうように言葉を紡ぐ。

「ねえ……？」

「——っ」

「ねええええ」

月を本当に抱きしめてしまうかのような、夕陽のあまりの神々しさに、操たち三人の少女は息を殺したまま、もはや返事をする事さえまならない。

いつの間にか衣装盆を下に置いて、つたままず跪ひざまずいてしまっている事にさえ、気付いているのか、いないのか。

“ここはああああ、いったいいい何処なのおおおお？　こんなにいいいい、月がああああ近いいいいなんてえええええ”

夕陽が発する言葉のひとつ、ひとつが、まるでハウリングを起こしたかのように大気を震わせる。

それは呪縛、夕陽が身に纏まとう圧倒的な存在感オーラが、彼女の言葉を他者を絡める呪縛へと変える。

その時だった。

場の雰囲気きふきに全くそぐわない、飄々（ひょうひょう）とした四季の聲が辺りに響く。

『へええ、こりゃあすごい。何かと思って来てみれば。呪しゅを唱えた訳でもないのに、言霊ひとつがこれ程までにお強いとは。さすが“音叉おんさ”の姫君さまだねえ、共鳴螺旋シンクロスバイラルたあ、聞きしに勝るお力だ。いろいろ応用も効くみたいで、全く底が知れやしないじゃないか。お館さまたちが入れ込むだけの事はあるよ』

白い蝶が何処からともなく現れ、夕陽の周りをひらひらと、不規則な軌道を描いて舞っている。

『何をしているんだい、操。手毬と小毬のふたりだけならともかく、夕陽さまの巻き添えで、おまえまで月に酔っちまったのかい？』

蝶はやがて夕陽から離れると、今度は操たちの頭上を舞い始める。問われた操は跪いて三つ指を着いた姿勢のまま、身動きひとつしない。

代わりに、答えを拒絶するかのように口唇をきつく噛みしめる。

『答えたくないなら、まあいいさ。わちき相手に意地を張っても仕方ないだろうに。だがねえ、こうして霊系のつながりが裏目に出ちまう事もある。まだまだ慢心するんじゃないよ。さあ、早く夕陽さまを湯殿へご案内するんだ。お館さまを何時までも、お待たせするもんじゃない。さっきの一本は認めてやるから、いい加減に落ち込むのは後にしな』

そう言い残して、操たちから離れた蝶は、しばらく夕陽と操たちの間をひらりひらりと、何かを探るかのようには舞っていたが、やが

て何もない空中でその動きを止めて、宙に浮かんだまま羽を休める。
蝶の不可解な動きを訝しげに目で追っていた操だったが、ふと何かに気付くと思わず呻き声うめを洩らす。

「まさか……わたしの霊系が見えているのか？」

蝶は空中に浮かんだままの状態で、二、三回、ゆつくりと羽を開いて、閉じてを繰り返すと、不意にその姿が一瞬の間ふれ、弾けるように細かく震えると、最後に眩まよいばかりの燐光りんこうを放つ。

それと同時に操の見えないはずの霊系が、高圧電流を帯電でもしたかのように、放電にも似た現象を起こしながらその姿を現す。

蝶が発する、式を物質化させた燐光がプラズマ放電を誘発し、夕陽の言霊を中性化、場を支配する呪縛を一瞬にして中和していく。

“ キュアアアアンツ！”

最後に、操の霊系がひとしきり震え、啼なき終えると、夕陽を始め側仕えの少女たちは我に返り、身体の自由を取り戻す。

全ての状況をひとり把握している操は、衣装盆を手にいち早く立ち上がると、忌々しげに口唇を歪めながら、高速化言語を用いて四季に向かって憎まれ口を叩く。

『礼はしません。頼みもしない事を勝手にされたのは頭かしらですから』

表情を読まれないようにする為か、操は俯うつむき加減に夕陽に近寄っていく。

そうして主の体調をしばらく気遣い、意識が確かなのを確認すると、手毬と小毬のふたりが追い付くのを待つて、再び湯殿へと続く回廊を先導していく。

ただの一度も振り向きもしない操を、白い蝶は宙を舞い踊るようにして見送っていた。

『可愛げがないのが、可愛らしいって奴かねえ。夕陽さまへの態度とは大違いじゃないか。ちょいと悔しい気もするが、お目覚めになられたばかりにも関わらず、あれだけの器を見せ付けられちゃったから、これはもうわちきも納得するしかないじゃないか』

何処か楽しげな言葉の響きを残して、白い蝶は再び蒼く白い月明かりに、溶け込むようにして消えていった。

6―1月下の姉妹（後書き）

今週末に、docomoの携帯からiphone 4に乗り換えするかも。

その場合、テキスト作成が一番の心配。
今までみたいに執筆できるよね？

機械音痴なのでドキドキです。

6―2月下の姉妹

『コクン』と小さく喉が鳴ると、冷たい液体が食道の奥へと滑り落ちていく。

それまで何処か夢見心地でいた夕陽がふと我に返えると、すぐ目の前に由布院楓の類い希なる美貌があった。

どうやら何かの液体を口移しで飲まされたらしいと気付くと同時に、触れ合う素肌同士のぬくもりが、ふたりが全裸である事を、夕陽に教えてくれる。

おたがいの身体に一分の隙間もない位に密着し、それぞれの乳房と乳房が押しつぶされて形を変えてしまう程の距離。

何故いきなりこんな状況になっているのか、まるで心当たりのない夕陽は反射的にもがいて由布院楓の腕の中から逃れようとするが、擦れた乳首からの疼痛にも似た刺激に、思わず背筋をのけぞらせて、甘く小さな悲鳴をあげてしまう。

初めて本格的に味わう女としての性感に、夕陽は戸惑い、そして混乱する。

男性器から得られる吐き出す側による刹那的な快感しか知らない夕陽にとっては、女性器がもたらす受け入れる側の螺旋的に登り詰めていく快感は全くの異質で、想像もつかない程の違いがあった。

快感を快感として知覚する以前の脊椎反射レベルの反応速度で、自らの意志によるコントロールでは全くどうにもならない、そんな強烈な快感。

刺激に対してまるで無防備な状態をさらけ出し、大きく背中を仰け反らせてしまうような甘い感覚。

それらはいずれも、夕陽がまだ以前の少年だった頃に覚えた自慰の最中にでさえ味わった記憶はない。

ましてや、このような状況でありながら、他者から与えられる刺激に対する快感を悦んでいるかのように、甘く切なげな嬌声を知らず知らずにのうちに洩らしてしまうなどという経験はあるうはずもなかった。

快樂の海に溺れ、今にも窒息しそうな夕陽の両手は、本人でもそれとは気付かぬうちに、何時しか何かに導かれるようにして、由布院楓を求めてしまう。

彼女のなめらかな曲線を描く背中に縋るようにして、夕陽の両手指先の爪が、その柔肌に食い込んでいく。

仮に誰かが、その光景を客観的立場で目にしたなら、ふたりの姿は姉妹という境界線を越え、たがいがたがいを激しく求め合う恋人同士の艶めかしい姿にしか見えないはずだ。

それは、たがいの瞳の奥を覗けそうになる位にとても近くて、たがいのぬくもりを覚え、たがいの息遣いに触れ、たがいの体臭を嗅いで、たがいの全てさえも感じられる程の距離。

それ程までに近い距離であるなら、たがいの鼻先と鼻先が触れ合って……さらには、たがいの口唇と口唇同士さえも甘く重なり合ってしまうのが必然。

夕陽は、最初は口移しの為だったはずのそれが、何時からか恋人同士が交わす小鳥がついばむようなくちづけに変化している事に気付くと、とろんと半ば酔い痴れていたその瞳を大きく見開いて、慌てて由布院楓から身体を離そうとする。

汚れを知らない処女のような外見を持ちながら、娼婦のように妖艶な手練手管をも併せ持っている、可憐な少女の顔をした由布院楓がそれを許すはずもない。

夕陽の動きを察した由布院楓の舌が再び彼女の口唇を割り、齒列を割り、甘い果汁のような唾液を伴なって、夕陽の口腔内奥深くに侵入すると、自身の舌を何のためらいもなく、相手の舌に絡ませ愛

撫する。

湿った淫靡な音が辺りに響いて、それが夕陽の鼓膜をも震わせる
と、口腔内に絶え間なく与えられ続けている刺激と併せ、彼女の脳
髄はやがて甘く甘く痺れていく。

そんな余裕のない状態でありながら、夕陽は何か熱い液体のよう
なものが、自身の股間から溢れるようにして、内股を伝い始めてい
る事に気付く。

実地的な女の性に関する知識をまだほとんど持たない夕陽は、よ
りにもよって粗相をしてしまったのだと思い込み、猛烈な羞恥心に
苛まれながら、左右の膝頭同士を擦り合わせて腰を擦るようにな
がら、それまで絡み合っていた下半身を由布院楓から再び離そうと
する。

すると、その動きに合わせてクチュクチュと湿った淫靡な音が、
女性器のある股間の翳りのあたりから響いて、夕陽のからうじて最
後まで残っていたなけなしの理性は、羞恥心と未だ自覚には至らぬ
潜在的な快感によって、白く白く灼け尽くされていく。

「んっ……ふ。ん、く。あ……あふう」

夕陽は甘く鼻を鳴らしながら、自らの四肢から力が抜けていくの
を、何処か遠く他人事のように感じていた。

自分からねだるようにして、由布院楓の口唇を求めてしまう自分
自身に、ただ戸惑う事しかできない。

一度は逃れようとした下半身も今では自分から脚を絡み付け、腰
を押し付け、股間にある翳り同士を擦り付けているような有り様で、
完全に由布院楓の技巧によって翻弄されてしまっている。

操が施している傀儡の術によって背筋に一本通っているはずの芯さえも何処かに消え失せてしまい、ともすれば膝からくたりと床の上に崩れ落ちそうになる。

やがて、股間の翳りから溢れる愛液の量が一気に増して、内股をしとどに濡らし始めると、夕陽に僅かばかりに残されていた理性も、後は蒸発して消えていくだけになっていく。

そうして結末の時が訪れると、夕陽は口唇を奪われたまま、くぐもりながらも『あぁっ』と、短く艶のある響きで一声啼いて、大きく背中を弓なりに仰け反らせると、ひとしきり全身を痙攣させ続け、波打たせる。

意識を完全に飛ばしてしまった夕陽の身体を、細く華奢にくびれた腰と背中に廻っていた自身の腕で支えようと、由布院楓はようやく妹の紅く濡れて切なげに震える口唇を解放した。

濃厚なくちづけがもたらした名残りである銀の糸が、たがいの口唇の間で光っている事に気付くと、由布院楓は再び夕陽の口唇を軽く吸って、途中で切れて落ちそうになっていた光る糸を全て飲み込んでしまう。

「許してくださいね、夕陽さん。こうでもしないと、あなたにはまだまだ刺激が強すぎて、わたくしと一緒に湯槽には、入ってほくださらないでしょう？ 最初のきっかけだけはわたくしが与えてあげますね。それにしても、湯殿が何かを分かっているしやなかったなんて、何て迂闊で、何て可愛い。言葉の響きと、漢字の表記がうまく結びつかなかったんでしょうね。おまえたち、夕陽さんには今後あまり古い言葉は使わないように気をつけなさい」

姫がいくら桁外れに優秀な頭脳を持っていても、今の夕陽はまさらな処女雪のような状態で、その広大な雪原のキャンバスにどのような絵図が描かれるかは今後を待たなければならない。

「何れの色に染まるのもこれから次第ですか。姉である身としては、責任を持っていい環境を整えてあげなければなりませんねえ」

由布院楓の言葉に応えるかのように、それまで睦み合う姉妹の邪魔にならぬよう、気配を消していた夕陽付きの側仕えたたちが何処からともなく彼女の背後に現れると、それぞれの想いを口にする。

彼女たちは皆、主の世話をする為、白衣の浴着に着替えを済まし、前裾をはだけて膝上丈にまでたくしあげていた。

「微力ながら、わたし共もお手伝いさせていただきます、お館さま。ねえ小毬？」

「もちろんですう、手毬ちゃん。夕陽さまの為なら、この身でさえ捧げられますからあ」

女郎花が嫌う軽い口調ではあるが、ふたりは朧と暁による襲撃の際、急制動のかかったリムジン車内で実際に身を挺して夕陽の危機を救っている。

ふたりの主を想う心に嘘偽りはない。

「それにしても……お館さま。夕陽さまが、お目覚めになられたばかりで……湯浴みをする前に水分補給が、必要でいらしたのは分かりますが……口移しでドリンクをお与えになられた、後の事は……少々やりすぎだったのではないでしょうか？」

途切れ途切れにようやく最後まで言い終えた操は、そこで力尽きたのかひとり態勢を崩すと、露天の湯殿に敷き詰められている、素足でも滑らないようマットに仕上げ加工された黒の御影石の上に腰を落として、両手を床につけてしまう。

彼女の頬は夕陽と同じく紅潮し、息遣いも乱れ、胸が激しく上下している。

何かに耐えるように眉根を寄せて、肩を震わせながら、ただじつと俯いてその場にうずくまっている。

「操……おまえは、霊系による感応能力をオンオフする術を早急に身につけなければなりませんねえ。夕陽さんの精神状態からの影響を受け過ぎです。相性を無視して、久沓……兄と無意味に張り合いこれに打ち勝とうなどという浅はかな考えを持つのはお止めなさい、時間の無駄ですから。音叉の螺旋の渦に呑み込まれて自我を失ってしまってもよいのなら、二度と止めはしませんが」

「——」

由布院楓の技巧を凝らした愛撫を、霊系を通して夕陽と共有していた操だったが、生まれたての敏感肌である夕陽が先に絶頂に達してしまい、さらには意識を失ってしまった為にひとり取り残されてしまっていた。

満たされる事のなかった欲望の疼きを処理する事ができずに、ひとり悶々としている今の彼女に、由布院楓の忠告が何処まで届いているかは疑わしい。

絶頂を迎えるに迎えられないもどかしさと戦っていた操は、やがて主たちの目前で精神的な鹵止めが利かなくなってしまう恐怖と予感に打ち震えた。

『はあ……』と、悩ましげな吐息を知らず知らずのうちに洩らし始めるに至っては、心の内なる堤防が決壊してしまうのもそう遠い未来の出来事ではない。

そんな絶望的な状況に追い詰められていた操を救ったのは、これもまた未だ意識を取り戻せずにいる夕陽だった。

追い詰められて、そして救われる。

これでは操は夕陽の側にある限り、自身の生殺与奪権が完全に夕陽の掌中にあると認めざるを得なくなってしまう。

それでも、自ら夕陽から離れるなどという選択肢はない。

夕陽は傀儡操者の……否、全ての術者の能力を最大限に引き出し増幅するブースターのような存在だからだ。

そのような唯一無二である得難い存在から、離れられるはずもない。

操には、最初から選択の余地など与えられてはいなかった。

「……姉さん。楓、姉さ……ん。お願い……離しちゃ嫌、だ。ずっと、おれの側に……いてよ。真陽……みたいに、おれを……ひとりにしないで」

それが契機だった……夢現の状態で洩らされた夕陽の言葉。

それは紛う事なき夕陽の本音、心の奥底にしまわれていた、真情の吐露。

始祖の十人——由布院楓という心から頼れる存在との出逢いが、この一年間、常に張り詰めていた夕陽の心の緊張を解きほぐしたのだ。

「まあ……っ、夕陽さま！」

手毬と小毬のふたりが、口許を重ねた両掌で覆い、感極まった様子で小さく叫んだ。

由布院楓でさえ顔色を変え、夕陽の身体をきつく、そして慈愛を込めて抱きしめている。

操とて、例外ではなかった。

夕陽の涙と悲しみにまみれた想いが、事故の瞬間の情景が、この一年間の時の流れが、霊糸を通して満ち潮のように操の心に押し寄せてくる。

それと共に、操の心はまるで夕陽の涙で洗い流されるかのように浄化されていく。

由布院楓は夕陽に対する姉妹の情を、操を始めとする側仕えたち

は主への忠誠の誓いを、それぞれが、それぞれに固めた瞬間だった。

幕間2月下の迷宮

厳島神社を何処か連想させるようにして、湖のほとりに建てられている由布院の邸は、平安時代発祥の高床式寝殿造りと呼ばれる建築様式を、現代風にアレンジした設計になっている。

それでも、竣工は明治初期にまで遡る為、元々の朱塗りを多用した絢爛さと、侘びや寂びと呼ぶに相応しい、充分な時を重ねただけの風合いを同時に醸し出しているのだが、不思議な事に未だ老朽化の気配が忍び寄る様子は微塵もない。

その基本構造は建屋の中核を為す主殿を中心に、正面入口側を起点にして時計廻りに表の院、西の院、奥の院、東の院という名の独立した建屋がぐるりと取り囲む。

その配置は方位学的な見地から、主に鬼門を避ける目的で、東西南北の正確な方位からは僅かばかりずつズラされている。

それぞれの建屋は、基本的には何れも決められた主が全てを差配する権限を与えられてはいるのだが、それらを含む由布院の全てを司るのが、表の院と主殿の主たる由布院楓だった。

表の院に対する奥の院、東の院に対する西の院は、たがいを合わせて対屋^{ついのや}として扱われる事も多く、特に夕陽を西の院に迎え入れた今では、女郎花が永らく不在にしていた東の院に戻るのではという期待の意味も込められて、東の対、西の対との呼び方をする者が使用人たちの間で増えてきていた。

各建屋は主殿を構成する一辺よりもやや長い程度で、建屋同士の間と主殿への行き来には、それぞれに繋がれている渡^{わた}殿と透^すき渡^{わた}殿と呼ばれる回廊を利用する。

米国防総省庁舎ペンタゴンを、スクエアに構成し直した建屋を想像すれば、由布院邸の構造上の外観イメージからはそれ程遠く外れる事はない。

朧はもうかなりの長い刻を、由布院邸の中で彷徨い続けていた。予定では早々に暁を喚び出した後に、この邸を後にする目算だったが、それは未だ叶わずにいた。

それどころか、何時の間にか後を追われてしまっている事にも気付いて、思わず舌打ちをする。

追跡者は執拗で、気配を完全に消しているはずの朧の背後をつかず離れず、その存在を隠そうともせずに追ってくる。

その事実から、朧は姿を見せない追跡者の実力をかなり高めに見積もった。

甘い予想はしない、彼我の実力差を見誤れば、待っているのは死あるのみだ。

朧はこれまで、そういう世界で生きてきた。

「くそつ、これだけ動き回ってどうして誰とも出会わない」

朧は忌々しげに吐き捨てると口唇を歪める。

事態の打開を図る為には人質を捕る事も厭わない朧だったが、これだけの広大な邸であるにも関わらず、使用人の姿をひとりとして見ない。

このまま持久戦に持ち込まれてはジリ貧だった。

地の利を考えても、主導権は完全に追跡者側が握っている。

暗い方、暗い方へと逃れてきたが、それすら敵の罠に思えてくる。臃にすればどうにも分が悪く、彼女は決断の時に迫られていた。

「仕方ない、やるか」

体術も人並み以上にこなす臃は、追跡者を迎え撃つ決意を固めると、その後の行動を素早く起こす。

不意をつき、迷宮のような通路を一気に駆け抜け手近な角に飛び込むと、追跡者を誘い込む。

臃は和服の前裾を捌くと、後を追ってくる気配に向けて、振り向きざまに鞭のようにしなり、身体に巻き付く回し蹴りを放つ。

それは絶対に避けられない、一撃必倒のタイミング。

「おお、怖い、怖い。いきなりご挨拶だねえ」

だが、飄々としたその声は、ありえない事に臃の背後から聞こえてきた。

「バカな……っ」

朧は自らの攻撃が空を切った事に信じられない思いで振り向くと、そこには緋色の和服を婀娜あなに着こなす四季が、男を誘う遊女のように両の肩をすんと落として、全身から力を抜いた隙だらけの艶やかな姿で佇んでいる。

実力のない者なら迂闊に四季の間合いに飛び込んで返り討ちに合ってしまうだろうが、朧はそんな愚は犯さなかった。
慎重に間合いを計って、距離をとる。

「確か朧さん……でしたか。そんなに急いだ様子で一体どちらへ？
何か要りようなものがあればわちきが承りますが？ 誰の許しも得ずに、勝手に邸内を動き回られては困っちゃうんですがねえ」

「だったら牢にでも入れおけ。武器を取り上げただけで部屋に鍵も掛けず、監視も付けずにいれば、誰だって逃げる事を考えるだろう」

嘲りを含んだ朧の答えに、まるで見えない何かにしなだれかかっているかのような姿のままだった四季の雰囲気は、ただならぬ色香を漂わせながらもあくまでも飄々としている。

この状態の四季から危険な匂いを感じ取れる朧もまた、ただ者ではない。

「逃げられやしないよ、この邸からはねえ。勘違いしてるようだが、これはあんたの為に忠告しているんだ。この邸内でもまた、迷い人になりたくないなら大人しくしているんだね。何年も行方知れずになつて、亡骸になつてから見つかるなんて事になりたくはないだろう?」

「何を言ってるんだ、おまえ。阿片でもやっているんじゃないだろうな?」

「なあに、そんなに構えなくてもいいんだよ。これはただの昔話さ。浦島太郎って知ってるかい?」

「浦島伝説くらい知っているが。それがどうした」

「察しが悪いねえ、その浦島太郎みたいにはなりたくないだろうって、わちきは言ってるのさ」

「……………」

「この邸はねえ、さしずめ浦島伝説の竜宮城なのさ。いや、由布院に敵対する者にとつては、あれより余程たちが悪いかもしれない。種も仕掛けもない絡繰^{からく}り邸^{やしき}みたいなもので、何処の時代や空間に繋がっているかもしれない陥穽^{わな}が、至る所に転がっている迷宮みたいなものなのさ。例えばあんたが今曲がったばかりのその角の向こうは、もうあんたがさつき通ってきた廊下とは、違う時空に繋がっちゃまっているかもしれないだよ」

世間話でも語っているかのような軽い口調だったが、四季が紡ぐ言葉の内容は衝撃的で、朧はしばし言葉を失った後でようやく口を開いた。

「バカな……浦島伝説は事実だったとしてもいうのか？ そんな信じられる訳があるか」

「常世やニライカナイのまほろば伝説は信じて、浦島伝説は信じられないってのかい？ ただの昔話だって？ とんでもない。だって龍宮伝説と言い換えてもいいさ。根はみんな同じ他界信仰から来てるんだよ。信仰するのはねえ、ただの妄想ばかりじゃないのさ。それに、あんたはもう既に、玉手箱を半分開けちまっているってのに」

「玉手箱だって？」

「まだ気付いてないのかい？ 自分の今の姿形なりをようやく確かめてみな。帯だつてもうすっかり緩んじまってる。和装でなければ、すぐにでも自分の身に起きた変化に気付いただろうに。おそらくは、声も変わっちまっているんじゃないのかねえ？」

朧は自身の姿を見下ろし息を呑んだ。

手足はすらりと長く伸び、胸の辺りは膨らんでいるのか僅かに隆起している。

どうやら髪も長くなっているらしく、まとめてあった髪が乱れて、ほつれ毛がひと房、ふた房、はらり、はらりと肩口から垂れてくる。

四季が指摘するとおり、着物の丈も身頃もまるで合っていない。確かに帯が緩んでいなければ、相当に窮屈な思いをしていただろう。

着物が縮んだ訳ではなく、自身が成長したのだとすぐに気付きはしても、そう簡単に受け入れられる事実ではない。

臃は長い時をかけて、肺からの空気を搾り出すようにして呻いた。

「こ、これは……………」

声も意識して聞いてみれば、以前に較べ、若干ではあるが大人びた響きに变化している。

「どうだい？ えらく女つぷりが上がってるじゃないか。夕陽さまには到底及ばないが。それでも大体同じ年頃くらいにはなったかねえ。その程度で事が済んで運がよかったよ。下手すりゃ、皺くちやのばあさまになっちまってた処だ。でもこれで分かったろう？ この邸内をひとりで勝手に動き回る愚かさか？」

「おまえ、何者なんだ？ おまえも何か術を使うのか？」

「わちきかい？」

未だ完全には立ち直れてはいない臙に向かつて、四季は恭しく腰を折る。

それでも慇懃無礼な態度にならないのは、さすが由布院本家の女中頭だったか

、名乗りを上げる四季の言葉はそれだけには留まらない。

「これは申し遅れました、わちきは由布院女房方取りまとめ役、女中頭を務めさせて頂いております、四季と申します。と、まあそれは表の顔でねえ、現世から迷い込んできた鼠を駆除する役目も仰せ遣っているのさ。さて、そこで訊かせてくれるかい？ 臙と暁、あんたたちは保護すべき迷い人が、恩知らずの薄汚いどぶ鼠の一体どちらなんだい？」

四季の挑発めいた言葉に対する臙の答えは、そっけないものだった。

「どちらでもないさ、わたしたちふたりはただの傭兵だ」

「傭兵だって？ こいつぁ驚いた、お館さまのお見立てが外れるなんて。とてもじゃないが、言葉どおりには受け取れないねえ。大体いつの時代かは知らないが、傭兵にしては学もあるし、えらく忠義じゃないか。敵も味方もない藩主の為にこんな時の狭間にまで流れてくるなんざ。それもまあ、死に損ねたあげくの偶然の産物なんだろうけどさ。けれど、それにしてはえらく往生際が悪い。鉄の駕籠、

リムジンを奪おうとしたばかりか、うちの大事な姫君さまに手をかけようとまでするなんざ、全く許し難い話だよ」

「必死にもなる、わが藩は今の戦で敗色濃厚なのだ。負けてしまえば、今までの禄ろくの回収ができなくなるばかりか、明日からの食い扶持にも困ってしまう」

「それでかい。主君……雇い主がいなくなれば相手が戦意喪失して言いなりになると思ひ込むなんざ、確かに傭兵の発想だけどねえ」

「勝手な事を言ってくれるじゃないか」

齒軋りが聞こえてきそうな表情で、臃は言葉を吐き捨てる。

そんな臃の神経をさらに逆撫でするかのように、四季の挑発は続く。

「まあ仮にあんたらふたりが、幼いながらもいっぱしの傭兵とするなら、主君とは餌をたらふく食わせてくれる相手か、そうでないかの違いでしかないんだろうねえ。忠義を尽くすのは食う為で、米倉の米を食いつぶすしか能がないなんざ、どぶ鼠とさして変わらないさ。連中でさえ、数に頼めば船底に穴を開けて大きな軍船を沈めるくらいはしてのける」

「おまえに何が分かるっ」

「分かりたくもないねえ、わちきはこれ以上あんたらの事情って奴

には興味がないのさ。いずれにせよ、とんだ無駄骨を折ったもんだよ。あんたらが戻るべき場所なんて、もうとつくに消えてなくなっちまってるだろうに。米倉どころか、田畑の一枚さえも残っていやしないだろうねえ。国敗れて山河ありってやつさ。そんな処に、鉄の駕籠なんざ持つて行ってどうするつもりだい？ 敵国の騎馬隊に對抗するつもりだったんだろうけどさ、ありゃあ平地でしか使えないよ？ 繰り返すが、あんたらふたりは雇い主には二度と会えないだろう。それどころか、元の国、元の時代に戻れるかどうかさえ定かじゃない——っ！？」

言葉の途切れた四季の口唇から、『ゴブリ』と音を立て、鮮血が溢れだす。

ゆっくりと胸元を見下ろす彼女の瞳に映ったのは、自身の身体を貫通する、血にまみれた一本の貫手だった。

「いい加減に黙りやがれ。それ以上、臍に汚い言葉を吐くのを止める」

肩越しに臍よりも幼い姿のままの暁の姿を確認し、四季は息も絶え絶えの様子で言葉を紡ぎ続ける。

「あんたが、暁……かい。ようやく姿を現してくれたねえ……身柄

を預けた久沓の元から、姿を消したと聞いて……ずっと探していたのさ……」

「迂闊だったな、暁は目が覚めてからすぐに喚び出し、合流してからはずっと、わたしの影に潜んでいたんだ。何時だって、わたしの一番側にいてくれる」

「ふ……ふふつ。辛抱強く……あんたを泳がせ続けた甲斐が……あつたつてもんさ」

「何……っ?」

四季の身体の輪郭が一瞬で不確かなものになったかと思うと、次の瞬間には、鮮血は真紅の蝶に、足許からは純白の蝶に、幾百幾千もの数に細かに分裂し、雪崩を起こしたかのように音を立てて全身が崩れ落ちていく。

最後まで崩れず残っていた四季の口唇は、耳許まで裂けたかのような笑みの形に象^{かたど}られていた。

「まさか、暁が式神だったとはねえ。同業者なら遠慮はしないよ!」

紅白の吹雪が吹き荒れ、音を立て、臙と暁のふたりに叩き付けられるようにして降り注がれていく。

口に、鼻に、臙の呼吸器官の全てを、四季の意志が操る吹雪によ

って埋め尽くされていく。

「あ……か……つき………っ」

必死に喚んだ暁の名は、もはや声にならない叫びにしかならなかった。

視界もすぐに埋め尽くされ、朧の瞳からは暁の姿はとうに消え失せている。

かろうじて繋ぎ止めていた意識も薄れ始め、いずれ気を失ってしまつのも、後はただ時間の問題となっていた。

幕間2月下の迷宮（後書き）

今回は予定をちょっと変更して、四季と朧の絡みを書いてみました。

朧と暁が登場した回が分かりにくいとのご指摘をお二方から頂きましたので、早めに伏線を回収した方がよいのではという判断からです。

余計分かり辛くなっていたらどうしよう。

ただ、朧の素性はあくまで仄めかす程度で、これ以上は詳しく書かないつもりです。

彼女に関する情報は今回で必要最小限書いたつもりなのですが、どうでしょうか？

それと、彼女を急速に成長させたのには、もちろん意味があります。その意味については今後の展開を待つ事となります。

つたない作品ですが、いつも応援して頂いて、本当に感謝しています。

評価も含めて、読者の方の励ましがなければ、たぶん前作みたいに途中で書けなくなってしまうでしょう。

今後も頑張りますので、MTFをよろしくお願い致します。

7―1 傷（トラウマ）

その時、月明かりを映す水面に一匹の蝶が枯れ葉のように、羽を散らし、鱗粉を散らすと、はらりと落ちて波紋を広げた。

蝶は描かれた五芒星を滲ませながら白の和紙札に戻っていき、やがて湯槽の底へと揺らめきながら沈んでいく。

湯槽の外。洗い場の片隅に立ち、三人横に並んで控えていた操たちが一斉に気色ばむが、由布院楓は全く動じる気配も見せずに落ちて着いた声で応える。

「お館さま……っ」

「分かっています。二対一とはいえ、四季相手に胡蝶の舞を使わせるまでにやれるとは、やはりかなりの拾いものでしたか」

由布院邸の露天風呂は自然石が組合せられた湯槽が、枯山水の庭園に、灯籠、東屋、茶室等と共に絶妙な位置に配置された実に風流な景観を誇る。

庭園内にはまた、屋根の付いた本格的な総桧造りそうけぞうりによる湯槽も備えられている。

それらはいずれも結界により幾重にも隠匿され、女郎花の許可を持たない邸の関係者以外の者には、誰の侵入を許す事もなければ、その正確な位置さえ知られる事はない。

「はあ……夕陽さまが絶対安全な場所にいらっしゃるからって、遊びがすぎるから手痛いしっぺ返しを受けるんです、頭は」

「四季には四季なりの考えがあつての事です、操。実際、先に姿を消していた暁をも炙り出したのですから、一概には責められません」

「は、はい……っ。申し訳ありません」

溜息混じりに何気なく洩らされた操の言葉を、由布院楓が咎めた。四季と相對している時とは違つて、操はまだ素直な様子で頭を下げる。

「朧と暁、この由布院の敷地に迷い込んで来る事自体、何がしかの縁えにしがあるのでしょ。年頃もこれでちょうどよくなつた事ですし、揃つたようですね……女郎花の言葉どおりに、夕陽さんの護衛役が全員。操がいればリハビリも時間の問題ですし、後は復学のタイミングだけです……」

「夕陽……学校、早く行きたいな」

思考の淵に沈みかけていた由布院楓の意識を、夕陽の甘い響きを帯びた声が呼び戻す。

「お目覚めになりました？　夕陽さん。少し提案があるのですが、聞いてくださいますか？」

「なあに……？」

由布院楓が目を弓なりに細めて、膝の上に乗せた夕陽の身体を抱き直すと、彼女は赤子のように、姉の着痩せする豊満な胸許に顔をうずめる。

「まず始めに、お身体の調子はいかがですか？　何処か気になる点はございませんか？」

「んーん。全然平気」

「それはようございました。では、本来夕陽さんが松葉杖や車椅子を必要としなくなるまでに、あと十日前後はかかるはずだったのはご存知ですか？　今こうして、夕陽さんが自由に動いているのは操の存在があればこそなのです」

「んーん。そんなの知らない」

「芙蓉のお姉さまからは、何も聞いてはいらっしゃらないのですか？」

「ん。全然何も。でも、芙蓉のせんせい好きっ」

「……芙蓉のお姉さまは素敵な方ですからねえ。何より、落ち着いてらっしゃいますから」

身体を起こして見上げてくる、無邪気な夕陽の言葉に、由布院楓の瞳がめずらしく揺れた。

夕陽はそんな小さな姉の変化に気付くはずもなく、さらに続けて弾んだ声をあげる。

「レイも好きっ。曲、いっぱい知ってるよっ」

「レイ？ ああ、朱理と恵那ですか。あのふたり、姫の地位向上の為にと言って広告塔を買って出るだけあって憎めない性格なんですよ。わたくしの姉を名乗るのでしたら、もう少し落ち着いてくださるとよろしいのですがねえ」

とうとう身振りまで加わり始めた夕陽の様子を、複雑な表情で見つめる由布院楓に、操たちは内心非常に驚くが、もちろんそれを表情に出したりはしない。

「だけどねっ……」

夕陽はそこで言葉を一度区切ると、由布院楓の瞳を覗き込んで、
につこりと邪気のない笑顔を浮かべた。

誰も見惚れてしまう程の、穢れを知らない澄んだ夕陽の瞳に、
由布院楓の心はまるで思春期を迎えた少女のように高鳴ってしまう。

「楓お姉ちゃんは、もっともっただあい好きっ」

さらに追い討ちをかける夕陽の殺し文句に先に陥落したのは、脇
で控えていた三人の側仕えたちだった。

喉を詰まらせたような音がふたつ続いた後、小毬の焦りを含んだ
声が湯殿に響く。

「手毬ちゃん、手毬ちゃんどうしたの。鼻を押さえたりして？ あ
あっ、操ちゃんまでっ」

騒ぎを横目に、かろうじて態勢を立て直した由布院楓は、夕陽の
瞳から逃れる為に、鎖骨のくつきり浮いたまだ生まれたての華奢な
身体をそっと抱き寄せる。

「何か、怖い夢でも見ましたか？ 退院の時と同じく、また甘えん坊の夕陽さんに戻ってしまわれましたねえ。素直な方は好きです、わたくし。可愛い妹に、甘えられるのも嫌いではありません。ですが、これは…… PTSDによる、フラッシュバック？ 幼児退行さ
れているのでしょうか」

最後近くの言葉は呟くようにして考え込んだ由布院楓の様子に、自分から関心が離れてしまう事が嫌なのか、夕陽は姉の思考を遮るかのように言葉を繋いだ。

「ね。さっきのお話しの続き、もっとして？」

少し身を引き気味にして、軽く右に小首を傾^{かし}げ、上目遣いに見つめてくる夕陽の可愛らしいおねだりを、由布院楓が拒めるはずもない。

「今の状態の夕陽さんでは、何処までわたくしの真意が伝わるかは分かりませんが、だからこそお話しておくべきでしょうか？ あな
たの隠された本音が知りたいのです。素直なお気持ちを聞かせてください」

「夕陽、難しい事はよく分かんない」

由布院楓のほつれた髪で戯れ始めた夕陽の仕草に、くすりと微笑を洩らす。

これまで無縁だと思っていた、母性愛とも、恋愛感情ともつかない、不確かでありながら心の奥底から湧き上がって来るような想いが、今は無性に心地よく感じられる。

由布院楓は未知なる自分自身と、今初めて対峙していた。

「さして、難しい話ではありません。あなたのお姉さま……真陽さんの意識ですが、芙蓉のお姉さまが治療を引き継ぐ事が決まった今、そう遠くない時期に回復されるのは間違いないでしょう」

「……………つ。真陽なんか大嫌い。夕陽を置いて、パパやママと一緒に引っちゃうつもりなんだ。だから目を覚ましたくないんだ」

「それも、もう終わりです。むしろ問題はリハビリ面で、真陽さんは脊椎の損傷が酷いらしく、このままではお目覚めになられても寝たきりの不自由な病床生活が長引く事が間違いないそうです。最悪の場合、下半身不随も覚悟されなくてはならないとか。こればかりは、医学界で神の領域と称される、芙蓉のお姉さまだけが成し得る事のできた超高高度医療でさえも限界があるそうなのです」

「……………」

「そこで、お目覚めになった真陽さんを由布院でお預かりして、操の兄……操人を側に付けようかと今考えているのですが、いかがでしょうか？　夕陽さん程の動きはとも望めないにしても、おそらくは日常生活にそう不自由しない程度には動けるようになるはずで
す。それは世界中何処を探しても、この由布院でのみ可能な……あえてこう申しますが、希少価値のある技術なのです」

「由布院で……だけ？」

本来なら夕陽はこの場面で、かねてより抱いていた疑問について、納得いくまで質問するべきだったが、フラッシュバック幼児退行している今の夕陽は、幸か不幸か現状で直面してしまっている現実については現実としてあるがままに受け入れてしまっていた。

由布院楓の言葉の内容を理解する程度の知識と知性を維持してはいるものの、それを使いこなすまでには至らない状態にある。

「いかがですか？　いつそ、この邸にこれからずっとお住みになられたら。わたくし、由布院楓があなたたちの身元引受人に……いいえ、おふたりさえ宜しければ正式な家人として由布院に迎え入れる用意もあります。安曇野の姓を棄てるとは、わたくしも申しません。普段はそう名乗って頂いても結構です。それでも由布院の名の力は絶大で、義理とはいえわたくしと姉妹の契りを結んで頂ければ、これから先の何不自由ない暮らしと、この世のいかなる災厄からおふたりを守り抜く事をお約束します」

由布院楓はできるだけ押し付けがましくならないよう、細心の注意を払って最後までそう言い終えると、息を詰めて夕陽の答えを待つ。

「かじんって、何？」

「家族の事ですよ、夕陽さん」

「楓お姉ちゃんが、夕陽を家族にしてくれるの？ 何で？」

「あなたの事が好きだからですよ、とても大事に思っています。あなたの為になら、例えば他の始祖の十人を敵に廻す事になったとしても後悔はしないでしょう」

抱き締める由布院楓の腕に、やんわりと力が加えられ、夕陽は軽く身じろぎをするが、それでも逃れようとする気配は微塵も見せず、姉に逆らう事なくされるがままに任せている。

夕陽もまた、由布院楓同様に今の状態を心地よく感じ、ふたりが共有しているこの時が永遠に終わらない事を願っていた。

静かな時が、ふたりの間に緩やかに流れていたが、事態はこの後急変する。

「好き？ 姉さん、本当に夕陽の事が好き？ ずっと夕陽の側にい

てくれる？」

「もちろんですとも。夕陽さんがそう望んでくださるなら、ずっと側にいます。むしろ、こちらからそうお願いしたいくらいなんです」

「でも……そんなの無理だよ。家族なんて簡単に壊れちゃう。誰だってみんな、夕陽を残してなくなっちゃうんだ。パパやママや、真陽みたいに……真陽なんか、生まれた時からずっと一緒だったのにつ、死ぬ時までずっと一緒だって言ってたくせにつ。約束破って、夕陽をひとりぼっちにしてるんだ。真陽と同じこの顔のせいで、何時だって怖い思いをしてるのにつ。何時だって酷い目に合ってるのにつ。知らない……こんなつ、こんな女みたいな顔なんていらなつ。もう、誰もそんな目でおれを見るな！ 目でおれをレイプするな！」

夕陽の口調が途中から徐々に現在のものに变化していく。吐き出される言葉の内容も、深刻に、そして苛烈になっていく。最後には泣き叫ぶようにして、喉を掻きむしろつとする。

「やはり、抑えきれないトラウマがありましたか。落ち着いてください、夕陽さん」

我を失った夕陽の耳には、もはや由布院楓の声も届く事なく、強

引に腕を振り払って、立ち上がりながら逃れようとする。

「放せ！　こんな顔の皮なんか剥ぎ取ってやるんだ！」

霊系から伝わる、夕陽の千々に乱れた感情の影響をもろに受けた操が悲鳴をあげ、片膝を付いた。

操の感情は荒れ狂う波に呑み込まれ、ズタズタに寸断される。傷だらけになって剥き出しにされた操の原初の感情を、さらに夕陽が感知すると、最初とは比べものにならない程の大きな情動となつて激しさを増していく。

それは、歪な感情のループ。ハウリング現象にも似た、無限の連鎖。

傀儡操者たる操の能力が完全に裏目に出てしまい、音叉の姫君たる夕陽の能力の暴走を加速させてしまっている。

つい先刻、由布院楓が示した杞憂もそのままに、今まさにそれが現実のものとなっていた。

「操、おまえの霊系、一時わたくしが預かります！」

「でっ、ですがお館さまっ」

「二度は言わないと、そう言ったはずです！　事は急を要するので

す！ おまえでは、負に陥ってしまった音叉の共鳴螺旋シンクロスバイラルから、夕陽さんを救い出せない！」

由布院楓は湯槽から飛沫しぶきをあげて立ち上がると、操には振り向きもせず、夕陽の手前にある、何もない空間に向かって腕を振るう。張り詰めた糸が切断されたかのような音が幾重にもかさなり辺りに響くと、琴の音色にも似た旋律が周囲一帯の空気を震わせた。

7―2傷（トラウマ）

夕陽の身体が糸の切れた操り人形のように、ガクリと崩れ落ちる光景を目の当たりにして、手毬と小毬のふたりが悲鳴をあげた。

操は地に未だ跪いた状態で、かろうじて意識は保ってはいるが、身動き取れない状態にある。

一見冷静な表情を装う由布院楓は、いつの間にか夕陽が絡むと、取り乱さずにはいらなくなっている自身の変化に気付いて、心の内で苦笑していた。

それでも、遅滞なきその動作は流麗さを微塵も失う事はなく、一瞬たりとも緩んだりはない。

空中に伸ばした両腕をあやとりでもしているかのように駆使すると、見えない糸を手繰り寄せ、凜とひと声叫ぶ。

「掌握――っ！！」

それは、由布院楓が傀儡操者たる操から霊糸の上位権限を奪った瞬間。

夕陽の身体が動画の一時停止状態のように、数瞬の間動きを止める。

次にその拘束が解けると、由布院楓を振り切って離れようとしていた夕陽の身体は、後頭部からゆっくりとスローモーションのように倒れ込んでいく。

——由布院楓の胸へと。

操の身体にかかっていた過負荷は、ブレーカーが弾け飛んだ時のように綺麗に消失していた。

ゆえに、彼女だけは知っている。

操と夕陽の間でループしていた負の共鳴螺旋を、自らの身体を絶縁体にして強制的に遮断した由布院楓に今この瞬間、いったいどれ程の負荷がかかっているのかを。

霊系からは容赦なく、月の魔力に悪酔いし、未だ酩酊状態にある、夕陽の不安定かつ暴走した精神世界の全てが流れ込んでいるはずだ。そうなれば、否が応にでも接触する事になる。

夕陽の心の奥底に^{おり}溜まる、コールドミたいにどろどろとした粘着的で、闇よりもさらに暗くどす黒い、心的外傷^{トラウマ}と。

あれと遭遇すれば、いかに由布院楓といえども心の平静を保つのは難しいに違いない。

そうなれば、束の間得られた今の均衡など、いとも簡単に破れてしまう。

「月がこれ程までに、夕陽さんの事を酔わせてしまうとは、何て目障りな。二度とこのような事がないよう、あの夜空から墮としてしましましょうか」

操の予想に反して、月を冷ややかに仰ぎ見る由布院楓の声は、何処までも涼やかだった。

刹那的、ほんの瞬間的には、操の予想は当たっていたともいえるが、彼女と由布院楓では魂の容量が較べるのも愚かしい程にかけ離

れている。

まさに、桁違い、桁外れと言っても間違いない程に。

その容量を生かす事により操はもちろん、久沓や四季のふたりでさえ及びもつかないレベルでの分割思考を展開できる彼女には、例えどのような状況下にあると、我を完全に見失ってしまう事などまずありえない。

冷静さを失った思考部分はローカルな領域に切って捨て、万が一の可能性すら残さず回避できるよう、複数の並列思考で眼前の問題に全力であたる。

由布院楓は確かに、夕陽の心のさらに奥底に潜む、澱んだ闇を見た。

だが魂の容量はもとより、操とは積み重ねてきた経験値が違う、研鑽されてきた業の精度が違う、そして何よりも夕陽への想いの強さが違っていた。

或いはそれは、主従と姉妹というそれぞれの立場と関係の違いがもたらす、決して超える事のできない壁なのかもしれないが。

「何で？ 何で真陽は平気なのに、おれだけ……こんな。みんなが、おれを見る視線の意味なんかは、気付きたくなかった！ ずっとそんな事に気付かなければよかった！ 真陽がいないと、おれひとりなんかじゃ耐えられない！ 耐え切れないんだ！」

未だ錯乱状態にある夕陽を受け止めると、きつく、それでいて包み込むようにして由布院楓は抱擁をする。

拘束から逃れようと、力なくもがく夕陽の身体はしかし、由布院楓に縋りつくように絡み、姉の肌のぬくもりをただ求めているよう

にしか見えない。

「戻りたいっ、何も知らなかった、あの頃に。パパとママ、真陽がずっと側にいてくれたあの頃に帰りたい！ もう、ひとりでいるのは嫌なんだ！」

「行かないで、夕陽さん！ あなたはもうひとりなんかじゃない！
トラウマに捕らわれてしまっただけです、帰ってきてください
！」

何かに憑かれたように叫び続ける夕陽に対して、由布院楓はほんの一瞬感情も露わに夕陽の名を呼ぶと、操から上位権限を奪った霊系を用いて、夕陽の深層心理に強制的な介入を開始する。

ひとりじゃない、ひとりなんかじゃない。
あなたはもう、ひとりじゃない。

側にいるよ、ずっと。あなたの側に、ずっといる。

何時だってあなたを守る、守ってあげる。

だからもう泣かないで、涙を流したりなんかしないで。

誰もがあなたに、欲望に塗れた視線を向けている訳じゃない。

あなたを見つめる優しい眼差しに気付いて、暖かな、愛情に満ちた視線に気付いて。

ずっと、あなたを見ている。あなただけを見つめている。
だから気付いて、あなたはもう、ひとりなんかじゃない……。

「つかまえた、夕陽さん。もう、離さない」

探索を終えた由布院楓が、ゆっくりと目蓋をあけていくと、両の頬を真っ赤に染めた夕陽の顔がすぐ間近にあった。

それは、おたがいの瞳の奥をそれぞれが覗ける程の近い距離。夕陽の瞳は落ち着きなく揺れてはいたが、光を取り戻している。由布院楓は、おとなしくなった妹の額に、自らの額をコツンと押し当てると、「もう……」と、安堵の吐息混じりに呟きを洩らす。

「姉さん、楓……姉さん。顔、顔が近すぎる……っ」

落ち着きを取り戻した夕陽のはにかんだその笑顔を見て、由布院楓はようやく肩から力を抜いた。

「ねえ。せっかく助けてくれたのに……こ、これじゃまたっ……気が遠くなってしまうそうなんだけど」

「記憶はきちんとあるようですねえ。よかったです、わたくしたちがくちづけを交わした事を忘れておしまいになっていらっしやったら、わたくししばらく立ち直れそうにありませんでした」

由布院楓のあからさまな言葉に、自らが置かれた状況に、夕陽はさらに羞恥の色を深めていく。

その何処か甘えているような、それでいて拗ねているような、無意識に媚びを含んだ夕陽の態度に、由布院楓は自らの嗜虐性が刺激されるのを感じ、ちよっとした悪戯心を発揮する。

「あ、あれはっ。あれはちよっと……強引すぎると……思っただけど」

「あら？ 強引なのはお嫌でしょうか」

「いつ、嫌なんかじゃ！ あ……いや、ホントは、そんなの嫌なんだけど、で、でもっ、楓姉さんに、なら……何されても、平気……かも」

「ふふっ」と満足そうに含み笑いをする由布院楓の顔を、抗議の意味を込めて夕陽は睨むが、その可愛らしくも拗ねた表情は、やはり何処か媚びを含んでいるようにしか見えない。

その仕草の可憐さは、由布院楓の心の琴線に生々しく触れると、彼女の胸を何度も高鳴らせ続ける。

「平気かも……ですか。それではその辺りの事を、今後ふたりでゆつくりと確かめていきましようか」

「たっ……確かめるって、そんな。どうやって？」

元はほんのり桜色の頬が、ほっそりとした首筋が、桜貝のような耳朶が、今や紅葉色に染まっている。

そんな夕陽の今にも消え入りそうな頼りなく弱々しい、庇護欲をそそられずにはいられないその風情に、由布院楓は妹の魅力にこれ以上抗い続ける事の無意味さを知った。

「決めました、わたくし。もう誰にも、何にも言わせません。夕陽さん、あなたと真陽さんのふたりを、わたくしの妹として由布院に迎え入れます。これは決定事項ですので、覆る事はありません」

由布院楓は夕陽の膝裏を左手ですくい上げて抱き上げると、湯槽を後にする。

「そ、そんなのズルい、楓姉さん。今のおれは、姉さん一色に染められてしまっているのに。断れるはずないの分かって言ってるよね」

由布院楓はその言葉に深い満足感を覚える。

霊系を通じて、ふたりの心は確かに重なり合い、ひとつになった。それぞれの、知識、思考、性格、価値観を共有し、足りない部分はそれを補うように、インストールされ、リライトされ、デバックされ、何度もロードを繰り返した。

その結果、由布院楓は夕陽の心に、夕陽は由布院楓の心に、相互に影響しあつて、別人とまではいかないが、新たなパーソナリティを獲得する結果となっていた。

言うまでもないがこのケースでは、夕陽の言葉を例に紐解くまでもなく、精神的に優位にあつた由布院楓の影響を夕陽の側が多に受ける結果となっている。

それは生まれながらの姉妹にも何ら劣る事のない、魂の共鳴。

由布院楓の、真陽に対する時間のハンデを一瞬にして詰めた、凝縮された時間の共有。

これから先も、夕陽をさらに自分の色に染めていけるであろう未来を思い描くと、由布院楓は抑える事のできない愉悦を覚えずにはられない。

「ね、さっきの言葉は本当？」

「何か、言いましたでしょうか？ わたくし」

「月を、墮としてみせるって言ってた」

「聞こえていたのですか……お恥ずかしい。わたくしも、よほど頭に血が上っていたようですね。ですが、月ですか？ そうですね、夕陽さん、あなたがそれを真実望むなら今すぐにでも墮としてみせましょうか。月の存在が、あなたの心持ちを不安にさせ、落着きを失くさせてしまうのなら。あのようなただの石の塊など消えて失くなってしまえばいいのです」

「本当に？ 月を墮とすなんて、そんな事できるの？」

「夕陽さんが、そう望むのであれば」

さも何でもない風に、由布院楓はさらりとそう繰り返す。

それを聞いた夕陽は照れくさそうに目を細めると、顔を伏せて潤んだ瞳を隠そうとする。

「姉さんなら本当にしそうだね。敵わないな、姉さんには。そんな事されたら地球に変地異が起きてしまうよ。月の引力が失くなれば、かなり大きな影響が出そう。姉さんにそんな悪魔じみた真似させられない。いいよ、本当の姉妹になっても。由布院の籍に入るのも真陽さえ許してくれるなら、おれは構わない。安曇野の姓を名乗

る事まで許してくれるなんて、姉さんの気持ちが嬉しくてもう何も言えないよ」

由布院楓は総桧造りの湯殿に場所を移すと、洗い場の鏡の前に置かれた小さな木製の椅子に、夕陽を抱きかかえたままで腰を降ろす。

バスチェア

操たち三人の側仕えたたちが、慌てて夕陽の世話をしようとしたが、由布院楓はそれを綺麗に無視すると、彼女を膝上に乗せたままその身体を洗い始める。

用意されていた、ボティソープやシャンプー、トリートメントにコンディショナーは、何故か夕陽が普段から使っている、元々は双子の姉である真陽が愛用していたブランド品で、彼女はそんな些細な部分の細やかな心遣いに、自分に対する由布院楓の想いを改めて思い知る。

とりとめもなく、そんな事を観察していた夕陽の余裕はしかし、すぐに消え失せてしまう。

「姉さ……っ？　ちよつと待つ……て、何か変っ、くすぐっ……っ」

夕陽は自分の肌が以前と比べ、あまりにも異質な物に変化しているという事実を、再び思い知らされていた。

退院の際の、着替えの時にも感じた事だが、あまりに敏感すぎるのだ。

まるで皮膚のすぐ真下に神経が通っているのかと思う程に、刺激

とは到底呼べないような微弱な感覚にさえ、背中が仰け反るような反応をしてしまう。

肌を撫でるソープの泡が、肌を伝う水滴の流れが。

由布院楓の手によって、夕陽は赤子のような仰向けの態勢で全身をくまなく綺麗に洗い流されると共に、その間もずっと絶え間なく与え続けられている刺激には到底逆らえず、いいように弄ばれてしまう。

「姉さんっ……姉さん、は、平気なの？ そう、いえば……胸の大きさも、全然違うし……っ。身長だって、違う……のは、どうしてっ？」

「ご心配なく。間もなく訪れるはずの初潮を無事迎えれば、夕陽さんの身体も成長期に入ります。すぐに、他の姉妹たちのようにになりますよ」

嬌声まじりの夕陽の声に耳を傾けながら、由布院楓は手を休める事なく、シャンプーのすすぎ洗いまでを終わらせる。

トリートメントを髪に馴染ませ、最後にコンディショナーで髪の調子を整えると、手櫛で夕陽のまだ短い髪をまとめて後ろに流す。

蒼く、白い月明かりが、濡れた髪の水滴に乱反射して、キラキラときらめいている。

月の化身にしか見えない白の妖精が、最後にほっとひと息吐いたその様子が、この上もなく色めいていてひどく艶めかしい。

そんな夕陽の悩ましげな表情を数瞬の間、じっと見つめていた由布院楓が、やがてぽつりと呟いた。

「決めました」

「え……ま、また？ 何を、決めたの」

夕陽は未だ息も絶え絶えの様子だったが、由布院楓の膝上に抱かれた状態のまま、うつすらと開いた瞳でぼんやりと姉を見上げていた。

由布院楓はそんな夕陽の膝裏を左手ですくい上げると、彼女を再び胸元に抱き上げながら立ち上がる。

「今宵は夕陽さんの一族への御披露目を取り止めにします。西の院にわたくしも泊まり込む事にしますので、食事をふたり分用意下さい。夕陽さんの分は胃に負担のかからぬよう、軽めのもので」

「お、お館さま！？ そんなつ、選挙を控えていらつしやる身で、無理を押して急遽集まってくださった議員の先生方も少なからずいらつしやいますのに」

慌てたのは三人の側仕え達だった。

三人、もつれ合うようにして由布院楓の背中の後を追ひ、先の言葉の撤回を求めて口々に言い募る。

宴を今さら取り止めるとなれば、様々な障害が起きるであろう事は、想像するに難くない。

何より正殿にはもう一族の大半が揃っている頃合いで、皆が夕陽の尊顔を拝するのを今や遅しと待ちかまえている状態なのだ。

「勝手に押しかけて来られて、ただ迷惑なだけです。保身と点数稼ぎが仕事の者達に、こちら側が付き合う義理などありません」

「ですが、奥の院さまもおっしゃるか。お考え直してくださいませ」

冷やかな由布院楓の態度に怯みそうになりながらも、操たち三人はさらに追い縋る。

「月齢が満ちるまでには、後数日あります。女郎花もそれまでは、おとなしくしているでしょう。ですからしばらくは、わたくしが太陽さんを独り占めに……いいえ、女性としての日常生活に不自由しない程度には面倒を見てさしあげなければ」

「無理をおっしゃらないでください、お館さま」

最後までしつこく迫る手毬を完全に無視をすると、由布院楓は不意に夕陽に向かって問いかける。

「学校、早く行きたいですよねえ？　夕陽さん」

微笑みかける由布院楓に向かって、夕陽がこくと頷いて見せた瞬間、その場の形勢は決した。

操を始めとする側仕えたちに、夕陽の意向に逆らう選択肢などあり得るはずもない。

始めから無駄な抵抗だった事を思い知らされた彼女たちは、がっくりと一様に肩を落としたのだった。

「埒^{うち}もない……」

嫣然とした微笑を口唇に浮かべ、由布院楓は満足げにそう呟いた。

7―2 傷（トラウマ）（後書き）

いつもMTFのご愛読ありがとうございます。ひさしぶりに次回の予告です。

今回の、「幕間3 夕陽と女郎花」を以て、現在の由布院楓編は一応の区切りを迎えます。

今後は、いよいよ学園編へと突入していく予定です。

残る始祖の十人たちに、ようやく名前を名乗らせてやれそうです。ながらくお待たせしてしまって、たいへん申し訳ありませんでした。

幕間3 夕陽と女郎花

月齡満ちる夜の静寂しじまに、少女のすすり泣く声が微かに響いている。息を押し殺した嗚咽が、酷くもの哀しく、切なく、繰り返し繰り返し、いつまでも続いて止むことがない。

由布院邸西の院は、北西の側に日本有数の霊脈から湧く名も知れぬ湖のそを臨み、東に正殿が隣接している。

正殿寄り東側の一辺に沿って走る縁側の、その南へ向かう突き当たりの扉の前で、板張りの床上に広がる染みを前にして、華奢な少女の影が肩を小刻みに震わせ佇んでいる。

少女の影はむせび泣きながら、両の膝で跪くと、手にした雑巾で床上に広がる染みを拭おうとした、その瞬間。

「待て、夕陽」

短くも強制力のある言葉を、背後から不意にかけられ、少女の影――夕陽の両肩がビクンと跳ね上がる。

老女のような、幼女のような、不可思議な響きを持つ威厳あるその声に、夕陽は聞き覚えがあった。

恐る恐る夕陽が振り返ると、月明かりを浴びて、羽織袴姿の巫女装束にも似た衣装を身に纏った、五、六才程の幼女がひっそりと佇んでいる。

幼女は巫女装束に何処か似た装いをしながらも、西洋人形ビスクドールのように整った非常に美しい容貌を持ち、落ち着き払ったその態度は、とても大人びていて凜としている。

切れ長の紅い瞳はまるで猫のように、やや眦^{まなじり}が上がっていて、見る者に気の強そうな印象を与えている。

その反面、小さくつんとした鼻は愛らしく、紅のさされている形の整った薄い口唇は柔らかな微笑を湛え、全体の雰囲気^{たいふ}を柔らかなものにしていた。

髪は瞳と共に夕陽と同じ色を持つ。

シルクのなめらかさを具現化しているストレートの白いその髪は、床にまで届く程にとても長く、緋袴から覗く白い足袋^{たび}を中心にして床の上で放射状に広がっている。

それは一見、衣擦れひとつ、物音ひとつ立てずに移動する事など到底不可能に思えるが、幼女^{おんな}の存在は確かにそこにある。

その姿は、幻想的かつ現実離れしていて、この世の者ならざる雰囲気^{たいふ}を醸し出していた。

「奥の院さま……？」

「ほう、何故分かる？」

「あ……声に聞き覚えがある気がしたんです。でも、そんなはずないのに」

誰にも見られたくないはずの現場を押さえられたにも関わらず、目を潤ませながらも落ち着いた様子で、夕陽はこくと小首を右に傾ける。

それを見た幼女は猫のように目を細めると、満足げに頷く。

「いや、確かにわらわは奥の院と呼ばれてはおるが、楓の妹であるおまえはわらわの妹でもある。女郎花でよい」

「おみなえ……し、さま？」

「身内相手に敬称はいらぬ、呼び捨てで構わぬ。名は女郎花じやうらうばなと書いて、おみなえしと読む。妾腹ひめはらの子には相應しい名である？」

「しょうばらつて？」

「ふむ、まだ楓の知識を自由には引き出せぬか、まあ致し方ない。緊急とはいえ性急にすぎたからの。馴染むまでには時間がかかるである。しかし、楓の人格を上書きされたにも関わらず愛ういまままでよい。しょうばらが分からぬか？ 妾腹……めかけはらつまり、愛人が産んだ子という事じゃな」

「あ、ご……ごめんなさい」

思いもかけぬ内容に胸を衝かれ、夕陽はぼろりと零れ落ちる涙も構わず頭を下げる。

夕陽は相変わらず感受性豊かで、精神的に不安定で、彼女はそれを未だコントロールしきれていない。

初潮が始まり、生理を一定の周期で迎えるようになれば、女性ホルモンの供給も増え、ホルモンバランスも安定する。

そうなれば、夕陽の気持ちもやがては落ち着いていくのだが、その時期はまだまだ先のようだった。

幼女は全てを見透かしているかのような瞳で、夕陽の姿を愛おしげに見つめながら、より一層猫のように目を細めていく。

「気にせずともよい。余計な事を口にしたようで、悪かった。それにわらは公式には発表されてはおらぬが、メタモルフォーゼ初の罹患者でな。見た目程は幼くはない。出自に関しては、とうに割り切っている。しかもこれは元からの名ではなく、父上に対して半ば嫌がらせのように自ら名乗り始めた字名あざなであるからな」

「ごめんなさい。それでもやっぱり、おれ……不注意でした」

萎れたままの夕陽に対して、女郎花の声音は何処までも優しく、慈愛の響きに満ちている。

「泣かずともよい。この花の名は、結構気に入っておってな。美女をも圧倒する美しさという意味もあるのじゃ、似合いである？」

「あ……綺麗です。とっても！」

ふたりとも人として規格外の美しさを有している為、このやりとりは一步間違えれば、嫌味の応酬ともなりかねない危うさを孕んでいたが、このふたりの場合はこれが初対面とは思えぬ程に距離感が

近く、そのように険悪な雰囲気陥る気配は微塵もなかった。

自らの容姿をことさら誇る様子でもなく、あたりまえの事をあたりまえと、さらりと述べた女郎花と、おもねる様子を一切見せずに素直に頷いた夕陽。

それは実に自然な流れで、微笑ましくすらある。

病院帰りの車中での記憶を失っている夕陽にとっては、目の前の幼女の柔らかな佇まいと、ここ数日で何度となく垣間見た、手毬や小毬を始めとする使用人たちが、女郎花の名前にすら過剰に反応して、その存在に恐れ慄^{おの}いている事実がうまく重ならない。

「それで、このような夜更けに、このような場所で何をしている？」

誰もが当然思うその疑問に、夕陽は答えを返す事をためらい、しばらく逡巡した。

女郎花は答えをせかすでもなく、夕陽が口を開くのを静かな面もちで待っている。

「ごめんなさい……おれ、トイレ間に合わなくて。たいした距離じゃないから、大丈夫だと思ってただけ……楓姉さんが仕事で初めて留守にした夜に……こんな」

夕陽は普段は淡い桜色の頬を、今は紅葉色に染めて、途切れ途切

れに答え始める。

彼女は常ならば、今夜はどうしても外せぬ日時指定の仕事の為不在にしている由布院楓によって、真夜中に最低でも一度は起こされ、まだ慣れぬ排泄の世話をしてもらっていたのだという。

もちろん彼女はそれを無抵抗に受け入れた訳ではない。

なし崩し的に姉とふたりで一緒に入浴する事を許容はしたが、例えそれが姉であろうと、今は退院したにも関わらず、排泄時に自分以外の誰かの手を煩わせるなど彼女にしてみれば到底ありえない事だった。

それでも、たかが排泄と思っただけでも実際に経験をしてみれば、それがいかに甘い考えであるかを彼女は後に嫌という程思い知る。

男である時とはあまりに勝手が違い過ぎて、戸惑う事の連続に思い悩んだ夕陽は、結局姉の由布院楓に押し切られてしまったのだ。

それ以降、夕陽は羞恥責めの連続に遭う事となり、深夜布団の中でのおうち回りとなるような思いに連日悩まされ、ついには不眠症気味となる。

ビデの使い方から始まって、衛生上による観点から小と大では後始末の際に、ティッシュで女性器を拭く向きを前後変えなければならない必要がある事、さらには生理用品の扱い方等々。

つい先日までは少年だった夕陽にとって、正にカルチャーショックにも等しい経験を次々に重ねていく。

女性としての言葉遣いに立ち居振る舞い、メイクやファッションの知識、それら日常生活以前の基礎的な段階でこう何度も躓くのは、夕陽にとって全くの予想外ではあった。

だが、それにもまして深刻な問題は夜中にトイレが近くなる事で、そればかりは直ぐに改善のしようもなく、彼女は由布院楓に夜毎定刻に起こしてもらおうという、幼児のような扱いを甘んじて受ける事となる。

今夜、妹をひとり寝させてしまう事を由布院楓は非常に気に病んで、仕事の断りを何度も相手先に入れようとしたが、夕陽は操たち

がいるから大丈夫だと、姉に要らぬ心配をかけぬよう笑顔で送り出したのだ。

「それなのに、おれ……こんなんじゃ、姉さんに、顔合わせられない」

「恥じる事はない。男と女では筋肉の使い方が違うからの、一から身体で覚え直さなければならぬ。姉妹の誰しもが通った道じゃ。いずれは治る」

「ほんとに……？」

「ああ、まことじゃ。さ、そのような汚れ仕事を夕陽がする事はない。ああ、そんな濡れたままのものを何時まで身に付けているつもりじゃ、肌にはりついて気持ちが悪いである？ さあ、早々に立ち上がるがよい。すぐに着替えを用意させる」

夕陽の白いワンピースタイプの寝間着は、女郎花の指摘どおりに膝上のスカート部分が濡れて、夕陽の太腿に薄い生地張り付いて素肌が透けている。

「で、でもっ……おれの不始末だから」

「いや、夕陽のせいではない。悪いのはわらわであるかも知れぬ。

今この一帯には人払いの結界が張つてある。そうでもなくば、あの三人の側仕えたちがみすみすこの事態を黙つて見逃すはずがないである。あれでなかなか、おまえに対する忠誠心には見るべきものがあるからな。この不始末、原因を作つたわらわが落とし前をつける」

女郎花は猫のように細めていた瞳を見開くと、それまでとは打つて変わった厳しくも冷たい声音で、夕陽にも馴染みのある名を呼んだ。

「四季、聞こえているなら返事をしろ。わらわのこの閉鎖空間あかすのまに立ち入る事を許す。適当なのを寄越すがよい」

女郎花の言葉に夕陽の内にある由布院楓の知識が反応したのか、彼女は今自分がいる場所が月の光も届かぬ異空間である事に、その時ようやく気が付き、認識をした。

「確かに承りました。ひとつよろしいですか夕陽さま、西の院の主であるあなたさまが、不浄の後始末にそのお手を汚されるような事などあつてはなりません。さ、全てこちらにお任せください。繭まゆ、
蛹よう、後は頼んだよ」

姿を見せぬ四季の 声 が命じると、女郎花よりもさらに小柄な影、禿姿かむろの女兒がふたり、歓声を上げながら何処からか不意に現れた。

ふたりは夕陽と女郎花の間の空間を、大はしゃぎながら駆け回る。

「だつ、だめです。こんなちっちゃな女の子にそんな事させられない」

「夕陽さま……どうかお氣遣いなく。この子たちは九十九神の眷属で、何より不浄のものを嫌うんです。この程度の穢れを払う事なんざ、一瞬で済ませちゃいます。さ、おまえたち、終わったらすぐにその場を失礼するんだよ」

四季の 声 が夕陽にそう答えた時には既に、繭と蛹のふたりの姿はその場から消え失せ、床も綺麗に磨き抜かれていた。

彼女が指先で触れてみると、そこは確かにきちんと乾いてる。

「嘘……いつの間に」

「何も驚く事はない、由布院とは古来より陰陽道を生業なりわいとする由緒ある家系。詳しく知りたくば、おまえの内なる楓の知識をよつく漁ってみるがよい」

あまりの早業^{はやわざ}に、雑巾を両手に握りしめたまま呆氣にとられた夕陽に向かい、女郎花は事も無げに言う。

「もつと知識に貪欲になれ、夕陽。求めよ、さすれば必ず答えは得られる。今、おまえが抱いてる疑問に対する全ての答えは、既におまえの内にある。それらはいずれ、おまえ自身の身を助ける糧にもなるである」

「おれの中に、全部？」

「次に月齢が満ちる時、また逢おう。おまえの成長を楽しみにしているぞ」

気付けば、夕陽はその場にひとり取り残されていた。

操たち、三人の側仕えたたちが着替えを手に、姿の消えた主の姿を求めて、半ば錯乱した様子で夕陽の許に息を切らせて現れたのは、それから幾らも時が経たないうちの事だった。

タロット占いには、それぞれの目的に応じて、基本的な展開法^{スプレッド}だけでも、スリー・カード・リーディングや、フォー・カード・リーディングがある。

最もシンプルな展開法^{スプレッド}には、ワン・オラクルと呼ばれるものがあり、これは比較的短期の運勢や相性、結果等を求めるのに適している。

皎々（こうこう）とした月明かりが降り注いで地表を遍く照らす、満月の夜。^{あまね}

ここ、華月宮学園女子寮三階東側の角部屋であるその一室も、決して例外ではない。

窓から射し込む月明かりだけを頼りにして、女子高生らしいシンプルなネグリジェ姿のひとりの少女が、窓際に設置された勉強机の上で、大アルカナと呼ばれるタロット占いの基本を構成する、二十枚のカードを繰っていた。

「太陽（THE SUN）の正位置。恋の暗示は、楽しい恋愛。相思相愛。オープンな関係。スムーズに進展する。そして、新しく始まる恋……か」

少女はシャッフルを終えた中から一枚のカードを引くと、慎重に自身の未来をそのカードからリードする。

これはワン・オラクルの展開法で、一枚のカードから全ての情報を読み解かなければならない為、不確定要素が紛れる事も多いのだが、少女はこのスプレッドを好んで使っていた。

確実に訪れると分かっている未来程、つまらないものはないというのが少女の信条だったからだ。

だから、スリー・カード・リーディングやフォー・カード・リーディングではなく、あえてワン・オラクルを選ぶ。

リードを終えた少女は、淡い期待に胸を膨らませ、少し先の未来へと思いを馳せる。

「今の時期だと、新任教師の線はないわね。定員は足りてるし。転校生できつと間違いないわ。名前はまだ知らないけれど、早くいらつしゃい、わたしのジェミニ——魂の相似形」

8―1 華月宮の杜

私立華月宮学園は、始祖の十人主宰のProject?Kが所有する都内一等地にある。

広大な面積を誇るその敷地は、近代建築群の一角に、そこだけケ―キナイフで切り分けられたかのように存在する。

何処か神宮外苑にも似た緑深き洋風庭園内に、系列の幼稚舎から最高学府までのひと通りが揃えられ、周囲の環境も含めて理想的な一貫教育の場を形成しているのだ。

敷地内への主な進入経路は五つ。

幼稚舎、小学部、中学部、高等部、大学・大学院。

それぞれの進入口は、それぞれの学舎を抱くエリア毎に別れている。

むろん、いったん敷地内に入っただけさえしまえば、各エリア間を自由に行き来できるのは言うまでもない。

五つある進入経路のひとつ、私立華月宮学園高等部のエリア。

その正門を、一台の黒塗りのリムジンが、低速ながらも滑るようになめらかな駆動で潜り抜けていく。

登校のピークを迎えるこの時間帯。

送迎の車が高等部正門外から学舎正面玄関口まで連なって渋滞化しているその光景自体は、毎朝恒例と化している為ここではさしてめずらしいものではない。

それがどれだけの高級車であろうと、徒歩通学の生徒たちの視線を奪うような事は通常ならありえない。

だが、そんなもの慣れた様子の生徒たちでさえも、由布院家所有のリムジンのテールは、驚愕の眼差しをもって見送らざるを得なかった。

全長八メートルを優に超す、オーダーメイドによる黒塗りのその

車体は、高級車の展示会さながらの様相を呈しているこの場においてさえ、尚異質であり、異形であり、破格であると言えた。

「姉さん。ねえ、何かみんなこっち見てるんだけど？ やっぱこの車って、相当目立つんじゃない……他の車じゃだめだったの？」

「目立つくらいでいいですよ、夕陽さん。あなたが由布院家縁の者だと知れば、誰もあなたにうかつな真似をする事など、そう簡単にはできなくなるでしょうから」

朝の通学ラッシュに巻き込まれたリムジン車内は、低速走行中とはいえとても静かで、微かに流れているクラシック音楽以外、エンジン音はもちろん、あらゆるノイズから遮断されている。

通常であれば電動式パーティションにより、客室のプライベート空間は完全に保たれ、運転手や外部からの視線に晒される事は一切ないのだが、今朝は初登校を心待ちにしていた夕陽の希望により、全てのパーティションは開放された状態にある。

それでも、各ウィンドウにはめ込まれた紫外線対策目的のスクガラスが、朝の日差しを40%以下のレベルにまで遮光している為、車内には間接照明が点けられている。

仄明るく照らし出されるインテリア類は、白を基調にメイプルウッドがあしらわれ、瀟洒で上品な、落ち着いた雰囲気醸し出す。

進行方向に対して、車体の右側面にはドリンクバー専用のカウナーが設置され、白の本革シートが運転席真後ろの位置と、車体左側面から最後尾にかけてL字型に配置されている。

最後尾のシートには、夕陽が由布院楓の左隣に並んで腰を降ろし、

姉の肘の部分に両腕を絡めて、何処か気後れした様子で身体を隙間なく密着させていた。

「うかつな真似って？」

「夕陽さまがそのような事を、知る必要はございません。わたしたちがお側にいる以上、何も心配なさる事などないのです」

左側面のシートに座る、自らの主と同じ制服に身を包んだ操がこともなげにそう言つと、夕陽は戸惑いの表情を見せながら溜息混じりに呟きを洩らす。

「でもおれ……せつかく地味な感じにしてるのに」

夕陽のその言葉には由布院楓を始め、車内にいる誰もが苦笑せざるを得なかった。

特にこの場に、西の院の留守を守る手毬と小毬のふたりが居たなら、大きく肩を落として嘆息していたに違いない。

何故なら、初登校をする今日という日に向けて、彼女たち姉妹が夕陽の髪型を始め、身のまわりの支度の全てを整えてきたからだ。彼女たちにとって不幸だったのは、夕陽の趣味・嗜好が想像以上に徹底していて、しかもかなり偏っている事だった。

地味で目立たない事をことさら好み、自身が目立つ要素は極力排除していく。

彼女の白く艶めいたシルクの髪は染料が全く乗らず、何度染め直してもムラになってしまふ為に仕方なくウィッグにすれば、彼女が選んだのはごく普通の黒のナチュラルショートで、レイヤーやシャギーが多く入ったものや、ふわゆる系のガーリーなテイストのものには見向きもしない。

紫外線対策のカラーコンタクトも明るい茶系は端から避け、髪の色と同様の無難な黒を選び、さらには制服のメインカラーである臙脂色に、フレームの色を合わせた伊達メガネまでかける始末だった。制服はそんな保守的な傾向が最も顕著に現れ、彼女の妖精のようなスタイルを引き立てる為、身体の実寸に合わせて仕立て直そうとしても断固拒否され、結局はノーマル仕様のまま手付かずで今日を迎えてしまふ。

夕陽が唯一こだわりを見せたのは下着（インナー）の肌触りで、素材と縫製に凝ったもの以外は一切受け付ける事をしなかった。

おかげで、華月宮学園の校則に抵触する怖れは生徒手帳を確認するまでもなく一切なかったが、その枠内で出来る限り夕陽の美しさが引き立つようにと、張り切っていた姉妹ふたりをいたく落胆させる結果となった。

だが――それでも。夕陽は美しくあり続けた。

全体的にいくら地味な印象にまとめようとしても、そのつづらな瞳が、すっきりと通った鼻梁が、果実のように瑞々しい口唇が、透き通るような白い肌が、控えめながらも確かな存在感を放っている事を隠しきれない。

芸能人が普段着で街に出てもすぐに気付かれるのと同様で、どのような姿形であっても夕陽は夕陽であり続け、望むと望まざるに関

わらず人の群れに埋没する事など、まるで天に許されていないかのようだった。

それこそがまさに、姫の遺伝子に選ばれし者全てが持つ、逃れ得ない運命の楔くわのだと、由布院楓は何処か影のある表情で、ある時夕陽に教えてくれた。

「これじゃ、目立つちゃう。おれは普通でいたいのに」

新緑の季節に相応しい若葉色を基調にした、由布院楓が着こなす加賀友禅。

夕陽はその肩口に顔を深く埋めて、あきらめ気味に嘆いて見せる。そんな風に、倦怠感漂わせていた夕陽だったが、ふと何かを思い付いたかのように顔を上げると、にっこりと天使のごとく微笑んだ。

「あ、でも。操と朧が一緒にいてくれるからそうでもないかな？ふたりともすごく綺麗だし。おれの事なんか誰も気にしないよね」

「ゆ、夕陽さまっ」

夕陽のそんな言葉に反応し、褒められて歡ぶ小犬のように、思わず弾んだ声を上げた操だったが、彼女と同じ左側面のシートに座って、やはり夕陽と同じ臙脂色の制服姿でいる朧が、ほとんど瞬殺と

言えるタイミングではっさりと斬って捨てた。

「操、顔が緩んでいるぞ。我が君のご冗談だ、真に受けるな」

「うるっさい、分かってるっ」

臈は、操から進行方向側に離れて座っていて、彼女たちの間には人が三人分程のスペースが不自然にも空けられているのだが、それを詰めようとする意思はふたりには一切見られない。

「そんなっ、冗談なんかじゃないよ」

「おそれながら、我が君。わたし共などあなた様方姉妹とは較べるべくもない存在。そのような軽々しいお言葉は自らの価値を下げるだけにしかありません。今後はお慎みください」

「ええー？ 姉さんは確かにすごく綺麗だけどさ、おんなじ顔していても、おれなんか全然女らしくないし、それこそ較べるのは失礼だよ」

真顔でそう言う夕陽に向かって、後部

客室側最後のひとりが、それまでの沈黙を破り言葉を投げかける。

「いや、そんな事はないぜ、姫さん。お館さまにも負けねえくらいあんたは綺麗だよ、間違いなくな」

「もっ、もう、嘘ばかり。いきなり割り込んできて何言ってるかな、暁は」

運転席とは背中合わせのシートに深く座る暁は、臙脂色のマオカラスーツの制服に身を包んでいる。

デンマーク王室御用達ロイヤルダンスクのバタークッキーを頬張りながら向けられている暁の視線に、夕陽は何故か落ち着かない気持ちになってしまう。

口唇から吐いて出るしどろもどろで頼りなげな口調が、さらに羞^{はじ}らいを加速させていく。

暁はそんな夕陽の不審な態度を一切気に留める様子もなく、クッキーを食べ続けている。

夕陽と同じ年頃の成長した姿でいる事を臙に命じられて以来、彼の食欲には目を見張るものがあつた。

実体化を維持し続けるには霊力の消費が相当激しく、彼は召還者である臙にかかる負担を少しでも減らすようにする為に、エネルギー源を他に求めざるを得なかったのだ。

「暁は式神ですので、主に嘘を吐いたりしません」

涼しげな表情でありながらも、きっぱりと断定する朧の言葉にいたたまれなくなった夕陽は、必死に話題を逸らす事を試みる。

「そつ、そんな事よりさ、みんな口調は仕方ないとして、普通に夕陽って呼んでくれない？ おれは楓姉さんの妹っただけで、主でも、姫でも、何でもないし。ただの普通の人間だよ」

「音叉の姫さんが何か言ってるぜ」

暁がクッションの効いたシートの背もたれに深く身を沈め、少々呆れ気味にそう言うと、朧が彼にきつい視線を向けてくる。

見れば夕陽があからさまにしゅんとした態度で、由布院楓の腕の中で萎れていた。

彼女の精神は脆弱で、目覚めてからひと月近くが経った今でも、未だ不安定で打たれ弱く、ほんの些細な事がきっかけで、容易く感情の起伏が繰り返されてしまうのだ。

暁は両肩をすくめて朧に反省の意を表すと、次のバタークッキーを口の中に放り込んだ。

彼の場合、その何処か斜に構えた口調が原因で、内容の一切に関わらず、時に言葉が意図せず皮肉めいた響きになってしまう事が過去にも少なからずあった。

むろん、彼に悪気がないのは言うまでもない。

「音叉の力は味方につければ絶対不敗。何ものにも代え難い、唯一無二のお力です」

操が場を取り繕うかのように言葉を繋ぐと、朧も頷きながら後を継ぐ。

「そのように貴き存在である我が君が、自らを普通の人間などという軽々しいお言葉を使うのはお止めくださいと、何時も申し上げていますのに。暁があなた様の自覚のなさ呆れてしまうのも必定かと」

「ごめん、やっぱり自覚が足りないのかな……おれ」

「自らの価値を下げるような真似は、お慎みくださいと申し上げているだけです」

「だっておれ、音叉の力ってよく分からないし。操や朧、暁の三人が護衛についてくれる程の価値が自分にあるなんて、とても思えない」

「姫さん、人の価値ってのは自分自身には決めらんねえんだぜ。いくら偉そうにふんぞり返っていても、誰にも価値を認められないよ。うな奴は、ちょっとした事がきっかけで最後は必ず落ちていくもんだし、本人にその気がなくてもいつの間にか周囲に認められ、祀り上げられてしまったり、人にはそれぞれに相応しい立ち位置っての

があるのさ」

暁が今度は言葉の響きに気を付けて、やんわりと諭すようにして言う、臃がふたりの気持ちを補足する。

「我が君、あなた様はわたし共が認めた主です。決してお館さまに拾って頂いた一宿一飯の恩義の気持ちだけで、あなた様の許に付いた訳ではありません」

「そう言ってくれるのはもちろん嬉しいんだけど、本当におれなんかそんな資格があるのかな」

「操人はともかく、四季が黙ってあなたに従っている時点で十分にすごい事です、夕陽さん。あれは氣に入らなければ女郎花の命令でさえ、平然と無視したりしますからねえ」

自信なさげな様子で、すっかりしよげ返っている夕陽を見かねたのか、由布院楓がおっとりした口調でそう言うと、夕陽は目を丸くして姉の顔を見上げた。

「え、四季さんってそんな人なの？　すごく優しいよ？」

「夕陽さまの前だと猫被ってるんです、頭は。怒るとものすごく怖いんですよ」

夕陽の四季に対する印象がよいものであるのが面白くなかったのか、操が眉間に皺を寄せながら吐き捨てるように言うと、暁と朧のふたりもそれぞれの表情に複雑な色を浮かべる。

「ああ……確かにおつかねえ女だな。ああいうのは敵に廻すと厄介だぜ」

「ええ、何考えてるか分からないような処があるからなおさらね」

会話がそんな風にひと段落つきそうなちょうどよい頃合いを、まるで見計らっていたかのような絶妙のタイミングで、久沓の控えめではあるがよく通る声バリトンが運転席からする。

「もう、間もなくです」

後部客室側キャビンに揃う全員の視線が一斉にフロントガラスに向けられると、鹿鳴館風の瀟洒な学舎の正面玄関前に、男女数名の生徒たち

が綺麗に整列をしているのが見える。

どうやら彼らは、車から降りた生徒たちの生活指導をしているらしく、手渡された鞆の中身や服装を逐一丁寧に改めるのが毎朝の務めらしい。

それは他の学校でも見られる、ごくありふれた何気ない光景だったのだが。トクン——と、夕陽の胸の鼓動が乱れ、彼女の心の何処か奥底で、小さな細波はつなみが立っていた。

8―2 華月宮の杜

華月宮学園正門から正面玄関を連絡する舗装路の両側には、丁寧
に手入れされた銀杏並木が連なっていた。

新芽が成長し、今は緑に色づいているその光景は、秋には見事な
黄葉を見せ、冬には落葉し、生徒たちに季節の移ろいを教えてくれ
る。

由布院家所有のリムジンはそんな銀杏並木の下を、ゆつくりと徐
行していた。

正面玄関前を起点とする渋滞に今は巻き込まれている為、石畳の
歩道の上を行く徒歩通学の生徒たちに次々追い抜かれていく。

その際、彼、または彼女たちは、威容を誇る黒塗りの車体に例外
なくちらちらと視線を投げかけてくるのが、車内からでもよく分か
る。

「もう、間もなくです」

久沓がそう告げてからしばらくして、ようやくリムジンが学舎の
正面玄関前のロータリーに進入すると、整列している生徒たちの前
で滑らかに停止する。

エンジンをアイドリング状態にしたままで運転席から降りた久沓
が、後部左側面にあるスライドドアを開けると、暁を筆頭に朧と操
のふたりが後に続いて車外へ降りていく。

「姉さん、じゃあ、いつてくる」

「はい、しつかりね。夕陽さん」

この頃になると由布院楓は、ふたりきりでいる時などは特にだが、夕陽に対してかなりくだけた口調になる場面もしばしば見られるようになっていた。

「うん、じゃあね」

夕陽はそんな由布院楓の言葉に嬉しそうに微笑んで、胸の前で小さく手を振る姉にひとつ頷き返すと、やや緊張気味の表情を浮かべながらもスクールバッグを抱えて車内を後にする。

「夕陽さま、お手をどうぞ」

「あつ、ありがとう。久沓」

久沓の男性にしては繊細な手を取り車外へ出ると、操たちの服装チェックが既開始されていた。

暁には男子生徒が、操と朧には女子生徒がそれぞれ二名ずつで対応している。

「おはようございます、あなたも初めて見る顔ですね。わたしは華月宮学園生徒会執行部副会長、妹尾静香^{せのおしずか}。風紀委員による朝の生活指導にご協力願います。では、あなたが所属するクラスと名前をどうぞ」

全校生徒のプロフィールが入力されたタブレットを手にする女子生徒の風紀委員を後ろに従え、リーダー格と見られる女子生徒が腕を胸の下で組みながら、夕陽の前に一歩進み出た。

彼女は理知的な容姿をしていて、肩口に触れるか触れない程度の、緩くウェーブのかけられたミディアムボブがとてもよく似合う。

学園よりもスーツ姿でオフィス街にいる方が似合いそうな、デキる女の雰囲気を漂わせ、場の雰囲気を締めている。

夕陽はそんな彼女の佇まいと、軽く詰問めいた口調にすっかり舞い上がってしまう。

さらにその時、久沓が再び乗り込んだ由布院家所有のリムジンが、滑るように発進して正面玄関前から離れ始めると、夕陽の心の内に立った細波^{はつなみ}が小さくうねり始める。

頼れる姉である由布院楓が遠去かっていく気配が、夕陽の心の緊張と不安を知らず知らずのうちに増幅させていく。

「あ……えと、わっ、わた……し」

「所属のクラスと名前を」

「1年A組……安曇野……安曇野夕陽です」

「1年A組の安曇野さん？ ああ、あなたが過去最高得点で編入試験をパスしたという生徒ね？ お目にかかれて光栄だわ」

それは中学三年間で、真ん中辺りの最も人数が多いグループに埋もれていた夕陽にしてみれば、にわかには信じ難い内容だった。

思わず耳を疑うような言葉を告げられてしまい、彼女は控えめな態度でおずおずと聞き返す。

「えっ？ 編入試験……最高得点、だったんですか？」

「そう聞いてるけれど？ 職員室で先生方がめずらしく興奮気味に話をされている場にたまたま居合わせてね。わたし耳はスゴクいいの、“地獄耳”と言ってもいい位に」

だが夕陽には相手の言葉を聞いている余裕は全くなく、茫然自失の状態で、口に手をあて呟くように自問自答を繰り返している。

「何でっ……そんなの困る。やけにスラスラ解けるから、出来はいいと思つてたけど……これも姉さんがくれた知識のおかげかな？
使いたい時には全然使えないくせに、こんな時ばかり……もうっ」

目立つ事を好まない夕陽にすれば、例えどのような形であれ、人より秀でる部分は極力排していきたいと考えただけに、忸怩たる思いに苛まれ続ける。

試験の結果を意識的に操作する程の余裕は編入試験の時にはなかったので、何を言つても完全な結果論なのだが、夕陽は自分を責めずにはられない。

「安曇野さん、どうかして？ 安曇野さんっ？」

「あ、いつ、いえ。何でも」

妹尾静香がわずかに背を屈め、覗き込むようにして夕陽の瞳を捉える。

瞳を間近に見られた夕陽は、カラーコンタクトがバレないか不安になり、胸の鼓動が早鐘を打つ。

「そう？ あなた、病弱で療養生活が長くていらしたんでしょう？
無理はしないでね。では安曇野さん、鞆を」

「はっ、はい。よろしくお願いします」

夕陽は反射的に小さく頭を下げると、女子生徒の風紀委員にスクールバッグを預ける。

緊張からぎこちない仕草になっている夕陽の様子が微笑ましく映ったのか、妹尾静香の口許がわずかに緩む。

その空隙を狙ったかのように、背が高く均整のとれた体格の男子生徒が、ふたりの間に割り込んできた。

「ちょっと待ってください、副会長」

「儀同？ いきなり何です？ 時間が押していますから、後にしなさい」

「申し訳ありません。後でどのような処分でも受けます。ここは好きにさせてください」

「何を勝手な事を……」

訝しげな態度を崩さない妹尾静香に背中を向けて振り切ると、儀同と呼ばれた男子生徒は夕陽に対して真正面から向き合った。

バスケの選手並みの身長が与える威圧感に、夕陽は思わず一步後退りする。

「おまえの名前、安曇野だつて？ 安曇野夕陽？ だったら、安曇野真陽を知らないか？ いいや、知ってるはずだ。こんな名前、そうはないからな。聞きたい事があるんだ、あいつが何処の病院に転院したのか知っているなら教えてくれ」

「何で、真陽……を？」

語尾が震え、口唇が震え、膝から力が抜けて、崩れそうになる。夕陽は怯えに憑かれていいる事を自覚して絶望的な気持ちになる。メタモルフォーゼ以前は、相手がどのような体格、どのような気性であれ、夕陽は他の男子生徒に怖れを抱いた事など一度もなかったからだ。

こうして、事あるごとに以前とは違ってしまった自分自身に気付く度に、言いようのない感情が渦巻いて、どうしようもなく不安になり、無性に喚き散らしたくなる。

まるで、知らない土地でひとり迷子になってしまったかのように、抛って立つ場所を何時までも見いだせない、そんな感覚。

彼女の心は何時でもほんの小さなきっかけで、いとも簡単に不安定で落ち着かない状態に陥ってしまう。

「やっぱり知ってるんだな。頼むつ、教えてくれ。おまえはあいつ

の姉妹か何かか。顔は全然似てないけど、名前は似てる。何か関係はあるんだろつ。どうなんだ？」

「あ……おれは」

「おれ？ 何言ってるんだ、おまえ？ おい、しっかりしろ」

儀同はもどかしげな表情を浮かべ、夕陽の両肩を掴むと、苛立ちも露わに彼女の身体を揺さぶる。

夕陽は何故いきなりこんな状況に追いやられているのか理解がでないまま、何処か視点の定まらない瞳を虚空に向けて、しばらくは何の抵抗も見せずにされるがままの状態でいた。

やがて辛うじて相手に聞こえるかどうかという声量で、彼女はぽつりと呟きを洩らす。

「おれは真陽じゃない……離せ」

「教えてくれるまで離さないっ」

だが、それでも儀同は引き下がる気配すら一切見せず、さらに強い口調で言い募る。

そのあまりの見幕に、その一途な真摯さに。

周囲の人間もそれぞれにどう反応すべきか、判断が遅れたのが、夕陽にとっては不幸だった。

操たちにしても、儀同という男子生徒が万が一夕陽の姉の関係者であるかもしれない可能性を捨てきれず、風紀委員たちと同様に判断の遅れを招く失態を犯していた。

図らずも心理的に孤立した夕陽の精神はやがて、逃れようのない袋小路へと追い込まれていく。

「おれに、触るなっ。おれを、そんな目で……見るなっ」

「落ち着けっ。おれはただ、真陽の事を聞きたかっただけだ！」

儀同の手を振り解こうと、夕陽は身を激しく振るが、本気になった男の前には無力でしかない自分を改めて思い知り、絶望が心臓を鷲掴みにする。

進退窮まった夕陽の感情はこの瞬間に限界を迎え、ショートしてしまう。

「いつ、嫌アああアああああアあっ」

喉が張り裂けんばかりの夕陽の悲痛な叫びに、その場で真っ先に反応したのは暁だった。

「おい、てめえ。いい加減にしやがれ。ウチの姫さんから離れろ」

「ぐう……っ」

儀同の死角から音もなく忍び寄り、彼の右手首を掴んだ次の瞬間には、暁は自分よりも頭ひとつ分背の高い相手を、背中から綺麗に地へと叩き付けていた。

儀同は暁の鮮やかな手際に、何ら抵抗する事もできずに、ただ息を詰まらせ、呻くしかない。

「そこまでだっ、暁！ やりすぎるな」

さらなる追撃を予想した臍から鋭く制止の声がかかるが、暁は仰向けに倒れたままの儀同には見向きもせずに、夕陽の両肘の辺りをそつと掴んでその身を気遣う。

「おい、姫さんっ。落ち着け！ もう大丈夫だ！」

「ああああああああああっ」

夕陽は錯乱したまま、それでも暁の身体に縋るようにして、必死の形相でしがみつく。

我を取り戻して騒然とする風紀委員たちの怒号が交錯する。

地に転がったまま痛みに呻く儀同に駆け寄ったひとりの女子風紀委員が、容赦ない糾弾の声を張り上げる。

「よくも儀同をつ！ 安曇野夕陽ならびに真宮寺暁しんぐうじあきの両名に、華月宮学園校則第95条より、96条の3、公務執行妨害罪の適用をする！ 確保！」

罪状を告げる、非情で冷酷なその響きが場を一瞬で支配した。

9―1 再会

操は荒れ狂う感情の乱れを制御するのに必死だった。

霊系から伝わってくる、彼女の主である夕陽の心の内を蹂躪している嵐の影響が、ひたすら過ぎ去るのを待っている。

一瞬でもその嵐に煽られ、巻き込まれてしまえば、夕陽の音叉の共鳴螺旋が発動し、取り返しがつかなくなってしまうであろう事を、彼女は過去の経験によりいやという程に味わっているのだ、ただ死に物狂いで耐えるしかない。

傀儡操者としてもっと冷徹になり、夕陽をただの人形として扱えば、これ程までに苦しまずにすむのだが、主を盲目的に敬愛する操にその選択肢は端からない。

夕陽の意識がある状態で、その感情の襞の奥にある細かな機微の全てを共有しながらも霊系の繋がりを保てれば、音叉の力をさらに生かす事ができるはずだとの思いがある。

相性がよいとされる、彼女の兄である操人と夕陽の関係とのさらに上に行くには、夕陽の心の内にある負の要素ですらベクトル変換し、余さず正のエネルギーとして扱えるようにするしかない。

それができれば傀儡操者としては無論の事、夕陽の従者として他の追隨を許さない存在になれるはずだと、操は常日頃から考えている。

それは決して荒唐無稽な夢物語ではないはずだった。

実際に操の理想形の片鱗を、由布院楓が彼女の眼前で示した例もある。

夕陽を人形扱いするのではなく、夕陽は夕陽としての人格を保つ
たまま、むしろ自らが彼女の増幅器にも似た力の構成部品となり、
必要因子となる。

それこそ操が望んでやまない、夕陽に対する理想の関係――。

音叉の姫君たる夕陽の礎^{いしすえ}として、なくてはならない存在になる。
シンクロスバイラル
共鳴螺旋の閉じたループを開放し、無限にも等しい力を得て、夕陽を女神に近い存在にまで成長させる。

それは操が永遠に解を求め続ける事になる、至上の命題――。

「生徒会執行部副会長、妹尾静香の名において、その罪状告知はわたしが一時預かります。よって風紀委員長、篝^{かがり}みちるによる確保の命は却下！ 各自、その場より一歩も動く事は許しません！」

「なっ！？ 一体、何の権限で！ 専門分野での公務中は各専門委員の長と生徒会執行部役員は完全に同等のはずです。つまりこの場合は生活指導の公務中によるトラブルですからそれを収束させる義務が風紀委員長^{わたし}にはあるし、それを止める権限は他の誰にもないはずです！」

風紀委員長、篝みちるによる曉たちへの怒りの矛先は簡単には収まる気配を見せず、彼女の暴走を止めようとした生徒会執行部副会長、妹尾静香にまで向けられてしまう。

儀同の半身を大切そうに抱き起こしつつも、誰彼なく噛み付く勢

いを見せる狂犬じみた態度の簀みちるに対して、妹尾静香は一転して淡々とした事務的な態度に戻る。

「トラブルの収束？　ただの私怨ではなくて？　過剰な権限の行使はさすがに見逃す訳にはいかないわ。自重しなさい、^{かがり}簀みちる」

「主観の相違です。風紀委員たちは皆、わたしに賛同してくれるでしょう」

「主観の相違、ねえ？　そう、なら思うとりにやってみればいいわ」

「風紀委員長、簀による命令は未だ継続中である！　わたしの命令に背く風紀委員服務規定違反者には懲罰動議を発令、後日査問委員会にて徹底的にその責任を追及するものとする！　残された学園生活で日陰の身にやつしたくなければ、よく考えて動くんだな」

だが、簀みちるの予想に反して、それでも風紀委員たちは誰ひとり動こうとはしなかった。

否、動きたくても動けなかったのである。

目の前に立つ見知らぬ生徒たちの雰囲気、ある一瞬を境にしてがらりと変わり、何者をも寄せ付けはしない殺気を周囲に撒き散らしているからだ。

他者から初めて浴びせかけられている苛烈なまでの殺気。

だが、風紀委員たちはそれが殺気である事ですら気付いてはいない。

ただそれぞれの内にある、生存本能とも喚ぶべき部分が、本人自

身でさえそれとは知らぬうちに反応しているに過ぎないのだ。

怯え、竦み、震え、かつてない恐怖に戦慄せざるをえないのは、狂おしいまでの生への欲求が、涙ぐましいまでの命への執着が、己の身体を危機から少しでも遠ざけるよう、拘束するからだ。

遅れてきた新一年生、時期外れの転入生たち。

彼、または彼女たちの存在感は他とは際立つ程に圧倒的で、色鮮やかで、そして美しい。

いずれも男女それぞれの平均以上の身長で、スタイルも人並み外れて均整が取れている。

口唇から覗いている犬歯がやけに目立つ男子生徒は、制服の上からでも分かる程の野生動物を連想させるしなやかな筋肉質の身体付きに、狼のたてがみのようなラフなカットの黒髪がこの上もなくよく似合う。

セミロングの黒髪を後頭部の高い位置でひとつに結っているポニーテールの女子生徒は、中性的な雰囲気ユニセックスをその身に纏い、世が世なら美貌の少年剣士にでも見紛われてしまいそうな凛とした佇まいをしている。

長い黒髪をざっくりとひとつに編み込んでいる三つ編みの女子生徒は、日本人形もかくやという程の整った容姿をしていて、第三者から見れば誰しもが姫という呼び名は彼女にこそ相応しいと思われる、愛らしくも気高い雰囲気ユニセックスを漂わせている。

そんな規格外ユニセックスの存在感を有する三人の生徒たちに、姫と呼ばれて割れ物の硝子細工のように大切に扱われている、メガネをかけた少し地味めで小柄な少女。

まるで映画のワンシーンのように絵になるその光景は、退屈な日常に憂いて、常に何か新しい刺激がないか探し求めている良家の子女たちの琴線に確実に触れた。

意識が朦朧としている夕陽を、暁が迷う事なく抱き上げると、「

きやあ、きやあ」と、黄色い嬌声がそこかしこで上がる。

正面玄関前には今や車両通学の生徒たちだけではなく、正門で既に生活指導のチェックを終えて、本来は別の入口に向かうはずの徒歩通学者たちも続々と集結してきていてるのだ。

「な……っ、何時の間に？」

「視野が狭いわね、篝。そんな事で冷静な判断ができていいのかしら」

由布院家所有のリムジンがロータリーから消え、後続の車両が次々に正面玄関前に着き、車で通学する生徒たちを順に降ろしていった結果、今のこの状況が生まれている。

小さなひとの集まりはさらに別のひとの集まりを呼んで、やがて集団を形成していく。

場を集う、生徒たちによる支持のバランスは見る間に一方的に傾いて、風紀委員たちに向けてさらなるプレッシャーを与え始めている。

暁を始めとする、夕陽の守護者たちのヴィジュアルはただそこに在るだけで、見る者全てを無条件に惹きつけてしまう程の、理屈を超えた魅力に満ち溢れていた。

「篝、あなたこの雰囲気の中かで、まだ無理を押し通すつもり？ 校則というものはね、運用する側の人格も問われるものなのよ。こ

こで風紀委員に対する批判の火の手があがれば、今後の生活指導に支障をきたすかもしれないよ。少なくとも今よりやりにくくなる事は間違いないでしょうね」

「だからこそ例え小さな火種でも、この場で確実に鎮火しておかなければならないんです」

妹尾静香の淡々とした事務的な口調が苛立ちを募らせるのか、簀みちるは苛々する様子を隠そうともせず、に噛み付き返す。

「そう、あくまで退く気はないよね」

「校則ですから」

「だったら、その校則に泣いてもらいましょうか」

「……………」

「ねえ、知ってる？ あらゆる校則に優先する特例事項がある事を？」

「特例事項？」

訝しむ簀みちるの態度を、まるで憐れみ、せせら嗤うかのように、

妹尾静香の口角が静かに吊り上がっていく。

妹尾静香と篝みちる、ふたりの一步も退かないやりとりの間にも、曉たちは焦れる気持ちを押し殺すようにして、水面下では密かに高速化言語による意思の疎通を図っていた。

——おい操、絶対に耐え切るんだぜ。でなけりや、また姫さんが寝込んでしまう。

——お館さまやおまえの兄上がいない状況で、夕陽さまの共鳴螺旋のお力が発動したらどうなるか分かっているんだろうな。

暁が腕の中の夕陽の様子を気遣わしげにしながらもそう言い放つと、朧もすかさず厳しい調子で追隨するが、それは操の感情を逆撫でする結果にしかならず、彼女は苛立ちを爆発させてわめき散らしてしまう。

——つるっさいんだって！ それと操人の事はゆーなっ！
気が散る！

——見てらんねえな。おい朧、この鬱陶しいツラした連中、蹴散らしていいか。操の奴、もう保たないぜ？

暁が周囲の状況を窺いながらも、若干呆れたかのようなニュアンスを匂わせると、操はたださえ不安定な感情をさらに昂^{たか}ぶらせる。

—— なっ？ 大丈夫だと言ってるでしょう！

—— 無理すんな、おまえがもう限界なのは見りゃ分かる。

—— 勝手な事を言わないで。わたしはもう二度と同じあやまちを繰り返さないと決めたのよ。放っておいて！

その時だった、まるで高速化言語を理解しているとしたか思えない内容とタイミングで、妹尾静香が暁たちの会話に割り込んできた。

「放っておくなんて出来ないわね、これ以上。篝、よく見なさい。彼女の顔色、酷く悪いわ。無駄に足止めされて、相当無理しているようだけど」

「！！」

振り向けば操の傍らに、いつの間にか妹尾静香が佇んでいた。暁たちの間に緊張が走り、それぞれがアイコタクトを交わす。そうして、妹尾静香の反応に探りを入れる為に、あえて高速化言

語による会話を続ける事を選択する。

—— 今のは何だ？ この女、おれたちの会話を理解しているのか？

—— さあな。どちらにもとれる瞬間をわざと狙った可能性もあるが、仮にそうでも簡単には尻尾は掴めんだろう。それよりこの時代の、この国で、わたしたちふたりの後ろを取れる人間が、由布院の邸の外にもいた事の方が問題だろう。

かつてない程の厳しい視線を向けてくる朧の気配に気付いているのか、いないのか。

妹尾静香はいつの間にか操の傍らに立ち、彼女の肩を両手で抱き寄せながら、相も変わらず淡々とした事務的な口調で篝みちるを苛つかせていた。

「ねえ、聞いてる篝？ こちらの生徒、久沓操さん、調子悪そうだと思わない？ 安曇野さんに続いて意識を失ってしまいそうよ」

「聞いてます。確かにそうですが、それが何か？ 特例事項とどう関係が？」

「折神朧さん、真宮寺暁さんのおふたりがいなければ、彼女たちは

歩く事もままならないでしょうね」

「さつきから、何を？ そんなのはいちいち説明されなくても、見れば分かります」

「それが聞きたかったの。ようやく認めてくれたわね、篝」

「だから？ いったい何をですか？」

会話を重ねる度に、さらに口角を吊り上げていく妹尾静香の表情に、篝みちるは自分が何か失敗を犯してしまったのかと、我知らず問いかけるその声音に、そこはかたない不安の色を滲ませる。

「体調不良の生徒二名が、ここにいる事を——この生徒たちには付き添いの生徒二名を付けて、今より直ちに保健室に連れて行かせます。それを阻害する一切の行為は処罰の対象としますので、委員各自は気を付けるように」

「特別救済措置法……っ」

妹尾静香の言葉に、眉を顰めて俯き加減につらつらと記憶を探っていた篝みちるだったが、何かに思い当たり腑に落ちたのかハツとした様子で顔を上げると、実に苦々しげに呟きを洩らす。

特措法1条の1——生徒個人の健康維持及び生命維持に関する管理活動の一切は、あらゆる校則に優先するものとし、何人の権限であらうとその対象に及ぶものではない。

特措法1条の2——体調の優れない生徒の安寧を図る為、保健室を一切の権限が及ぶ事のない治外法権区域とする。

「そう、一応は頭に入ってるようね。話が早いわ。保健室においては、生徒会各専門委員の権限は一切及ばぬものとし、いかなる理由であれ公務による保健室への出入りは全て禁止にします」

「つまり、健康上の理由を以て彼女たちをこの場から救い出し、治外法権として指定される場所で保護する訳ですか……どうして、そこまでなりふり構わず？ 少々強引ではないですか」

「あら？ たった今、あなた自身が認めてくれたのよ？ 安曇野さんたちが特別救済措置法の適用条件を満たしている事を。それに、強引さではきつとあなたに負けるわね。他に何か質問は？」

「……………っ」

校則を以て、校則を制す——誰よりも校則を重んじる風紀委員の長たる篝みちに、これ以上反論すべき言葉などあるはずもない。彼女はただ儀同の身体を抱き締め、口唇が醜く歪む程に、きつく噛み締めるしかなかった。

「何もないようね、簞。めったに運用される事のない特措法とはいえ、風紀委員の長たる者、全ての校則に精通していて然るべきだわ。精進する事ね」

うなだれ、肩を落とす簞みちるへの興味の一切を失くしたかのように、妹尾静香はあっさりと踵を返すと、その場からの離れ際にさもあり出したついでにとでも言った調子で、未だ風紀委員たちに囲まれたままにいる暁たちに声をかけた。

「ああ、あなたたち。保健室へ案内するわ、付いていらっしやい」

9―2再会

華月宮の杜の奥深くにある明治時代の代表的建築物、『鹿鳴館』の外観イメージが完全に再現された石造りの重厚かつ瀟洒な洋館風校舎、それが華月宮学園である。

基本的な構造は、東西に延びる北棟と南棟の二棟から成り、校舎の両端よりそれぞれ1／4程度の部分に繋がる二箇所の渡り廊下によって連絡している。

正門から離れた側にある南棟は、広大なグラウンドに面している四階建ての建屋で、一階から三階までは各階ごとに学年分けされ、四階部分は生徒会執行部を始めとして、各委員会、生徒会議室等、生徒会関連の組織が集められた一般教室棟と呼ばれている。

正門に近い側にある北棟は、正面玄関前から全景を捉えた時にはまさに鹿鳴館そのものと見紛うばかりの外観を誇る二階建ての建屋で、一階は主に教員及び事務関連、二階には視聴覚教室等の特別教室と、それに付随する準備室によって構成される管理棟となっている。

この二棟を中心に据えて、講堂、体育館、プール、学食、運動部文化部の各部室棟が、衛星状に配置され、この由緒ある学園を形成していた。

「あなたはここでもういいわ、ありがとう。由佳里にはわたしから言っておくから。さ、先生方につかまらないらうちに早く教室に戻りなさい」

「はい、分かりました。それでは会長、わたしはこれで失礼します」

丁寧な一礼を残して去っていく、おさげ髪をした下級生の背中を、優しい眼差しで見送ると、不意に厳しい顔付きになって彼女は振り向く。

北棟二階の東のつきあたりにある音楽室のドアを、姉小路瞳子あねのこりょうとうしが開けたその時、圧倒的かつ何処までも威圧的な音圧を伴ったピアノの音色の渦が、暴風雨のように荒れ狂っていた。

破壊的で、暴力的で。創造性の欠片もない、怒涛の音塊おんかい。

狂気を孕はらんだその響きはもはやとても音楽と呼べるものではなく、ただの不快なノイズでしかなかった。

瞳子はその秀麗な眉をわずかにひそめながらも、無言のまま室内に足を踏み入れる。

彼女の背後でオートクローザーが防音仕様のドアを閉じると、外部に漏れる音を瞬時に遮断する。

音楽室の音響設備は、ちょっとした規模の小劇場程度なら何ら劣る事のない高い水準レベルにあり、防音もまた完璧に近かった。

「なにごとなの？　これはっ」

瞳子は声を凜と張り上げながら、さらりとした長い黒髪を右手で背中に払い、背筋を綺麗に伸ばした美しい姿勢を崩す事なく、早足で窓際に置かれている黒く艶めいているグラウンドピアノに近付い

ていく。

ピアノの脇に所在無く佇んでいたふたりの女子生徒が、瞳子の氣配に振り向くと、あからさまにホツとしたような表情を浮かべる。

「遅かったじゃない、瞳子」

「生徒会執行部が揃いも揃って、許可もなく特別教室を使用するなんてどういふつもりなの？ 篝^{かがり}あたりに知れたら、先生方よりもうるさいわよ」

「その篝と揉めて、こうなつたみたいなの。わたしと範^{ファン}のふたりは正門側にいたから詳しくは知らないんだけど。風紀委員たちを問い詰めても、あいつら何も言わないしね」

頭の両側で三つ編みにした髪をそれぞれにまとめ、結い上げている、いかにも良家の子らしいお嬢様然とした雰囲気^{しんしろゆかり}を身に纏っている女子生徒——新城由佳里^{しんしろゆかり}が、やや焦燥を滲ませた表情で咎めるように言う。

「遅くなつたのは悪かつたわ、由佳里。ここに来る途中、職員室にも寄つてきたものだから」

「あなたは女子寮の寮長でもあるから、登校時間が遅くなるのも仕方ないのは分かつてる。で、それで？ 何か分かつたの。一時間目

が緊急的に自習となった理由」

「さすがに話が早いわね。でも、何も。ただ、先生方が何時になく慌ただしくていらしたわね。あそこでは生徒会長の肩書きなんて全く関係ないから、すぐに職員室から追い出されてしまったわ。静香なら、それでも何か掴んでくれたんだろうけど」

「そのかんじんの静香がこれだからね」

目を閉じ髪を振り乱し、非人間的とも呼ぶべき超絶的な技巧の運指法のみならず、全身全霊をかけて鍵盤を無心に叩き続ける、妹尾^{せのお}静香^{しずか}のその姿はまさに神懸かりで、何かに憑かれているようにしか見えない。

瞳子は今、静香の背後に立ち、ピアノ脇にいるふたりに向けて会話をしているのだが、それなりに声を張り上げなければ、おたがい何と言っているのか分からない状況にも関わらず、静香の耳にはそれさえも届いてはいないのだろう。

由佳里の最後の言葉に、瞳子が無然とした面持ちを浮かべると、額に接した髪が生え際が全て見える程のベリーショートをした、日に灼けた褐色の肌が^{えんじいろ}臙脂色をした制服にとてもよく似合う、スレンダーな女子生徒——^{ファン・ツイイー}範子^{ファン}怡^{イー}も会話に加わった。

「いずれにしてもだ、瞳子。ここにあまり長居はできないだろう。一時間目が終わるまで、誰も来ないとは考えにくい」

「むしろ、その可能性の方が高いでしょうね、^{ファン}範^ン。さっき瞳子がこ

の部屋に入る時、ほんの一瞬とはいえ、外に音を洩らしてしまったわ」

「だったらここは、瞳子に静香を何とかしてもらえない。わたしと由佳里では、どうしても止められないんだ。“妹”の行いに非があれば窘め、言う事を聞かせるのは“姉”の役目と決まっている」

由佳里とファンのふたりが交わす会話が導き出した結論に、瞳子はやるせない表情で溜息を洩らす。

「簡単に言ってくれるじゃない。静香がこんな風にトランス状態になってしまったら、誰にも止めるのは無理だわ。ここ数年は収まっていたのに、本当にどうしてしまったのかしら。後はもう、気絶させるか、体力が尽きるかするまで待つしかないわね」

諦念を含んだ瞳子の言葉に、由佳里は腰に両の拳を当てて、心持ち顎を上げると、心底呆れたような表情を見せる。

「冗談でしょう？ この曲、オプス・クラヴィチェンバリスティクムはね、楽譜どおりに弾けば、演奏時間が四時間近くにもなるのよ。それまでこのまま、ただ手をこまねいて見ていろっていうの？」

英国生まれのピアノ演奏家、カイホスルー・シャプルジ・ソラブリによって、二十世紀の前半に作曲されたピアノ独奏曲、オプス・クラヴィチェンバリステイクムは、四時間弱を要する演奏時間に加え、一九八〇年代頃までは、「これまでに書かれた中で最も難しいピアノ曲である」と認識されることも多く、難易度と複雑性に於いては他のどの作品にも引けを取らないとされていた難曲中の難曲である。

「仕方ないわ。静香の気が済むまでつきあうには、このままここに籠城するしかないでしょうね。あなたたちは、もう教室に戻りなさい。“妹”の不始末は“姉”の不始末、他の誰かを巻き添えにするなんてできない」

音量で制するタイプのこの曲は、楽譜には大量のアクセント記号と轟音を指定する f f f f f の指示も稀ではなく、要求される技巧のレベルと演奏時間の長さも相俟って、演奏者の体力と気力を容赦なく根こそぎ削り取っていく。

だがそれでも、瞳子の過去の経験によれば、静香の体力の底が尽き、演奏が止むまでには、まだかなりの時間があるはずだったのだ
が――。

「瞳子、静香が……っ！」

「分かってる！」

由佳里の悲鳴混じりの声に、瞳子はすぐさま反応する。

鍵盤を叩くタッチが急に乱れ始めたかと思うと、ついにはそのまま演奏を立て直せないままに、静香の背中がぐらりと揺らいで、演奏用の椅子から転げ落ちてしまいそうになる。

この結末を全く予想していなかった瞳子は、慌てて静香に駆け寄り、弛緩した身体を背中から受け止めた。

瞳子が肩越しに問いかけると、静香は何処か焦点の合わない虚ろな瞳を宙にさ迷わせ、消え入りそうな声で訥々（とつとつ）と答える。

「静香、しっかり。らしくないじゃないの。いったい何があったのか、教えなさい」

「瞳子。わたし、あなたが言ってたジェミニ……見つけたかもしれない」

「ジェミニ？ タロットの啓示の子？」

華月宮学園はカソリック系のミッションスクールを、その源流としている。

元々は女子校として創設された為か、校則上では恋愛に触れる項

目は少なく、生徒同士による恋愛は積極的に認められてはいないが、否定もまたされてはいない。

だがそれは、あくまでも異性間の恋愛に限った事で、主に教義上の理由もあり、対外的にはこの学園内に同性間の恋愛は存在しない事になっている。

ジェミニとはこの学校独自の隠語スラングで、今でも使う生徒は少ない。

華月宮学園がまだ女子校だった頃の名残りの言葉で、教義に背き人知れず恋愛関係にある女子生徒同士を、暗黙のうちに何時からかそう呼び始めた事に端を発する言葉だった。

現在ではもつと軽い、擬似恋愛をも含むフレンドリーな関係を指す場合もあるが、その言葉の裏に秘められた真の意味は、生徒たちの間では今でも色褪せる事なく継続されて使われている。

「でも、あの子はダメよ、やめた方がいい。きっとおたがいが不幸になる」

「静香、あなた何を言ってるの?」

「……………っ」

「静香……………!」

まるで巫女が神託を告げる様を連想させるかのような静香の姿だ

ったが、突然息を詰まらせ苦悶の表情に顔を歪めると、耐えきれずにその身をふたつに折ってしまう。

「これだけ演奏しても、まだダメ……“音”が内にこもって出て行ってくれない！」

「静香、さっきからどうしたの？ わたしたちにも分かるように話して！」

「あの操って子、何……何なの？ あれで正気を保っていられるなんて、どうかしてる、普通じゃないわ！」

瞳子はこの状況でもまだ、自分の声がまるで静香に届かない様子から、彼女のトランス状態がまだ解けていない事を知り、激しい焦燥感に見舞われる。

そんな時、さっきから何か耳をすましていた由佳里が、ふと呟きを洩らす。

「ねえ、何か聴こえない？ これ、何の音？」

「こんな時に何言ってるの、由佳里？ 別に、何も聴こえないわ」

瞳子にしてみればまるで場の空気を読んでいないかのような由佳里の言葉に、苛立ち混じりに返事をするが、ファンまでもが由佳里の言葉に倣って耳をすましている。

「いや、由佳里の言うとおりだ。確かに聴こえる。これは、いったい何だ」

耳に手を当て、教室内をゆっくりと見渡していた由佳里が、教壇の中央に置かれている教卓の処で視線を止めると、指をさして叫んだ。

「音叉よつ、音叉が共鳴してる！」

「共鳴って、いったい何に？」

由佳里の指摘どおり、教卓の上に置かれていた調律用の音叉が、自らが起こす振動により、ほんの僅かずつズレながら移動しているのが、瞳子にも見えた。

異変はそればかりではなく、気付けば教室中の窓硝子も細かく震え、間断なく微かな音を立てている。

『ル……………ン』

『ルツ……………ン』

『ルツ——ン』

そうしている間にも、音叉が発する音の響きは徐々に強まってきた、やがて特定の周波数に到達した時、さらなる異変は起こった。乾いた炸裂音が続けざまにし、教壇側から音楽室の後方に向かって、次々に部屋中の照明が破裂を繰り返していく。

細かな振動を続けていた防音仕様の二重になった分厚い遮音硝子、その外側の硝子にのみいくつもの亀裂が走り、まるで瞬間氷結でもするかのように、窓枠に向かって軋んだ音を立てながら白くひび割れていく。

それはまるでポルターガイスト現象のように、不可解で、理不尽で、原因不明の、とても謎に満ちた現象だった。

「共鳴螺旋……何て威力なの。ほんの些細な残滓だけで……こんなにも威力があるなんて」
シンクロスバイラル

妹尾静香はそんな謎めいた言葉を残して、姉小路瞳子の腕の中で、途切れかけていた意識をようやく手放した。

残された三人は思わず顔を見合わせると、ひと息吐いて、脱力す

る。

教卓の上に置かれていた音叉が、今は床に落ちて転がっている事に気付いた者は、ひとりもいなかった。

9―3 再会

「最後になりますが、携帯は必ずマナーモードにしてくださいね。エチケットは守るように。また、授業中に使用しているのが先生方に見つかった場合は即時没収されて、返却には各種手続きが必要となりますので気をつけてください」

髪にあてられていた、ヘアカラー用のチェックシートが外されると、スクールバッグを返される。

生徒会執行部に所属する書記の新城由佳里しんしろゆかりが締め言葉の言葉を述べると、それが生活指導の終了を意味する。

「あ、はい。ありがとうございました」

校則ぎりぎりのココアブラウンの髪をツインテールにしたその少女は、髪を揺らしながら一礼をすると、スクールバッグを風紀委員から受け取り、次の生徒に場所を譲ると、正門に背を向けて校舎に向かって歩きだそうとする。

「あ、あなた、ちょっとお待ちなさい」

「はい？」

背後から呼び止められた少女が再び正門側に振り向くと、頭の両側で三つ編みにした髪をそれぞれに後頭部に回して、まとめ結い上げている、いかにも良家の子女らしいお嬢様然とした雰囲気身を纏っている上級生の女子生徒――新城由佳里がすぐ目の前に立っていた。

「あなた、顔色が少し悪いわ。ただの低血圧ではなさそうね、よかったらこれを飲みなさい。痛み止めよ」

由佳里がそう言いながら、右腕を軽くスナップを利かせて振るうと、何もない空間から不意に、硬質プラスチックにアルミニウムフィルムで包装されたまだ開封前の錠剤がワンシートで六錠出現し、彼女の白魚のように繊細な指先にいつの間にか摘まれていた。

由佳里の背後からふたりのやりとりを見ていた風紀委員が驚いている。

どうやら背後から見ても、その錠剤のシートを何処から取り出したかは分からなかったらしい。

仮にそれがマジックとするなら、実にさりげなく、死角の存在しない、見事な手際だと言えるだろう。

「あ、すいません。頂きます」

「飲んでもすぐには効かないから、気分が悪ければ無理しないで保健室にいきなさい」

「そうします。ご心配ありがとうございました」

少女は素直に礼を言い、もう一度頭を下げると、由佳里は後続の生徒たちの生活指導に戻っていく。

しばらくその姿を彼女はぼんやりと眺めていたが、やがて思い出したかのように、再び校舎に向かって歩き出す。

「由佳里ちゃんもよくやるよねー、我が姉ながら毎朝毎朝早出して飽きないのかね。感心するわあ、ホント。日曜の朝ミサにもたまに出てみたいだし、猫っ被りで疲れないのかねー。でもやっぱりこの学校はチエック甘いわ、篤委員長が頭にいてもこの程度だもんね、華月宮のお嬢さま方はおとなしいねー。この三月まで公立中学で揉まれた新城千恵里さんしんしろちえりを舐めんなよ、と……はあ」

やる気のなさそうな口調に、溜息ひとつ。

千恵里は、目尻がやや吊り上がり気味で、くりつとした瞳が猫のような容姿をしているが、酷い低血圧の彼女は、毎朝すぐぶる調子が悪い。

したがって午前中いっぱいは何時も、窓際で日向ぼっこをしている飼猫よろしく、気だるげで怠惰な雰囲気^{きふき}を漂わせているのが常だった。

ただ今朝に限って言えば、彼女の顔色が悪い理由^{わけ}は他にも存在しているのだが。

彼女は正門から離れた頃合いを見計らうとスカートのウエスト部分をクルクルと巻いて、裾をひざ上十数センチまで引き上げる。

「これで、よし。ウン、いーカンジ」

それまで、膝丈のスカートに白のタイツを履いているようにしか見えなかったが、ミニスカートに白のハイニーソの組み合わせに早変わりする。

校内で風紀委員に遭遇した時には、スカートを素早く元の膝丈に戻すスキルを彼女は当然身に付けているのだが、それは三年間の公立中学校時代の数少ない成果といえた。

そんな風に余計な事をやっている、他の徒歩通学者や生徒を送迎する高級車に、彼女は次々に追い抜かれてしまうのだが、それでも周りをいささかも気にする様子もなく、マイペースを崩す事なく石畳の上を校舎に向かったのんびりと歩いていく。

だが、そんな千恵里の視線さえも奪ってしまうような車に、彼女は入学以来初めて遭遇してしまう。

「わ、何？ スゴいじゃん、これ。リムジンって言うんだっけ、何

て車なの」

華月宮の朝、リムジンで登校する生徒は数名存在するが、今までに見かけた車とは比較にならない程に、その黒塗りのリムジンは威圧的な存在感を周囲に放っている。

「長っ、どんだけ長さあんのよー」

その威風堂々とした車が自らの脇を通り過ぎていく様子をただ呆れ顔で眺めていると、スモーク硝子の向こうであまりはつきりとはしないが、車体最後尾になるシートに和服姿の凄艶なまでの美女の隣にぴつたりと寄り添って座る、髪をナチュラルショートにした少女とほんの一瞬だけ目が合った気がした。

『うわっ、地っ味ー。一番後ろの席って確か、偉い人が乗るんだよね。あんな地味なメガネっ娘が、あの綺麗なおねーさんの妹？ マジ、ウケるんだけど。世の中不公平だよなー、あたしの方が絶対可愛いのにー。由佳里ちゃんと変えてくんないかな？』

姉の由佳里が聞いたら間違いないがっかりしてしまうような、結

構酷い言葉を口走りながら、千恵里はそのリズムジンのテールを見送った。

「う……痛っあい。せつかく由佳里ちゃんが薬くれたけど、あたしの場合、二日目って薬飲んでも効かないんだよねー。やっぱ無理しないで保健室行って、先生にベッド借りた方がいいかもしれないかあ」

由佳里ちゃんの事、悪く言ったから罰があたったのかもしれないと、一応は殊勝に反省をしながらも、下腹部を襲う鈍い痛みに苦しみを覚えながら、千恵里の歩調はさっきまでよりもさらにゆつくりと、遅くなっていく。

新緑も鮮やかな銀杏の並木道を、暗い表情でトボトボと歩き続けていくと、正面玄関前で何故かめずらしく生徒たちの人だかりが出現している。

「うわ、ウツザ……はああ。何だか知らないけどカンベンしてよー。入口塞ぐなよねー、はい、そこ通してー」

千恵里はふらつく身体で、人混みをかき分け、かき分け、正面玄関両脇にある終日全面開放されている昇降口から校舎内に入ると、そこは開放的な中央ホールに、四列四段十六用の靴箱が並列に配置

されている。

彼女は自分が所属するクラスの靴箱前で、上履き用のシューズに履き替え、保健室のある左手の廊下へと向かう。

正面玄関側から中央ホールを中心に見て、彼女が背にした反対側の廊下には事務局の窓口があり、ホールに対してコーナー状に面している。

さらにその通路奥には教材室と図書室、そしてその準備室が並んでいた。

千恵里は、生徒たちがぐるりと取り囲んでいる人混みの向こう、正面玄関口で起こっている喧騒には見向きもせず、学長室と連なる職員室前を通り過ぎ、保健室のドアによやく辿り着く。

遠く離れていても女生徒の黄色い声が「きゃあ、きゃあ」と、ここまで響いてくるのが煩わしい。

「何、はしゃいでんだかー。まあ、あたしには関係ないけど。興味もないし」

ドアを二度軽めにノックし、返事がないのでほんの少し隙間を開けて、室内をそつと覗く。

「先生ー？　いらつしゃいますかあ？　ちょっと気分悪くてー、少し休ませてくださあい」

声をかけても室内からは何の返事もなく、ドアの正面つきあたりの窓際に置かれている事務用デスクは、空席になっている。

養護教諭の姿が全く見当たらずに、室内が無人の状態なのを確認すると、千恵里はドアの隙間から保健室へと身体をすべり込ませた。そろそろと、何故か訳もなく足音を忍ばせて、左の壁際にふたつ並んでいる簡易ベッドに近寄ると、間仕切り用のカーテンを広げて、外部からの光線を遮断して、薄暗い空間を作り出す。

「事後承諾になるけど、まあいっかー。ベッド貸してくださあーい」

華月宮学園の女子の制服は、横ファスナーの臙脂色えんじいろのブラウスに、カソック風の白い襟えりと返しの袖が鮮やかによく映える。

襟と袖口には、臙脂色の細い一本のラインが走り、それがアクセントとして全体の印象を引き締め、スタイリッシュに見せていた。

千恵里はほんの数分後、たいして深く考えもせずに行動していた事を、激しく後悔するはめになるのだが、この時点ではそれを知る由もない。

ツインテールを纏めている白いリボンを解いて、髪を下ろす。

数箇所のスナップで留められている大きな襟を先に取り、左脇にある横ファスナーを引き上げ、ブラウスを脱ぐ。

スカートはほんの少しの間悩んだが、皺になるのが嫌で、それを避ける為に結局インナーのキャミソール姿になる。

意識不明で担ぎ込まれたわけでもないのに、いろいろと変に気を

遣う。

脱いだ制服はきちんとたたんで枕元に置くと、綺麗に糊付けされたシーツに身体を潜り込ませていく。

「別に気にしないでいいよね、どうせ先生以外は“誰”も来ないんだし」

ベッドに身体を横たえながら、気怠げにそう呟きを洩らした時の事だった。

何故か、急に廊下側が騒々しくなる。

そして今さっきの千恵里の言葉を嘲笑つかのように、その喧騒は保健室へと確実に近付いて来ていた。

気のせいではない、確かに近付いてくる。

この管理棟一階で、こんなに騒々しい雰囲気になるのは、前代未聞だろう。

「さっきの正面玄関口のアレか……マジ、かんべん。何があったか知らないけど、静かに寝かせてくれよー」

千恵里が頭からシーツに包まり、猫のように身を丸くした時だった。

「なかに簡易ベッドが二床あるわ。^{にしょう}先生方にはわたしが話をつけてあげるから、遠慮せずに使いなさい」

千恵里にとってよく知る、聞き覚えのある声が出たかと思うと、ノックもなくいきなりドアが開けられたのである。

9―4 再会

「さあ、先にお入りなさい。遠慮しなくていいのよ」

保健室入口のドアが開けられると、その声が確かに妹尾静香で間違いない事が千恵里には分かったが、それ以外に聞こえてくる女子生徒の声は彼女の知らないものだった。

「ご好意には感謝します。我が君も後で必ず同じ思いを抱かれるでしょう。ですが、見たところあなたも顔色をかなり悪くされているようだが、休んでいかなくてよいのか？」

「ご心配なく。わたしのこれはね、薬を飲もうが、ベッドに横になるうが、どうにもならないの。だから、そう気を遣ってもらわなくてもいいわ」

ふたりが交わすこの会話で、妹尾静香の声に何時もの張りが無い事に、千恵里はようやく気付く。

『静香さん、誰と話しているんだろう？ それに体調悪いみたい。』

また何か、“読んで”しまったのかな』

簡易ベッドのシートに猫のようにくるまり、千恵里はじつと息を潜めて、聞き耳を立てている。

「それよりも、何時までも抱きかかえてないで、由布院のお姫さまを早く休ませてあげなさい。彼女、相当な男嫌いみたいね。病的と言ってもいいくらいに。ウチの会長と気が合うかもしれないわね。でもきつと、だからこそ安曇野さんの側近にあなたが選ばれたのでしょうね、真宮寺くん」

「てめえ……何処まで気付いてやがる」

場の空気が一気に冷えたのが、千恵里にも伝わってきた。

押し殺した男の低い声、殺気を隠そうともしていない。

これで妹尾静香を除いて、男子生徒がひとり、女子生徒がひとりいる事は確定した。

後は我が君と呼ばれている生徒がひとり。

名前は安曇野で、おそらくは真宮寺と呼ばれた男子生徒に抱きかかえられている。

足音の数から、さらにあとひとりいるのは間違いない。

これで四人、うちひとりは戦力外。

千恵里は過去の経験則から導いたある予感から、冷静に状況の把握に努めていた。

聴覚しか頼れない今の状況で、その正確な現状認識はかなり優秀だと言える。

だが千恵里のそんな冷静さも、次の妹尾静香の言葉ひとつで容易く崩れ去ってしまう。

「何処までって、そうねえ。心臓の音がね、聴こえないのよ、あなた」

「――!!」

その冷えた言葉の応酬がもたらした衝撃に、千恵里は思わず叫び声をあげそうになる。

口許を慌てて両掌で押さえ、じっと息を殺す。

「惜しかったわね、もう一步だったかしら。そんな細かい処までは、気が廻らなかったようね」

「てめえ……理由もなく、ただ助けた訳じゃねえとは思っていたが」

「そうね、別にあなた達を助けた訳じゃないわ。誰もいない場所に隔離したかっただけ。養護教諭もこの時間、朝の職員会議中は保健室にはいないしね」

「まるで、“さとり”みたいじゃねえか」

「さあ、どうかしらね。でも、ひとでもない存在のあなたに、“さとり”に喩えられるなんて思ってもみなかったわ」

自嘲気味にひっそりと笑う妹尾静香の儂げな気配に、男子生徒はそれ以上追及すべき言葉を持たなかったらしい。

言葉を詰まらせた彼の代わりに、ふたり目の女子生徒がたまりかねた様子で声をあげた。

「どうなの、臃。何か感じる？」

「今、探っている。だが、“あやかし”の気配は感じないな」

臃と呼ばれたひとり目の女子生徒がそう答えると、妹尾静香の声に混じる自嘲の響きが、ますますその色濃さを増していく。

「今度は“あやかし”なの？　あなた達の方が、いろいろな意味で興味深いのだけれど。何が目的で紛れ込んできたのか知らないけれど、簞の手に余る存在なのは間違いないでしょうね。でもね、安曇野という名がありながら、姫の系譜である由布院の姓を詐称しているのは悪質だわ、これは赦す訳にはいかない。先生方を前にしてもその名を名乗れる？」

「由布院の姓なら名乗って当然だ。我が君夕陽お嬢さまは、由布院家当主であらせられる楓さまの妹君でいらっしやるのだから」

「だったら何故、安曇野と名乗っているの？ 安曇野真陽って誰なのかしら。儀同との関係は？ どう？ 答えられないの？ そんな筋の通らない事を許す程、甘いお方ではないでしょう、由布院家のご当主さまは？ それにね、誰かと情を交わすようなお方でないのもかなり有名な話よ。残念だけど、そんな下手な作り話じゃあ、とてもじゃないけど信じてあげられないわね」

「信じる、信じないの問題ではない。事実か、事実でないかの問題だろう」

「だから、いちいち説明する必要はないと言う訳かしら？ 合理的ね、そういう考え方わたし好きよ、嫌いじゃないわ。あなたとは、もしかしたらいい友達になれたかもね、朧さん。ああ……でもごめんなさい、そろそろ限界みたいね。悪いのだけれど、これで失礼しなくては。ちょうど、さっきの騒ぎも治まりかけているみたいだしね」

廊下の様子を窺う気配を微塵（みじん

）も見せずに、妹尾静香は確信を持った口調でそう断じると、何故だか不意に、今までとは口調をがらりと変える。

「後は“何時もどおり”任せたわよ。由布院の名を騙るお姫さまに

丁寧なおもてなしをしてあげてちょうだい。ただし、時間がないから手早くね。先生方のお手を煩わせないように」

「あつ、待て。まだ聞きたいことがある——っ」

金属音がひとつ小さく響くと、妹尾静香の後を追おうとした女子生徒が黙り込んだ。

「どうしたんだ、臆？ 何故、後を追わねえ」

「閉じ込められた。どうやら、外から鍵がかけられたようだ」

妹尾静香の最後の言葉と、残された生徒たちが室内に閉じ込められたという事実から、その意味を正確に理解した千恵里は口にこそ出さないが、心の奥で盛大に愚痴っていた。

『やっぱり来たよ、無茶ぶりが。待つてよ、静香さん。話が全然見えないんだけど。心臓の音がしないって、何？ 相手は人外って事なの？ また勝手にわたしを咬ませ犬に使う。確かに由佳里ちゃんに頼むと、見境なくやりすぎちゃうかもだけど、やるからにはわたしだって本気出すんだから』

若干支離滅裂気味に思考が飛んでいるが、与えられている情報量が少ない現状ではそれも仕方のない事。

妹尾静香の手によって知らぬ間に舞台上に上げられ、無理矢理に幕を開けられてしまった以上、深く考えるだけ無駄だった。

「別にいいじゃねえか。だったら、その血の匂いをさせている女から詳しい話を聞き出せばいい。遠慮はしねえぜ。どんな面^{つら}してるか、拝ませてもらおう」

「待つて。暁……わたしなら、大丈夫。それより夕陽さまを早く横に。ベッドはひとつあればそれで足りるから」

「そういう訳にはいかねえな、操。どういう奴か確かめねえと、姫さんを隣に寝かせられねえだろ。さっきの女の態度も煮え切らなかつたしな。悪意を以て、ここへ誘導したとも考えられる」

「朧、あんたからも何か言ってやりなさいよ。こんな朝から保健室で血の匂いをさせている女子生徒なんて、限られてるでしょう？」

どうやら常識的な生徒がひとりはいららしい。

いつその事、全員が常識の通じない相手の方がずっとやりやすいのにと、千恵里はひとりごちる。

しかし、逆にこれを使わない手はないと、思い直した彼女はひと芝居打つ事にした。

「あの女の関係者なら一応の警戒は必要だろう。ましてや、それが血の匂いをさせている相手ならなおさらだ」

「あんたなら気配で探れるでしょうに、臆。相手に敵意があるかどうかくらい、分らないの」

「気配などいくらでも欺く事ができる。気を感じ、耳で聴き、目で確かめるのは、あたりまえだろう？ 暁は何も間違っではない」

足音が近付いてきたかと思えば、何の誰何もなく、簡易ベッドを取り囲む間仕切りのカーテンが開け放たれる。
だが、その時には既にベッドはもぬけの殻の状態だった。

「へっ、匂うぜ。ガキのかくれんぼじゃあるまいに、それで隠れたつもりかよ。最初からここに誰もいなかった事にしたかったんだろうが、俺の嗅覚は猟犬並みに利く。残念だったな」

「い、いやあああつ」

暁は夕陽を抱きかかえたまま跪くと、ベッドの下に右腕を突っ込むや否や、千恵里の足首を掴んで力任せに引きずり出して、そのま

ま片手で持ち上げる。

フリルのあしらわれた淡いレモンイエローのキャミソール姿が愛らしい。

そして……それとは少々不釣り合いなサニタリーショーツに目を留め、操が声なき悲鳴を上げる。

「バツ、バカア！ 早く、降ろしてあげなさいよお！ その子見て、分らないの？ 血の匂いさせていて、当然でしょうが！ やっぱり、あたしが言ったとおりじゃないの。臃っ、あんた最初っから分かっててやらせたでしょう!？」

千恵里の下着姿、その意味に気付いた操が顔を真っ赤にして、ヒステリックな声を上げると、暁と臃に猛然と抗議を開始する。

「お願い……助けて」と、か細く声を震わせながら、何かを訴えるかのように自分に真っ直ぐ向けてくる彼女の潤んだ瞳が、操から迷いを消し去り、さらに勢いづかせる要因となっていた。

「やれやれ、この程度のくだらん三文芝居が通用するとは、大根役者にしては上出来だ。それよりも操、大声を出さないでくれないか、我が君が目覚まされてしまう」

「じっ……じっのー」

操がむきになって、さらに臍へと噛み付かんとする姿を横目に、
当の千恵里は足首を掴まれ逆さまに吊された状態で、軽く腕を組み、
物憂げな態度で深い溜息をついていた。

「ちえーっ、傷付くなあ、もう。やっぱり最初の読みどおり、ひとり
にしか通じないかあ。ねえねえ、ちよっとイケてる獵犬さん。静香
さんにお掃除頼まれちゃったしさー、あたしが相手であれば、少
しくらいなら遊んであげようか？」

深追いをする事なく、標的を瞬時に切り替えた千恵里は、それで
もいかにも仕方なくといった調子で、暁を下から見上げて気だるげ
に言う。

「あ？ ガキが何言ってやがる」

冷ややかに見下してくる暁に対して、千恵里はにっこりと邪氣の
ない笑顔を見せる。

「可哀想に、人を見かけで判断するなって、誰にも教わらなかった

？」

そう言うや否や、千恵里が口唇をすぼめ、息を吸った次の瞬間。

白刃のきらめきが一条の光となって、千恵里の口唇から暁の身体に向かつて迅^{はじ}つた。

どう見ても、千恵里の口唇の奥に仕込まれていたとは思えない程の短刀が、暁を襲う。

ゼロ距離からの不意を突いたその攻撃は、千恵里にとって絶対防御不可能の、一撃必殺の技であるはずだった。

だが、暁はまるで時を遡ったとしか思えない程の初動の速さで、ぎりぎりそれを躲してしまう。

それでも千恵里は気落ちする事なく、暁が見せたその一瞬の隙を逃さず、身体を捻り一回転させ、足首を掴む暁の拘束を切る。

猫が四つ足で着地するかのように、音もなく、重力さえ感じさせない軽さで、彼女は床にその四肢を着けた。

「今度は暗器使いか——っ、どうなってやがるんだ、この学園は！」

「バカねー。自分の事しか考えたらダメだって、誰にも教わらなかつた!？」

毒づく暁に向かって、千恵里は普段と変わらぬ軽口を叩く。

だがその内容が示す言葉の意味は凶悪で、暁が避けた短刀の射線上には臍の姿があった。

「無論、教えたさつ、このわたしが暁に骨の髄にまで分かせてや
った！」

だが、それを躲す朧の初動もまた暁同様、神速の域に迫っていた。
千恵里が知る処ではない過去の事象において、由布院楓や四季が、
朧自身に見せた動きを、彼女は暁と共にほぼ忠実に再現している。

「見たか、操つ。だから言っただろう、暁の嗅覚は獵犬並みだ！
奴はその女の身体に元から染み付いた血の匂いに反応していたん
だ！」

朧の言葉を肯定するかのように、千恵里が次に繰り出そうとして
いる技は、凶悪さではさらにさっきの技よりも勝っている。

「狂い咲け、血に染まりし徒花よ。あたはな新城流暗器術——はつとう拔刀、あぐみ薙！」

千恵里の身体の、キャミソールで肌が隠れているほとんど全ての

部分から、切尖鋭い無数の刃が、全方位に向かって一瞬で突き出す。これもやはりどう見ても、これだけの数の刀身をあらかじめ仕込んでおけるスペースなど全く見当たらない。

身体の内部分から皮膚を突き破り、外に向かって出てきているようにしか見えないのだ。

間合いを詰めようとしていた暁は、これもまた驚異的な反射速度で、後方へと飛び退いていた。

「こいつ——っ、針鼠はりねずみかよ、おもしれえ！ 来いっ、小狐丸こぎつねまる！ 相手は数だけが頼りの無銘むめいの格下ばかりだぜ、蹴散らせ！」

暁の声に、突如出現した白の妖狐が白刃となって応える。
眩いばかりの白い閃光が一条から数条に別れ、壁と言わず天井と言わず、室内全ての空間を縦横無尽に駆け巡っていく。

各自のその動きは、とても肉眼で捉えきれるものではない。

「なっ、小狐丸？ って、本物なの？ 何処で手に入れたのよ、そんな名刀！」

名の知れた幻想クラスの名刀のいきなりの出現に、驚きを隠せない千恵里の心に、さらに追い打ちがかけられる。

「小鴉丸こがらすまるも来いっ。おまえは姫さんを守るんだ！ 敵の刃はひと振りたりとも通すんじゃないぜ！」

磁力に操られているかのような、黒の砂鉄じみた澱が何処からともなく現れ、特異点ミニブラックホールさながらに、暁がその胸に抱いている夕陽の眼前の空間に一気に凝縮されていく。

触れなば何もかもが、瞬時に分解されてしまうその禍々しさは筆舌に尽くしがたく、他には一切の例を見ない。

「小鴉丸までっ？ あたしの薙が“怯え”ている！？」

千恵里の身体の内部から剣山のように突き出ている無数の刀身同士が、震え、慄おののき、共振を起こし始めている。

或いはそれは、彼女自身の怯えがもたらししている現象なのかもしれない。

「力の差に気付くのが遅すぎるんじゃないかねえのか！？」

「まだよっ、式神！ まだ、終わってない！ だったら、獵犬おまえの飼主を奪とるまで！」

千恵里はそう吼えるようにして叫び声を上げると、萎えそうになる
氣力を自ら奮い立たせ、標的を臍に変えて身体ごと突っ込んでい
った。

9―4 再会（後書き）

学園編もそろそろキャラが勝手に動き始めてきたようです。
執筆はたいへんだけど、楽しくもあります。

読者の方と一緒にこの作品を育てていけたらと思っています。

頑張りますので、今後もずっと応援してください。

9―5 再会

全身凶器と化した身体を瞬時にトップスピードに乗せた千恵里は、フエイントをいくつか多重に入れて暁の脇をすり抜けた。

いやに簡単に抜けられた事を疑問に思う間もなく、朧は千恵里のすぐ目の前に迫ってくる。

朧の紅い口唇に薄く貼りついてしている冷笑が、余裕の笑みに見えて、やけに癪に障って仕方がない。

はつきり言ってしまうなら、千恵里にとって相手の何もかもが気に喰わなかった。

「人外お断りつ。飼い主は式神連れて、この学園から一緒に消えてくんないかな!？」

まるで何かのキャンペーンポスターにでも書かれている、標語のような語感の言葉を吐き出しながら、千恵里は深く朧の間合いへと踏み込んでいく。

それでも朧はバックステップで距離を取り、真夏の逃げ水のように、千恵里を自分の間合いには容易に入れさせない。

千恵里にとっては、そのほんの僅かな距離が果てしなく遠く感じてしまう。

「絶対、逃がさないんだからね！ 見せてあげるよ、あたしのとっておき！」

千恵里は息継ぎなしの完全な無呼吸状態から、白刃の閃きを一条、再度口唇から走らせた。

暗器と呼ばれる隠し武器、その特別に加工された仕込み用の短刀を、吹き矢のごとく射出させたのだ。

それは全くの不意打ちで、暁への初撃でわざと見せた息を吸う拳動をフェイクとして利用する事により、この第二撃との組み合わせを回避不能の連携術として成立させる事になる。

「新城流暗器術——無拍子、二人静！」
ふたりしずか

「一度見せた術を無拍子にした処で無駄な事」

それでもまるで時を遡ったとしか思えない初動を見せ、回避不能のタイミングだったはずの短刀を、朧は無造作に右手で掴んで見せる。

「奪とった——っ」

そう叫んだのはしかし、臙ではなく千恵里の方だった。
グラリと傾いた臙の左胸のちょうど真下辺りに、黒のつや消しの短刀の柄がいつの間にか生えている。

「動かないで。それは、そう簡単には抜けないわよ。抜くには“解呪”が必要な。でも、さすがに二人静が影刃の術だとは気付かなかったみたいね？　あなたが掴んでいるのはただの囷な訳。あたしだって、いろいろと考えてるんだから！」

フフン、と鼻を鳴らして千恵里は得意気な表情を見せて勝ち誇る。

「その影刃にはね、“呪”がいくつか仕込んであるの。敵対者の細胞の損傷を防ぎつつ、戦闘行為の一切を禁止するのが基本なんだけど、戦意に反応すればわたしの命令の及ばない、致命的とも言える“最後の呪”が起動してしまうからせいぜい注意する事ね。そうなったら、もうどうにもできなくなる。でもそうね、心配しなくていいわ。あなたが式神とその地味子を連れてこの学園からおとなしく出ていくのなら、正門の結界に反応して自動的に“解呪”されるはずよ。どう？　これで分かったでしょう？　ここにはもう二度と来ない方がいいって」

その時千恵里は自分が致命的な失言を犯した事には気付いていなかった。

場の空気が一気に冷え、朧と暁がその身に纏う雰囲気さがらりと変わる。

ふたりが全くと言っていい程本気を出していなかった事に、千恵里はこの期に及んでようやく気が付いたが、時は既に遅すぎた。

「出ていかなければどうなるのだ？」

物理的な重圧と何らか変わらないレベルのプレッシャーが、まるでコールドタルのように、千恵里の身体になつとりと絡み付く。

「そんなの、決まってる。あ……あなたに死ぬ程の痛みと苦しみを与える為に、残された“呪”を全て起動させなくちゃいけないわ……お、脅しなんかじゃないんだから」

「まず第一に、わたしは拷問対策の為にあらゆる種類の苦痛に耐性が付けられているからな。だから、そんな事をしても無駄でしかないんだが、やりたければまあ好きにするがいい。次に、おまえ程度の相手をあしらうのに、戦意など一片の欠片かけらすら持ちあわせてはいない。そんな必要は全くないのだ。ひとは路傍の蟻を踏みつぶすのに、いちいち殺意を覚えたりはしないだろう？」

「なっ……何が言いたいのだよ」

「つまりだ、この影刃に仕込まれている“呪”の等級程度では、わたしにとって何の拘束にもならないし、“最後の呪”とやらも決して起動し得ないという事だ」

「そんな……つ。影刃に“呪”をたつたひとつ仕込むだけで、一体どれだけの手間がかかると思ってんのよ……そんなハツタリは通用しないんだから」

そう気色ばんではみたものの、千恵里の声は段々とか細く、また弱々しい響きになっていく。

何故なら、本来であれば退魔調伏の為に用意されている強力無比な“呪”を既にいくつか並列起動させ、臍の言葉が真実間違いのない事を、その身を以て知ってしまったからに他ならない。

影刃の柄にくつきりと浮かび上がっている、「急急如律令」の文字が明滅を繰り返しているのが、仕込まれた調伏系の“呪”が全て起動しているその証だった。

並みの人間なら発動と同時に苦痛に悶絶して、とても正気を保ち続ける事など出来はしない。

血の気の引いていく千恵里の顔を満足げに眺め、臍はシニカルな微笑みを口唇の端に浮かべて見せる。

「誰にも教わらなかったようだから、ひとつ教えてやろう。素直に詫びを入れる勇氣も時には必要だ。今ならまだ、多少の非礼は許してやってもいい。我が君は寛容でいらっしやるからな」

「そんなのできる訳ない……簡単に退いたりしたら、静香さんに怒られちゃうよ……っ」

「最後通牒は果たした。これでもう茶番は幕引きだ。暗器術を使えるのが自分だけだと思っっているようだが、悪夢いいものを見せてやろう——折神流、暗器の舞」

その刹那的瞬間、ぞわりと千恵里の全身が総毛立った。

現実離れたそのありえない光景を目の当たりにして、絶望感に囚われた彼女の表情が恐怖に歪んだ。

朧の口唇に浮かべられていた冷笑がさらに色濃く刻まれていくのが、たまらなく口惜しい。

「絶望するのは、これからだ。踊れ、血しぶきにまみれて。降り注げっ——篠突く雨！」

朧の声に呼応するかのように、保健室の天井一面から一瞬にして突き出た無数の槍が、その鋭い刃が持つ切尖を真下に向け、土砂降りの雨のごとく容赦なく一斉に降り注いだ。

逃げ場などまるでない、辺り一面を隈無く、そして無差別に攻撃するその術が描き出す修羅場は、まさに“篠突く雨”の名に相応しい。

無慈悲で救いのない朧の攻撃は、暗器術の域を遥かに逸脱する凶悪さと破壊力をまざまざと見せ付け、保健室内のデスクや薬品棚と

言わず果てはベッドまで、全ての備品や設備類を呑み込み、切り裂き、さらには打ち砕いて、瞬きすらする間も許されずに、スタスタに寸断されていってしまう。

千恵里の身体もまた、その例外ではなかった。

全身の至る個所から同時多発的に、ありえない程の衝撃が痛みとなつて、彼女の神経繊維のことごとくを蹂躪しながら末端にまで駆け巡る。

かつてない程の重力を感じ、囚われ、彼女は自らの体重に逆らう力さえ失い、ゆっくりとリノリウムの冷たい床に崩れ堕ちていく。

明滅する視界、フラッシュバックする思考。

次々に浮かんでは消える、とりとめのないイメージ。

脈絡のない奔流の中、その映像はひととき色鮮やかに、彼女の脳裏に焼き付いた。

処女雪のように穢れなき白い髪と、血の色がそのまま透けて映る紅い瞳。

暁という名の式神の腕に抱かれ、冷ややかに千恵里を見下している、華奢な身体付きの中性的な少女。

『嘘……何でいきなりそんな綺麗になつてんのよ……地味子だった癖に……隠してるなんて、もったいない……』

そこまで考えた処で、千恵里の記憶は不意に途絶え、その意識は深く闇に落ちた。

「――ヘルマプロディートス」

床に倒れ込んだ千恵里の身体に、今はもう対象への興味を失った視線を落としていた暁が、ぽつりとひと言呟いた。

それを聞き咎めた朧は、怪訝な表情を浮かべて、短く問う。

「何だ、それは？」

「この女が最後にそう言ったんだ。ほとんど、声らしい声にならなかったけどな」

朧に答えを返す暁の言葉に、自らの技量の不足が招いた体調不良から、最後尾でひとり蚊帳の外に置かれていた操が、めずらしく控えめに口を挟んだ。

どうやら彼女なりに忸怩じじたる思いがあるらしいが、それも無理からぬ事だった。

そんな操の気持ちに気付かない朧と暁ではなかったが、ふたりはあえてその部分には触れようとはしない。

「ギリシャ神話のアンドロギュニユスの名前じゃない？ アフロデイトという美の女神と十二神がー柱ヘルメスとの間に生まれた子供の事ね。両性具有で、精霊ニンフを魅了する程美しかったと言われているわ」

「意味深だな。だとしたら、我が君のこの麗しきお姿を見られてしまったか。この女、よりにもよって夕陽お嬢さまを、よくも地味子などと呼んで愚弄してくれたものだ。篠突く雨のイメージをただ見ただけでは飽き足らない、精神に直接的にダメージを与えるだけなどこの女には甘すぎたくらいだ。いつそ六道輪廻の地獄へ叩き落としてやるつか」

「ダメよ、臍。降りかかる火の粉は振り払う程度にして、やりすぎではいけないとお館さまにきつく言われているでしょう」

「心配するには及ばない、わたしと暁のふたりが真に本気を出さなければならぬ程の相手など、この学園にいるはずがない」

「たぶんな……」と、後に続くべき言葉を臍は口には出さず、心の裡うちに閉まっておく事にした。

彼女は脳裏に浮かぶひとりの女子生徒の存在についての考察を、いったん保留扱いにして棚上げをする。

初見で全てを把握するには、底の深い相手だったのは間違いなかったが、夕陽も操もメンタルがまだ弱く、無駄に不安にさせる必要もないという配慮からだった。

これはおそらく暁も同じ気持ちのはずで、目を合わせると彼もま

た、無言のまま小さく頷いてみせる。

「仮にそんな化物がいたとしても、我らには夕陽お嬢さまの共鳴螺旋がある。操はできうる限り早く馴染んで、足を引っ張らずにすむようにしろ」

「わ、分かってるわよ。いちいち言われなくなつて、そんなこと……」

朧の言葉に応える操の声に、微かにヒステリックな響きが混じり始めたのを、暁は敏感に察知する。

「シッ……静かにしろ、ふたりとも。姫さん、ようやく落ち着いたんだぞ」

彼の腕の中に今はおとなしく収まっている夕陽だったが、そのつぶらな瞳は紅玉のごとく輝き、さらさらのナチュラルショートは新雪を思わせる程に純粋な白を露わにしていた。

対風紀委員相手のいざこざで錯乱状態に陥っていた夕陽は、何時もの一時的な幼児退行を起こしてしまい、さっきまでグズっていたのだが、暁の言葉どおり今はようやく落ち着きを取り戻し、おとなしくなつたばかりなのだ。

その間に夕陽が被った実害は、カラーコンタクトレンズを涙で流し失くしてしまった事と、メガネやウィッグを彼女自身の手によって強引に剥ぎ取ってしまった位のものだったが、それもまた何時もと同じでよくある事だった。

「でもまあ、顔や喉を前後の見境なく搔きむしられる事を思えば、ずっといい」

今はあどけない夕陽の顔を見つめる暁の表情は、臃でさえもかつて見た事のない、慈愛に満ちたそれは柔らかな微笑みだった。

9―6 再会

音楽室のドアが二度、ノックされた。

それは遠慮がちな響きだったが、今の生徒会執行部のメンバーには、やけに大きな音に聞こえた。

姉小路瞳子を始め、残された生徒会執行部のメンバーは互いに無言でアイコンタクトで意思の疎通を図る。

「静香をお願い」

無言による意思統一はすぐに為され、瞳子は静香をファンと由佳里に預けて、ひとりでドアに向かう。

再度ドアがノックされ、瞳子はその響きに急かされるようにして、ドアノブを内側へと引いた。

ドアの外、誰の人影もない廊下にひっそりと、やけに印象の薄いひとりの女子生徒が佇んでいた。

瞳子は音楽室内部の惨状を見られる事を避ける為、ほんの僅かな隙間に身体を滑り込ませて、後ろ手にドアを閉める。

「瞳子会長、お取り込み中の処申し訳ありません。お邪魔かとは思いましたが、至急お耳に入りたい事があって参りました」

その女子生徒は瞳子、と呼んだ。

姉小路瞳子が下の名前で呼ぶのを許す相手は公私を問わず、非常に数が限られている。

従って瞳子の目の前に立つこの女子生徒は、彼女にとってかなり近い間柄のはずで、実際に顔にも何処となく覚えがある。

だが、それでもどうしても相手の名前が思い出せない。

もどかしさに小さな苛立ちを覚え、何とか思い出そうとするがやはり叶わず、どうしても彼女の名前が出てきそうもなかった。

それどころか、彼女が同級生であるのか、下級生であるのかもあやふやで、判然としない。

罪悪感に苛まれながらも、思い倦^{あく}ねた瞳子は、率直な態度で眼前の少女に詫^わびる。

「え……と、ごめんなさい。名前が出てこないわ。あなた、誰だったかしら」

相手の受け取り方次第ではかなり失礼にも思えるような言い草だったが、その言葉に相手を不快にさせる響きは全くなかった。

女子生徒の態度自体にも変わりなく、さして気にしている様子もない。

「ねえ、何て呼べばいい？」

もう一度、念押しするかのように瞳子が問う。

「では、名無し……と」

「名無し……？」

女子生徒が返した答えに、瞳子は思わず眉を顰める。

少女は訝しげな瞳子の態度には委細構わず、手にしていたタブレットPCをおもむろに指し示す。

「それで、瞳子会長にはこれを見て頂きたいのですが」

それは各専門委員に昨年から一台ずつ学園から支給されているタブレットPCで、彼女は実にさりげなく話題を逸らして瞳子の視線を誘導する。

「これは……？」

「陸運局のデータベースをダウンロードして、ローカルに保存したものです。どうしても、早急に確認したいナンバーがありましたので」

「あなた、それって!？」

「もちろん不法に侵入しました。部外者にはアクセスできませんから。一般にはハッキングと呼ばれている違法行為ですが、足跡は一切残していませんので、ご心配には及びません」

「……………」

名無しの女子生徒は事もなげにそう言うが、瞳子は思わず言葉を失った。

陸運局に対するナンバープレート番号からの照会については、「登録事項等証明書」の交付請求が必要で、個人情報保護を強化する観点から、平成十九年十一月十九日より以下のものが必要となっている。

基本的には、『自動車登録番号（ナンバープレート番号）』と『車台番号（下七桁）』のそれぞれを揃え、正規の手続きを踏まえないければ、自動車の所有権を公証する登録事項等証明書は、交付される事はない。

言うまでもなく、一般人にとって任意の車両の所有権が誰にあるのか特定する方法は、これ以外には無いと断言してしまっても過言ではなかった。

「ですが、問題なのはそんな事ではありません」

彼女は液晶画面上に滑らかに指を走らせると、開かれていたウィンドウを全て閉じて、端末を省電力モードで待機させる。

そして、さも問題など何もなかったかのように取り澄ました態度で、話の先を続けるのだ。

「今朝の生活指導で騒ぎの中心になった転入生なんですが」

「あ……ああ、何かあったらしいわね。わたしは詳しくは知らないんだけど」

瞳子も相手のペースにすっかり乗せられてしまっているのを自覚しながらも、それ以上深く追及する事はあきらめて話の先を促す事にする。

彼女が話す内容に興味を持ったせいでもあった。

「かの生徒達の送迎に使われていたリムジンのナンバーを先程のデータベースで照会した処、見過ごす事のできない事実が判明しましたので、ご報告に参りました」

「どういう事なの？」

「車体の所有者の名前が問題なのです」

「じれったいわね、所有者が何なの？」

「ところで瞳子会長は、この学園の創始者であらせられる始祖の十人の方々については、どう思われていらっしやいますか？」

話が核心に触れようとすると、彼女はまたも巧みに話題を逸らしてしまう。

まるで、瞳子を弄^{もてあそ}んでいるかのようだ。

じれったさと、もどかしさを覚えながらも、瞳子は投げかけられた問いに対して、真摯^{しんじ}に答える。

「もちろん、心の底より尊敬申し上げているわ。あの方々は今では実質この国の中枢を司る存在。政界は言うに及ばず、財界、法曹界、果ては裏社会まで、姫の影響力は何処までも計り知れない——」

「その代償として、一個人としては皆様方は、常に危険に晒され、下手をすれば死と隣合わせでいらっしやる訳ですが」

思い入れたっぷりに答える瞳子に、名無しの女子生徒は、淡々とした口調で事実を述べる。

「当然だわ。 たった千人足らずでこの国に留まらず、その気になれば世界をも掌中にできる程の才能揃いのよ、誰だってその力には無意識の裡にでも惹かれるでしょう。 ひとりでいいから、姫を拉致して人質に奪る事ができるなら、この世の頂点に立つ事も不可能ではないのだから」

姫の血統は一般には情に厚いと知られている。

その姉妹愛はまさに溺愛と言ってもよく、第三者が割り込む余地など全く存在しないのだ。

誰かひとりでも姫がトラブルに巻き込まれてしまったなら、始祖の十人を筆頭に姉妹たちが全力で問題に相対して解決にあたる。

社会の表面には出て来ないだけで、そんな事例が過去には何度もあった。

「でも、今ではそんな事はほとんどありえないけれどね。 姫にはひとりひとり、project・Kが優秀なSPを付けているのだから」

「ですが、学園生活だけはそう簡単にはいきません。 大人のSPを生徒に常時張り付けるのは、ほぼ不可能です」

「そうね。 同じ年頃の不特定多数が閉鎖的空間の中で共同生活をする、この学校という場所だけはどうしても警備が手薄になってしま

うわね。かつてはこの華月宮学園も、姫の拉致誘拐が目的の、国籍不明、所属不明の各出先機関の工作人員達で溢れかえっていたそうだけど」

「この十年間、姫はひとりも誕生される事はありませんでしたから」

「ねえ？ さつきからやけに持って回った言い方をするわね。言いたい事があるなら、はっきり言いなさい」

名無しの女子生徒はここでもうやく、端末の液晶画面を再び瞳子に向けた。

あらかじめすぐに呼び出せるように設定されていたであろう特定のデータが、そこには表示されている。

「これを見てください。あのこれ見よがしで、やけに人目につくリムジンのナンバーと、その所有者の名前です。申し訳ありません、もっと早く気付くべきでした」

何処か皮肉めいていて、そして自嘲気味でもある少女の口調を不審に思いながらも、瞳子はタブレットの液晶画面に視線を落とす。

液晶画面上には、ナンバープレートの番号に対応して、ある個人名が表示されている。

それを見た瞳子は、思わず自分の目を疑った。

「由布院……楓。由布院ですって！？始祖の十人のおひとりだなんて、どういう事なのこれは……その生徒は一体何者なの？」

「一ヶ月前、高校入学前のひとりの男子が、夜の繁華街でちょっとしたトラブルに巻き込まれました。その少年はケガでもしたのか、すぐに救急車が呼ばれたようですが、何故か夜間の救急当番である病院ではなく、華月宮大学付属病院に直接搬送されたそうです。その少年の名前は——安曇野夕陽」

「それって……」

「そうです。件の転入生^{くだん}本人です。その生徒は華月宮大学付属病院に搬送された一ヶ月後の今朝、始祖の十人のおひとりであらせられる、由布院楓さまご所有のリムジンでご登校なさったのです」

一体どのようにして、その情報を掴んだのか、またその情報は本当に事実なのかという疑問を、瞳子はいったん横に置いた。

彼女にとって決して看過する事のできない結論が、ここで導き出されてしまったからだ。

同時に、名無しの女子生徒は初めからこの終着点へと、瞳子を誘^{いざな}おうとしていた事実を知る。

「つまり、安曇野夕陽は十年ぶり、千人目の姫である？」

「その確率はかなり高いかと」

穏やかな時が流れるここ華月宮の杜の静けさも、これでもう終わりになってしまうのかもしれないと、瞳子はそんな微かな予感を抱く。

気付けば、やけに酷く口の中が渴いていた。

「この事は他には？」

「瞳子会長以外には、誰にも」

瞳子が相手の返事に満足して頷き返した時、彼女の背後からよく聞き知った声で、名前を呼ばれた。

いつの間にか彼女が背にしていたドアは、控え目ながらも開けられていたようだ。

「瞳子……」

「静香？ もう大丈夫なの？」

思わず咎めるようになってしまった瞳子の声の響きに、由佳里が
静香を庇う。

「ごめんなさい、わたしたちが悪いの。もう平気だからって言われ
てしまうと、どうしても止められなくて」

由佳里に続いて、静香の身体を今はひとりで支えているファンが、
心底不思議そうに瞳子に問いかける。

「それはそうと、今まで誰と話していたんだ？ 瞳子」

「誰って……え？ いない？」

瞳子は答えようとしたが、振り返った時には、特別教室が並ぶ管
理棟二階の通路には、誰の人影もなかった。

ついさっきまで自分の目の前にいた少女について、瞳子は説明し
ようとするのだが、結局彼女について何ひとつ知る事なく別れてし
まった事に気付く。

それどころか、その少女の印象さえもまるで記憶から欠落でもし
てしまったかのように、ほんの些細なイメージさえも残っていない
のだ。

まさに、自ら名無しと呼ぶに相応しい存在だった。

「そう……そうね。あえて言うなら、名無しの幽霊さんかしら」

由佳里とファンのふたりはその予想外の答えに呆れてしまったのか、思わず顔を見合わせる。

だが、そんな話の流れには全く関心を示す事なく、静香はひとり焦^じれていた。

「それより瞳子、さっきしていた話は本当なの。安曇野夕陽が姫だなんて、そんな！？ だったら、わたしは何て事を。でもそれならあの車が今ではめずらしくあんな濃いフィルムでフルスモークにされていたのも分かる。あれは姫の為の紫外線対策だったという訳ね？」

「静香……？」

「フィルムなんか貼られてさえないなかったら……リムジンの車内がはつきりと見えてさえいれば……こんな間違いは犯さなかった……いえ、それ以前に安曇野夕陽の周囲があんなにノイズに塗^{まみ}れてさえないければ……確かにその気になってさえ見れば、姫の面影はあったというのに……っ」

常に冷静沈着な彼女にはめずらしく、抑制の効かない感情を持て余していた静香は、ついにはファンを振り切って、駆け出そうとする。

「待ちなさい、静香っ。何処へ行くつもりなの？」

追いつがる生徒会執行部のメンバーから何とか逃れようとしながら、静香は悲痛な叫び声を上げる。

「離して……っ、保健室に行かなくてはならないの。今すぐにつ」

9―6 再会（後書き）

ここまでご愛読頂きまして、ありがとうございました。

今回でようやく、MTFが基本どいうお話なのかという世界観を提示できたのではないかと思います。

今後どうか、MTFをよろしくお願い致します。

9―7 再会

「何時までそうしているつもりだ、暁」

めずらしく戸惑いを見せている暁に、朧が冷やかな声をかけると、彼は心底困り果てた様子で、朧の顔を見上げた。

だがそれは、朧だからこそ気付ける程の、ほんの些細な変化。

事実、暁の傍らに立つ操には普段どおりの態度にしか見えていない。

二床並べられた簡易ベッドの間に空けられているスペースに佇み、朧は腕を組み、左の人差し指で右の二の腕をトントンと一定のリズムで叩いている。

その抑揚のないリズムが逆に、苛立ちをかるうじて抑えている朧の内面を的確に表しているように暁には思えたが、なるようにしかならないのだから仕方がない。

窓側の簡易ベッドには千恵里が横たわり、微かな寝息を立てている。

朧は万が一に備えてふたつのベッドの間に位置取りをし、廊下側の簡易ベッドに夕陽を寝かせようとしてもたつきを見せる暁に眉をひそめていた。

「待てよ、そうならむな朧。姫さんがどうしても離してくれないんだ」

朧の非難めいた視線を受け流し、暁は自身の腕の中にいる、柔らかで暖かなぬくもりを持った、羽毛のように軽い肉体を有した少女に対して、この上もなく優しい声をかける。

常に獲物を狙う野生の肉食獣のような雰囲気とその身に纏う暁も、夕陽に対しては、その気配が何処かへ綺麗に消え失せてしまう。

見つめただけで獲物を射殺^{いじく}してしまえそうな鋭い眼差しも、夕陽に向けられている時だけは、とても柔らかで慈愛に満ちた光が湛^{たたえ}えられている。

その些少な変化に気付くのもまた朧だけで、肝心の夕陽にまでは届いてはいない。

朧と契約を結ぶまでは、群れを作る事を好まず、誰とも馴れ合う事もなく、孤高を求めて悠久の時をさすらってきた暁だったが、全ての他者を警戒する事があたりまえになっている彼の心の裡に、夕陽は気付けばいつの間にか入り込んできていて、その琴線にたやすく触れてくるのだ。

猫科の気まぐれで力を貸し、精神的にはつかず離れずの程よい距離を保ち続けてきた、朧との距離感とはまた違った心地よさがある。或いはそれは、MTF化によって目覚めた、夕陽の共鳴螺旋と呼ばれる異能がもたらす、恩恵の内のひとつかもしれない。

単なる庇護欲ともまたちがう、これがいわゆる波長が合うという事なのだろうと、彼は考えるともなくそう思っている。

『姫さんがその気になったらとんでもないたらしになるぜ』

それは彼の偽らざる本心で、自分自身の魅力在未だ自覚する事のない夕陽に、言葉にはできない危うさを覚えずにはいられなかった。そこまで考えが及ぶと、彼は何故だかは知らないが、何時も説明のつかない焦燥感に苛まれてしまう。

それがどのような感情に起因するものなのか、彼が真に理解するのはまだ先の事だった。

「さあ、姫さん。少し休もうか」

「んっ」

小さく頭^{かぶり}を振った夕陽は、暁の制服をきつく握りしめて、全身でしがみついてくる。

その甘えた幼子のような愛くるしい様子を見れば、いかに朧と言えども、夕陽から暁を無理矢理にでも引き剥がす事は心情的に難しい。

朧の体中から冷気が洩れだす程、彼女の不機嫌さが増している事に、どこ吹く風の態度を崩さず、暁は辛抱強く夕陽に言っただけ聞かせる。

「そんな事言わずに横になってくれ。まだ本調子じゃないんだから、しばらく休んだ方がいい」

「んんっ」

「なあ、頼むよ姫さん。言う事聞いてくれ」

「や!」

ベッドに背中が、そして枕に後頭部がつけられそうになって、夕陽は慌てて頭を跳ね上げると、さらにきつく暁にしがみつく。

辛抱強くはあれど、さすがに暁の声もはつきりとした当惑混じりの響きに变化してくると、その些細な機微を察した夕陽が潤んだ瞳で彼を見上げてくる。

「わがまま言わないでくれよ、姫さん。頼むからさ」

「あかつきは、ゆうひがきらいなの?」

舌足らずで語尾が微妙に震えるその涙声は、抜群の破壊力を有していたのか、暁も思わず返答に詰まり、何も言えなくなってしまふ。

「う……っ」

そんな暁の様子に頭痛を覚えたのか、朧は右のこめかみを指先で押さえ、眉間に寄せられている皺をさらに深くした。

見かねた彼女は今度は操に視線を向ける。

「操……何とかしろ。おまえならできるだろう?」

ほんのわずかな反論ですら許しそうもない押し殺した低音に、暁と同じ側のベッドサイド、朧の対面にいた操はさりげなく視線を逸らす。

「そんなの無理……これが緊急時ならともかく、夕陽さまの意思に反する介入はなるべくならしたくないし、できる限り避けたいの。お館さまにだって、そう命じられているわ」

「むづ……ならばどうすればいい?」

「夕陽さまが飽きるまで、暁があやしてさしあげるしかないんじゃない?」

もどかしげに唸り声を上げる朧に向けて、操は何を分かりきった事をといった乾いた口調で答えを返す。

「やはりそれしかないのか、納得はしかねるが」

「そんなの、わたしだって」

ついに殺気を抑えきれなくなり始めた朧と同様、操の身体の周辺でも、見えない霊糸同士が蠢き触れ合ってもいるのか、空気が軋み震え始める。

「おい、てめえらふたり、何を好き勝手言ってやがる」

こんな周囲の状況では、せっかく落ち着きかけた夕陽が何時再びぐずつきだすかもしれず、暁の聲が棘とげのある響きに変わる。

朧と操のふたりも、さすがに声を潜めるが、彼女たちの嫉妬心まですぐそれで治まる訳ではない。

ベッドを挟んでやりとりする内に徐々にエキサイトしていき、やがて高速化言語を駆使してまで、現状に対する不満をぶちまけ始める。

操はともかく、普段は冷静沈着な朧でさえも、幼児退化化が一時的な症状であるとはいえ、夕陽の寵ちやうが余所よそへ向いたきりではおもしろくない。

『操は、暁ごときが我が君を独占している現状が許せると思うのか』

『許せる訳ないじゃない。邸じゃ、お館さまべつたりで、この学園内くらいしか夕陽さまと親密になれるなんて機会はないのに』

『そうだろうとも。誰であれ、由布院家に仕える者ならば、我が君に対する想いにいささかのちがいもあるはずがない。なのに、今のこの状況は何だ』

朧の言葉を受けて、操が返事を高速化言語のソースに変換しかけた時だった。

「え？」

「あ？」

「は？」

「ん？」

調子外れの、何処か場の空気に全くそぐわない声が最初にして、朧、操、暁の三人がそれぞれ三様の反応を示し、おたがいの顔を見

合わせる。

わずかに遅れる事数秒、今度は絹を裂く程に甲高い、悲鳴にも似た声が上がった。

「ええええええええええ……っ？」

三人の視線が夕陽に集まるのは、自然な流れだった。

見れば、首筋から耳朵、目許までもを紅葉色に染め上げた夕陽が、暁の顔を見上げてその身をすっかり固くしている。

せつかく意識を取り戻したのに、いきなりまたパニック状態に陥られては、事態の沈静化は何時まで経っても図れはしない。

ここでの対応を間違えれば、振り出しに戻ってしまう。

だが、夕陽を繊細に扱わなければならないはずのこの場面。

暁の内心はともかく、夕陽の主観的には、彼の態度にことさらな変化は見られはしない。

「あ、暁が何で、お、おれをつ、だ、抱いてるのかなっ？」

「逆だ。姫さんが、おれにしがみついて離れないんだ」

「あ、ああ!？」

「待てっ、今手を離すんじゃない!」

暁に指摘されて初めて、夕陽は彼の腕の中に収まり、彼の制服に皺が寄ってしまう程にきつくしがみついている自分に気付く。

慌てて手を放して、距離を取ろうとしたのがこの上もなく不味かった。

ベッドに横たえられようとしていた体勢で、仰け反るようにして上に逃がれれば、必然的に訪れるであろう結果が夕陽に待っていた。

「つ——つ」

乾いた音がひとつ響き、両手で頭を抱えた夕陽が胎児のように身を丸くして呻いている。

簡易ベッドのパイプで組まれたフレームに、頭頂部を激しく打ち付けたのだ。

「お……おいつ、大丈夫かよ？」

さすがに動揺を隠しきれない暁だったが、思わず差し伸べようとした彼の手が夕陽の頭に届く事はなかった。

「どけ！」

「どきなさい！」

朧と操のふたりがもの凄い勢いで、夕陽の身体に覆い被さるようになっている暁を払いのけたからだ。

過保護とも言える過剰な反応ではあったが、立場が逆の場合を考えれば、自分でも同様の反応を示してしまいそうで、暁は喉まで出掛かっていた文句をひとり飲み込んだ。

「何処をお打ちになったのですか、我が君。原因を作った暁に対して、さぞやお怒りいかでしょう」

「ご命令してくだされば、霊系で暁を切り刻んでやります」

久沓の霊系は、生体の神経系へ介入して自在に操るだけではなく、この世にある全ての物体に対して物理的干渉が可能だった。

しかしそれは、この世の理の外に存在している相手に対しても何ら変わる事なく同様で、仮にそれが霊的な存在であっても、攻撃の切れ味は一切衰える事なくさらに増す。

暁のように霊体の実体化している相手に対しては、物理的、霊的、どちらからのアプローチも即時に可能で、決して逃したりはしない。

「いっ……たああああああい！」

だが、この時の夕陽には側仕えであるふたりに返事をする余裕など全くと言っていい程なく、目に火花が散るような痛みに、頭を抱えたままの姿勢でじっと耐えるしかなかった。

その時だった——鍵穴にカチャカチャとせわしなく鍵が差し込まれる音が、室内に微かに伝わってきた。

それに続いて、ドアノブからはシリンダーロックが解錠される音がやけに大きく鳴り響き、これ以上ない程に、荒々しく、そして勢いよく、保健室入口のドアが開け放たれる。

朧たち三人は瞬時に警戒レベルを上げて迎撃可能な布陣を敷くが、室内に現れた人影を見て、この上もなく驚いた。

「大丈夫かつ、安曇野夕陽！？」

「お……お館さまっ？」

妹尾静香は身体を何処か頼りなくふらつかせながらも、誰の人影

もない管理棟二階の通路をいきなり駆け出し、音楽室を後にした。

「静香、静香ってば、ねえ……静香ったら！」

瞳子を始めとする生徒会執行部に所属する残りのメンバーたちは、完全に虚を突かれ、あっけに取られてしまう。

それでも先行している静香の背中にすぐに追いつくと、無理に引き止めようとはせず、代わりに質問を投げかける。

瞳子たちには、話がまるで見えていないのだから当然だ。

「ねえ、少しは説明して。黙ってばかりじゃ何も分からないじゃないかい」

「ごめんなさい、みんな。まだわたしにも整理がつかないの。何か話していいか、何を話したらいいのか、全然分からないの」

追いついた後、やや歩調を落として肩を並べてきた瞳子に視線を向ける事もなく、静香は弱々しく頭を振りながら前に向かって進む。由佳里とファンは、そんなふたりの後を何も言わずについて行く。この場合は完全に瞳子に任せた格好だ。ふたりの付き合いは幼少の頃より続いていて、もうかなり長い。

瞳子はしかし、それ以上の追及は控える事にした。

これ程までに混乱している静香を、彼女が見るのは初めてで、今は何を聞いても無駄だろうと判断したからだった。

このまま静香について行けば、例えばこの先に待つ答えが彼女たちにとって望まざる事実であろうと、事態は必ず進展するはずだ。

じたばたするのは、それからでも遅くはない。

彼女のその状況判断は正しく、そして賢明だと言えるだろう。

弱々しく頭を振るい続ける静香は、思い出したかのように、力なくポツリと呟きを洩らす。

「本当に……分からないのよ」

彼女たち生徒会執行部が目指す保健室は、もう目の前に迫っていた。

9-7 再会（後書き）

ここまでお付き合いしてくださった読者の皆様方、本当にありがとうございます。

やっとここまでたどり着きましたあ、長かったあ。

どうか、今後もMTFをよろしくお願い致します。

10―1 集結、ふたたび

我が言葉に宿りしかりそめの命は、この世のものに非ず。真実なりや、または偽りなりや、今ここに問う。

管理棟二階から階段を下り、事務局前を素通りして、正面玄関ホールを横切ろうとしていた時の事だった。
不意に静香の足が止まり、ホッとしたような響きを含んだ呟きを洩らす。

「千恵里……ひとりで、静かに眠っているみたい。寝息も落ち着いているし、最悪の事態にはならなかったようね……よかった」

そう安堵の表情を浮かべながらも、彼女はさらに耳を澄まし、聴覚を頼りに何かを探っている。

「でも、だったら安曇野夕陽は何処へ消えたの？」

瞳子を筆頭とする、残りの生徒会執行部は、ここでも静香に対して何も声をかけずにじっと待っている。

おたがいの役割を心得て、おたがいに信頼しあっているのが窺える。

「これは……まさか学園長室？　今は嘘のようにノイズが晴れているから気付かなかったわ……そう、朝は初めての登校で、不安だったのね……ああ、でもやはり由布院家ご当主さまの妹君なのは間違いないようね……わたしの謝罪を受け入れてくださるかしら」

「ちょっと待って。謝罪？　いったい誰に？　ちょっと聞き捨てならないわね。そろそろ何があったか説明してもらいたいわ」

どうやら目的の対象とする存在を探り当てたらしい静香の言葉尻を捉え、由佳里が聞き咎める。

「ああ由佳里……わたし、あなたにも謝らなければならない事があるの」

静香は、夢現ゆめげんの境界を彷徨さまよっているような、何処か虚ろで頼りなげな反応を示す。

だが、そんな静香の様子に慣れている由佳里は、普段のままに対応する。

「千恵里の事についてなら謝ってもらわなくてもいいわ。好きに使ってくればいい。あの子はね、誰かが何か、役割を与えてやらなければダメになるタイプなの。だから何も気にしなくていいのよ」

由佳里は話の流れから何かが腑に落ちたようだった。

静香と千恵里の間に、自身の知らない何らかのやりとりがあったらしいと察すると同時に、その概容アウトラインさえも、ほぼ正確に予想を付けていた。

「ありがとう、由佳里。そう言ってもらえると、少しは気が楽に……っ!？」

それは突然の出来事だった。

何の前触れも、予兆もなく、静香が不意に、両手で耳を押さえて蹲すquatってしまったのだ。

これには、さすがに他の三人も戸惑いを見せるが、その原因は彼

女たちにもすぐに知れる事となる。

数瞬の時を置いて、非常に甲高く、耳を劈^{つんぱ}かんばかりの金属的な爆音が、辺り一帯に轟いたのだ。

その音はまさに波動となつて、空気を圧縮し、振動させ、そこにあるもの全てを無差別に蹂躪する。

ありとあらゆる窓硝子がビリビリと音を立て、このままでは割れてしまうのではと、瞳子達が危機感を覚え始めた頃、それは姿を現した。

「なっ、何、何の音!?!」

「これは……っ、ジェットエンジンの音だ!」

「ジェット機? 何でこんな場所で?」

すぐ間近にいるにも関わらず、ほとんど叫び合つようにして、瞳子とファンが言葉を交わす。

「違う……! これは、まさかと思うがY2Kなのか。しかし、こんな音をさせておきながら、日本でナンバーが取れるとは思えないが?」

そう愉しげに言うファンに、瞳子は思わず聞き返す。

人並み以上の肺活量を誇るファンの声は、この状況下においても非常に通りがよかったが、瞳子はそのあまりに場違いな言葉に、爆^{エキゾースト}音のせいで内容を聞き間違えてしまったのかと思ったからだ。

「Y2K？ 2000年問題が一体何なの？」

瞳子はこの時、やむをえない事ではあるが、ファンの言葉に一瞬錯覚をした。

2000年問題とは前世紀末、現行の太陽暦であるグレゴリオ暦2000年になると、旧世代のプログラムによって稼働しているコンピュータが、一斉に誤作動を起こす可能性があると言われた問題である。

これが略称でY2K問題、またはミレニウム・バグと呼ばれていたのだから、瞳子が自身の知識として元々持っていたこの情報を、反射的に思い浮かべてしまったのも無理はない。

むしろ、Y2Kから2000年問題以外の事象に結び付ける人間の方が稀少だろう。

ファンはその数少ない内のひとりだった。

「いや、やはり間違いないはずだ！ 地上を、ましてや公道を走れるジェットエンジン搭載のマシンなど、他にはありえないだろうからな！」

「分かるように説明して、ファン！」

ファンが、何処か夢見心地の表情を浮かべて、熱に浮かされたような口調で叫ぶ。

「Y2Kだ！ わたしが言っているのは、MTT・タービン・スーパーバイクの事なんだっ」

MTT・タービン・スーパーバイク。

アメリカのMTT社マリン・タービン・テクノロジーが開発し、米国本土で発売された、ガスタービンエンジン搭載のオートバイ。

「MTT Turbine SUPERBIKE」主にY2Kと称される。

米国カリフォルニア州において、航空機用ガスタービン・エンジンを搭載するモーターボートや消火用ポンプなどを製造している同社が開発したのがこのオートバイである。

ガスタービン搭載を主張するかのような大径の排気管と、ジェット機そのものの甲高い金属音が特徴で、「市販されている世界最速のオートバイ」、「世界一高価な市販オートバイ」として、ギネスブックにも記載されている。

米国国内でのメーカー希望小売価格は150,000米ドルであったが、2004年より185,000米ドルとなっている。

過去に製造された事のあるジェットエンジン搭載のオートバイのようにジェット噴射による推進力を利用するのとは異なり、パワー・タービンから軸出力を取り出し、2段のオートマチックトランスミッションを介して後輪を直接駆動する方式を取っている。

ガスタービン・エンジンは、圧縮機とタービンを駆動しているため慣性力が大きく、レシプロエンジンのように短時間で急激な回転数の増減ができない為、このオートバイの運転には特別なテクニックが必要とされる。

搭載されるエンジンは、ベル 206型ヘリコプターなどにも採用されるロールス・ロイス plc社製のターボシャフトエンジンであるアリソン 250-C18。

ディーゼルエンジン用の軽油を使用できるように仕様が変更されており、320英馬力(238kW)にも及ぶ最高軸出力を発生。

ヘリコプターに搭載した状態でジェット燃料を使用した場合の、同エンジンの最高出力は318英馬力となっている。MTTでは、アメリカ連邦航空局 (FAA) の基準で、航空機用としては使用期限を迎えた中古の同エンジンを購入し、再び組み直した上で使用。

このオートバイの最高速度は、250mph(約402km/h)にも達し、スタートから227mph(365km/h)までの加速にかかる時間は僅か15秒という性能を発揮。

また、バックミラーの代わりとなるリアビューカメラが装備され、フロントのLCDモニターに映し出される構造になっている。

尚、2001年モデル以降の一般的な市販オートバイに装着されているスピードリミッター(300km/hで作動)が、同オートバイには装着されていないのが、元々の設計思想及び、その生い立ちを物語っていた。

「来る——っ」

ファンが指差す方を見れば、正門に詰めている守衛ふたりが、慌てふためき、両開きの門を開けている様子が遠くからでも見て取れる。

まだほんの僅かでしかない、正門の隙間。

その間隙を縫うようにして、銀色の金属の塊が一瞬ですり抜ける。小規模なソニックブームでも発生しているのか、一拍遅れて守衛たちの制服が強風にたなびいて、頭の帽子が後方へと吹き飛んだ。それを見たファンの表情は、ますます輝きを増していく。

「さあ、見せてくれ！ 止まるのか、そのスピードで!？」

次の瞬間、大気を切り裂く程のスクール音が派手に撒き散らされ、アスファルトとタイヤの接地面から、白煙が上がった。

フルブレーキングで制動の態勢に入ったのだ。

最初は小さく見えたその銀の機影は、瞬^{まばた}きひとつする間もなく学園校舎の正面玄関前へと近付いてくる。

「さがりなさい、ファン！ ダメよ、ぶつかる！」

ひとり正面玄関のドアを開けて出て行くファンに、静香の身体を抱き起こしていた瞳子と由佳里のふたりは、悲鳴混じりの声を上げる。

彼女たちの脳裏には、バイクが転倒クラッシュする最悪の結末だけが、映像として映し出されている。

耳障りなスキール音は尚も続き、いくらか減速はしているようだったが、素人目から見ても明らかに制動距離が足りていない。

ファンはそんな走る凶器紛いの機体に向かって飛び出して行ったのだ。

「Y2Kで、二人乗り（タンデム）だと？　ますます普通じゃない。一体ライダーはどんな奴らなんだ！」

ただでさえ、ひとりでも乗りこなすのが難しい大出力モンスターマシンY2Kのリアカウルをわざわざ取り外し、二人乗り用タンデムシートに改造して取り付けてあるのだ。

ファンにしてみればそれは、自殺行為以外の何物にも思えないクレイジーな行為でしかなかった。

だが、そんな常識をも全て覆ってしまう衝撃の光景が、この直後彼女のすぐ目の前で展開する事になる。

「リアタイヤのブレーキを抜いた？　バカな、フロントタイヤがロツクして転倒するぞ」

バイクの前輪のみに全荷重をかけフルブレーキングすれば、必然的に後輪が浮き上がってしまう。

殺し切れていないスピードを考えれば非常に危険な行為で、一歩間違えればフロントフリップの態勢に入り、ライダーは頭から前のめりに振り落とされてしまう事にもなりかねない。

だが、機体のリアが浮き上がってからふたりのライダーの体重移動はまさに神懸かっていた。

絶妙のボディバランスとコントロールを駆使して、浮き上がった後輪を真横に振り出したのだ。

「ジャックナイフターン!? 無理だ! スピードの出しすぎだっ」

ジャックナイフターン、バイクの挙動がジャックナイフの柄から刃が飛び出す瞬間を連想させる事から、この名で呼ばれている技術^{テクニク}だ。

本来ならエントリー向けの難易度でありながら、見栄えのいい技という位置付けなのだが、それは低速域においての話で、減速も程々の状態でこの技に入るのは例えプロのスタントマンでも無謀ではない。

後輪を再び接地させたバイクは、タイヤが盛大に悲鳴を上げ、エンジンの底面部をファンに見せながら、ライダーと機体を合わせた全重量を以て制動をかけられる。

「そうか！ テクニクさえあれば、ふたり分の体重の方が都合が
いいと言っ事か！」

呻くファンを嘲笑うかのように、Y2Kは精緻な拳動のまま、強
引さの欠片も見せずに、最後まで一切破綻する事なく、彼女が立つ
正面玄関前で計ったように完璧に停まり切ったのだ。

「何て……何てデタラメなんだ、このふたり」

喘ぐようにそう言い、それきり言葉を失ってしまったファンの前
で、ふたりのライダーはY2Kから何事もなかったかのように、落
ち着き払った様子で降りている。

乗っているバイクやそのプロ顔負けのテクニクに似合わず、蛍
光色とラメ等で派手にデコレートされた、ヘルメットとライダース
ーツが妙に眩しい。

細くしなやかで、メリハリの利いた、腰の位置がスーパーモデル
並に高い身体のラインは、合皮のスーツ姿にも関わらず優美なシル
エットを描き出し、ふたりが女性である事を強く主張している。

「あー、マフラー死んじゃった。何チヨイスしてもエンジンのパワ

ーに負けちゃうねー。これじゃ次の車検通らないし、公道走れない。また、所轄に出頭命令くらっちゃうかも。どうせ、うるさく言われるんだろうな。雨月姉に揉み消しなんて不正頼めないし」

「仕方ないよ、花織。女でY2K乗ってるのなんて、あんたくらいだし。何かあったらすぐに呼び出されてあたりまえ。でもそうね、今度はオリジナルのマフラー作ってみようか、わたしが投資してるいい町工場紹介してあげる。そんな処の方がね、案外いい仕事するって事を教えてあげるから」

「あー、最近NASAが頭下げて取引申し込んで来たんだっけ」

「そーそ、知る人ぞ知る存在な訳」

「菜摘がそこまで言うなら、任せるよ。好きなようにしてくれていいから」

ふたりはフルフェイスのバイザーを跳ね上げ、横に並んで、ゆっくりとファンの方に向かって歩いてくる。

さっきまで酷く張り詰めていた自分がバカらしくなってしまう程に、ふたりが交わしている会話には緊張感の欠片もなく、ファンは拍子抜けすると共に自嘲の笑みを浮かべるしかない。

「あなた達、当学園に何用ですか？ 外部の関係者以外は事務局で手続きを」

静香を由佳里に任せ、ファンの後をひとり追ってきた瞳子の声に、彼女は自分の立場を思い出す。

「いや、その前にヘルメットだろう。ヘルメットを脱いで顔を見せる」

ファンは無理矢理にも冷静さを装い、何とか普段どおりの声を出す事に成功する。

「あ、ごめんねー、今脱ぐから。別にそんな怪しい者じゃないよ」

「朱理花織と恵那菜摘、今日付けでこの学園に赴任してきた教師よ。担当教科は何でもできるけど、たぶん英語と音楽になるはず、これからよろしくね」

答えながらヘルメットを脱ぎかけるふたりに向かって、ファンも興奮を押し殺して、言葉を返す。

「Y2Kか、いいバイクだな」

銀の機体を横目で見てみると、鎮まりかけたファンの心が再びざわめきだす。

先にヘルメットを脱いだメインのライダーは、少し意外そうな声を上げ、人懐こい笑顔を浮かべると、眩いばかりの美貌をファンに向けてくる。

「へえー？ なかなか、分かってるじゃない。あなた学年は？」

「さ、三年生だが」

見つめられた瞬間、胸の鼓動が不意に跳ね、冷静さを装い続けるファンの仮面にも、小さな綻びが入る。

そんな自分自身に彼女は舌打ちをしたくなるのを、ぐっと堪えた。

「バイクの免許持つてる？ 大型自動二輪持つてるなら、貸してあげてもいいわよ。あのじゃじゃ馬を乗りこなす自信があるならね。ケガは一応自己責任で」

「本当か。わたしは一年休学しているからな、大型自動二輪なら持っている。去年、十八の誕生日を迎えてすぐに取りにいった」

生徒手帳で年齢を確認すると、先にヘルメットを脱いだライダーは、手にしていたバイクのキーのホルダーに人差し指を引っ掛け、くるんと一度回転させてからファンに向けてそれを放った。

「そ。じゃ、“あの子”お願い。どっか邪魔にならない場所へ移動しておいて」

「……………」

「あれー？ 返事はあ？」

顔を間近に覗き込まれたファンは、この時ようやく、いかに自身が動揺していて、興奮していたのかを思い知らされていた。

そして同時に、自らの目がいかに曇り切っていたのかも。

首筋を伝う、嫌に冷たい汗を感じながら、彼女はようやく息を吐くようにして言った。

「始祖のお二方には、ご挨拶が遅れました無礼をお許しください。華月宮学園生徒会執行部はこの度のご着任を心よりご歓迎申し上げます」

10—1 集結、ふたたび（後書き）

今後しばらくプライベートが忙しくなる予定です、なるべく維持していくつもりですが、その間は更新ペースが若干落ちるかもしれません、その際はどうかご容赦くださいませ。

10―2 集結、ふたたび

夏の日射しにはまだ遠いこの季節にも関わらず、その部屋では天井カセット型の空調機がフル稼動で運転していた。

実利と機能性を優先させた無機質なその部屋には、シルバーメタリックの質感を持つ、アルミ鋼スチールの質感がよく似合っていた。

部屋の主が座るデスクを始めとする室内の什器備品類全てが、硬質なシルバーメタリックのイメージでまとめられている。

室内を構成する四面の壁には、ブラインドの降りた窓枠と、二箇所あるドアの部分を除いて、やはりシルバーメタリックのスチール製ラックが組まれ床面から天井までを埋め尽くす。

ラックにはルーターによって統括された、ハイスペックを追求した法人用サーバーマシンやPCのHDDが数十台鎮座し、それぞれの筐体から微かに響いてくる駆動音や冷却用ファンのモーターが回転する音が混じり合い、独特の低い唸り音を上げている。

各マシン間はそれぞれ、複雑に絡み合う各種ケーブル類が連絡しあっている。

さらには、床もまたアルミ鋼製スチールの二重床が組まれ、隙間スリットからは、蛇のようにのたうち走っているコード類が覗いているのが見て取れる。

知識ある人間が見れば、この室内に構築されたサーバーシステムには、億単位の巨額の費用が注ぎ込まれている事がすぐに分かるはずだ。

だがこの部屋はIT企業のオフィスでもなければ、一部上場企業内のサーバールームでもない。

そこは、私立華月宮学園の学園長室と呼ばれている一室だった。その部屋の中央部、場違いな雰囲気醸し出している応接セットのソファ―にちょこんと座る制服姿の白い少女がひとり。

彼女は目の前のローテーブルに置かれた紅茶が注がれたマイセンのティーカップに、一度も手を伸ばしてはいない。

琥珀色したお茶と、柑橘系の芳醇な香り。

ベルガモットの落ち着きある芳香が、カップの中身がアールグレイである事を教えてくれる。

彼女は微かに覚え始めた喉の渴きを潤す欲求に、もうかなりの時を耐え続けていた。

お茶を出された時に学園職員から丁寧に勧められた事から、別にティーカップに手を伸ばしても何ら問題はないはずだとは思ったが、同時に出された、“もうひとつのティーカップ”の中身が一向に減らない以上、やはり自分ひとりだけが先にカップの縁に口唇を付けるのはためらわれてしまう。

何時果てるともない静寂。
張り詰めていく緊張の糸。

沈黙だけが、ただ続いていく時の流れに耐えかねて、安曇野夕陽は思わず声を上げた。

「あ……あのっ」

だが、後続く言葉が見つからない。

かけるべき言葉がなかったからではない。

むしろその逆で、ひさしぶりの再会に思いがけない程の想いが、
とめどなく溢れてきたからであった。

どんな言葉を選んでみてもこの場の状況にとっても相応しいとは思
えず、どんな言葉を選んでみても自分の気持ちを上手く表現できそ
うには思えなかった。

沈黙が続く、その室内で腰を下ろしている人間が後ひとりいる。

安曇野夕陽本人の他に、夕陽が雨月という姓だけを知る、姫たち
の長姉。

何も分からぬまま、連れて来られたこの部屋の主たる彼女に、室
内に入る事を許されたのは、夕陽ただひとりだけだった。

当然ながら、一時的にとはいえ夕陽から目を離す事になる為に、
朧たちは散々渋って見せ、強硬に抵抗したのだが、相手はあの由布
院楓でさえも一目置く人物である。

見事な交渉術ネゴシエーションを展開し、朧たちが自ら身を引くまでに擁した時間
は、意外な程までに僅かではなかった。

悪く言えば、朧たち自身にもよく分からぬうちに丸め込んでしま
ったのだ。

それは、事の成り行きをすぐ間近で見ていた夕陽でさえも、舌を
巻く程の見事さだった。

「ああ、すまないな、安曇野夕陽。悪いが、もうあとほんの数分程
待ってくれないか？ 何よりもきみの事を優先したいんだが、組織
の長おさとしては、なかなかそういう訳にはいかなくてな。どうしても
リアルタイムでしか対処できない仕事を片付けるまでは、今はこの
とおり手が離せない」

「え？ あの、そんなの全然……」

学園長室、その窓際に置かれている重厚なアルミ鋼製のデスク上には開かれたノートPCが五台置かれていた。

姫の長姉たる学園長は、そのノートPCのキーボードを手許を全く見ないブラインドタッチで、高速タイピングを一瞬の遅滞もなく続けている。

さらに驚くべきは、右手と左手で、同時にそれぞれ別のノートPCを操作し、さらには五台全ての液晶画面に、流し見ながらもせわしなく視線を走らせている事実だった。

むろん、デスクの片隅に追いやられている、中身が減らないままのティーカップの存在感は薄く、見向きもされない。

この状態を彼女は、朧たちと相対した時からずっと続けているのだ。

つまり彼女にとっては、朧たちをあしらう程度は仕事のついでのほんの片手間の、まさに見戯にも等しい些事さじだったという事でしかない。

「朧が言っていた、風紀委員と生徒会執行部の間に生じた軋轢あつれきの件は何とかしよう。しかし、頭ごなしに行くのは少々不味い。そうだな……生徒会執行部をこちら側に寝返らせるか。その為に必要な材料もつい先程手に入れた事だしな。元々は些細な誤解が事の発端だから、こちらは何も問題はなかるう。問題は風紀委員というより簞だが、おたがいに牽制しあってくればそれぞれが表立って下手な動きができなくなる。むろん、無用のトラブルは避けられるよう、

誰か妹をひとりサポートに付けなければなるまいな」

「ありがとうございます。あの……おれの事なんか後回しでいいですから、先にお仕事片付けてください」

学園長がノートPCの液晶画面から目を離さないまま言葉を紡ぐと、夕陽は自分が仕事の邪魔にならぬよう、ただひたすら祈りながら返事をする。

まるで、そんな夕陽の健気な気持ちを見計らったかのようなタイミングで、それは起こった。

「……………ん」

会話の間ですらずっとタイピングされ続けていた学園長のしなやかで細い指先が、不意に止まったのだ。

視線も液晶画面から外れ、彼女の瞳は虚空の一点を見つめている。

「気のせいか……いや、やはり間違いない。確かに聞こえる」

夕陽には学園長が何を言っているのかは、全く分からなかったが、

その意味する処はすぐに知れる事となる。

「朱理と恵那か……あんな速いだけ取り柄の非実用的なバイクを通勤に使うとは何を考えているんだ。しかもだ、にも関わらず出勤時間はとうに過ぎている。全く救いようがないな。おとなしく芸能活動が続けていればいいものを。何時ものように、後始末を押し付けられた妹達がいい迷惑だろう」

遠く、周波数の高い金属音が響いたかと思うと、その音源があったという間に近付いて来るのが夕陽にも分かった。

ジャンボジェット機が離発着を繰り返す、空港の待合ロビーでもこれ程の騒音とは無縁のはずだ。

誰もがきつと、そう思うに違いない。

「これは……規制値の93dbデシベルなどというレベルはとうに超えてしまっているな。全く朝から騒々しい事だ。エンジンの排気圧に耐えきれず、サイレンサーが死んだか。グラスウールを触媒に使う限り、何度リペアしても結果は同じだろうな。恵那が付いていながら、不甲斐ない。ふたりでひとりだというのに、これでは一緒にいる意味がない」

最早、学園長が洩らしたその呟きも夕陽に届く事はない。

“騒々しい工場内部”という具体的な騒音レベルが90^{デシベル}dbである事を思えば、いかに法外な音が無意味に撒き散らされているかが分かるだろう。

こうなると最早、音の暴力と言い切ってしまったても過言ではない。実際、音圧の影響により、窓硝子が微かに振動を始め、ティーカップの液面には波紋が立っている。

このままでは振動したソーサーごと、ティーカップがテーブル上で移動し始めるかもしれない。

そう思う事は、決して想像過多ではないはずだ。

「決まりだな、ペナルティーだ。この学園での安曇野夕陽の面倒は、あのふたりに任せるか」

最もこれではペナルティーの意味にはならないか——と、愉しげに微笑み、学園長はようやくティーカップに手を伸ばすと、安曇野夕陽の前に置かれたティーカップもまた手付かずなのに気付き、謝罪と共に改めて紅茶を勧めた。

「……………っ！」

だが、両手で耳を塞いでいた夕陽に、やっと訪れたお茶の時間を楽しむ余裕など、全くなかったのは言うまでもない。

10―2 集結、ふたたび（後書き）

更新が大幅に遅れてしまい、大変申し訳ありません。

拙作を楽しみにして頂いてる読者の方たちに、何とお詫びすればいいのか言葉ありません。

ただ、作者の新生活が落ち着くまでは今回のような不定期更新が続く事になります。

作者が今の環境に慣れるまで、どうか大きな気持ちで次回更新をお待ちくださいませ。

応援の意味も兼ねて、お気に入り、評価ポイント、感想入れてくだされば、たいへん励みになります。

図々しいお願い事だとは思いますが、寂しさに負けそうな作者に、どうか暖かな励ましを――。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2938q/>

MTF症候群（メタモルフォーゼ・シンドローム）

2011年9月29日07時17分発行